
ウツロイダマ 2 復讐者たちの宴

蔵畑 啓吾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウツロイダマ2 復讐者たちの宴

【Nコード】

N3886K

【作者名】

蔵畑 啓吾

【あらすじ】

リリーネという新たな旅の仲間とともに、聖封教会の本部へと向かうギルダスとリゼッタ。

その道中、三人は教会の指示でとある集落に立ち寄ることになる。集落の住人である『フェルカの民』は、その特異性から土地を治める領主と対立していた。怨恨と憎悪が交錯する両者の争いを止めるべく、ギルダスたちは動き出す。だが双方の抱える感情は、決して話し合いだけで解決できるものでもなく――

少年の肉体に魂を宿した傭兵が主人公の異世界ファンタジー、第

三
作。

登場人物・その他用語集

順次、追記していきます。

登場人物

ギルダス・ソールド

金で荒事を引き受ける傭兵。依頼主であるリゼッタについて、大陸各地を巡る。

とある事件で本来の肉体を失い、現在は十四歳の少年の体にその魂を宿している。燃えるような赤い髪と、額にある傷跡が特徴。

擦れた言動とは裏腹に、傭兵としてのプライドは高い。

精錬者。灰色の刀身に、黒の斑模様まだひを散らした曲剣を使う。またそれ以外にも、器である少年の魂精装具ソレストも限定的に使用可能。

特殊な状況下の中で、多くの制約を抱えている。

リゼッタ・マルフィン

聖封教会の司祭にして、ギルダスの雇い主の女性。

良い意味での人間離れた容姿の持ち主だが、本人にその自覚はない。金髪碧眼で、表情によっては十代後半にも二十代にも見える。大陸各地を回って、自身に与えられた役割を果たしている。

普段は感情を伏せているが、本性は激情家で、それを取り繕つくろうように無表情でいることが多い。また、感情を抑え込む仮面を持ち、それを着用することもある。

ギルダスに新たな肉体を与えた張本人。そのことに責任を感じ、またそれ以外の意図もあつてギルダスと行動をとにする。

リリーネ

『背信の町』フォルテンの出身で、リゼッタに秘めた力を見いださ

れスカウトされた十三歳の少女。

青みがかった黒髪と、伏せられていることが多い黒瞳の持ち主。親に捨てられた経緯から、内向的で自虐的な少女として育ち、何か悪いことが起こると自分に理由があると思いこんでしまう性格をしている。

自分にはないものを持っているギルダスに、憧れに近い感情を抱いている。

現在はリゼッタとギルダスについて、聖封教会の本部に向かう途中。

道化師

自らを“道化師”と名乗り、人の苦しく姿を見て喜ぶ^{きょうたうくか}享樂家。

その姿は無地の仮面と黒衣で覆われ、性別や年齢すら定かではない。

フォルテンで策謀をしかけ、多くの人間を混沌の渦中に巻き込んだ。

ギルダスに興味を持つ。

その他

魂^{ソレスト}精装具

“人の魂が具現化したもの”とされる武具。特殊な形状や、個性的な色合いのものが多い。

また、通常の武具ではありえない特殊な能力を発現する物もあり、それぞれに多彩な性質を持つ。

精錬者^{ソレスト}

魂精装具を生み出し、操る者たちの総称。

聖封教会

リゼッタの所属する宗教組織。

ソレスト

魂精装具を“神から授けられた奇跡”と定義し、それを生み出す精錬者の管理と監視を目的とする。

創立されてからそれほど建っていないにもかかわらず、大陸各地に強い影響力を持つ。

序

望みを失い、絶望に蝕^{むしば}まれた人の心――

月もなく、星明かりすらも雲に隠れた夜――

それらに対して人々は、“闇”という呼称でもって表してきた。

闇は辛く、恐ろしい。闇に直面すれば、道を見失い、動く気力を振り絞ることもままならなくなる。

それでも、それはあくまでほんの一時のことにすぎない。

絶望に明け暮れていても、新しい希望を見つけ、あるいは流れる時が絶望を薄れさせ――

明けない夜はなく、どんなに厚い雲も星々の瞬^{またた}きを完全に遮ることはできない。

陳腐な物言いだが、人はそうやって生きているし、世の中はそうして回ってきた。

夜の闇も、心の闇も――闇はいつでもすぐそばにある。だからこそ、うまく折り合いをつけて付き合わなければならない。

目をそらし続けていれば、ほんのすぐそばにまで闇は近づいてくる。いたずらに闇を否定すれば、逆に闇に呑^くまれかねない。

自らの抱えた闇を理解せず、心の闇に囚^{とら}われたまま抜け出せなくなる者もいる。

闇に囚われ、引きずられたまま、自らを傷つけ、あるいはその衝動を他人にぶつけ――

結果的に彼らは、闇を抱えたまま滅びの道を歩むことになる。

多くの人々は闇の存在に耐えられない。すぐそばにあることは受け入れられても、常に自らの内に従えることなどできはしない。

だがこの世には、まれに根本的に“違う”存在がいる。

闇に引きずられるのではなく――

闇を受け入れるのでもなく――

闇をねじ伏せ、我がものとする。
衝動ではなく理性によって闇を行使する。

——夜の闇よりも深い闇が、そこにはあった。

——全てが闇に閉ざされた空間だった。

風がなく、また日の光も月明かりもないことから屋内であることに間違いはない。

だが、天井も壁も、床すらも闇に阻まれて見えない。一片の光も射し込まない、常人なら一時間も保たずに発狂するだろうその“部屋”に、今は三つの人影があった。

混じりけのない漆黒に、青白い燐光^{りんこう}が灯される。

光源は、円卓の中央——その中空に浮かび上がり、部屋を淡く照らした。

なにも置かれていない円卓の周りには椅子が六脚並び、今ではそのうちの半分が埋まっている。

「これ以上待つていても無駄でしょう」

聞く者を和ませる、穏やかな声。それでいてどこか寒気を感じさせるその声の持ち主は、椅子の一つに座りながら口元に微笑を浮かべた。

「ふむ——」

それに応じるように、仮面をかけた一人が首を傾げる。奇妙な仮面だった。装飾はなく、普通ならあるはずの眼の部分の覗き穴もない。ただ白く、顔を覆うだけの仮面である。

「いやはや、久々の招集だというのに。集まりの悪いことだ」

道化師——彼らのなかでそう呼ばれているその存在は、おどけたように肩をすくめてみせる。

それに反応して、もう一人の大きな体軀をした男が道化師を眼光

鋭く睨みつけた。

「貴様が言うか、道化師。他の者が招集をかけて貴様が来たことなど、数えるほどもなかるうに」

「さて、そうだったかな？」

とぼけた物言いに、男は眉間にさらにしわを寄せる。節くれ立った手が、傍らに立てかけてある剣をつかんだ。

「おお、怖い怖い」

道化師はわざとらしく体を抱きすくめる。男の眉が跳ね上がり、全身から鬼気のような殺意が溢れ出す。

その殺意を、涼しげな声が抑えこんだ。

「“騎士”殿、我々は争うために集まったわけではありませんよ。道化師殿もそのぐらいで。雑談は後でも出来ます。本題に入っただけですか？」

「これは失礼、“舞踏家”殿」

道化師は操り人形のように首をカクンと前に倒して頷いた。“騎士”と呼ばれた男も、苦々しい顔をしながらも剣から手を離す。

「なに、大したことではないのだよ。先日のことだが——新しい“玩具”を見つけてね。そこでだ、その玩具のことは私に任せてほしい」

騎士が鼻を鳴らした。

「また貴様お得意のお遊びか。回りくどい言い方をするな。要するに独り占めしたいから余計な手出しをするなという意味であろうが」
「おや、これは異なることを。騎士殿は遊戯に興を解さないとみえる」
「己に貴様の戯れを理解しろと？ 出来ぬ相談だな」

くだらぬとばかりに吐き捨てた騎士に、道化師は気落ちするでもなく声を弾ませた。

「残念至極——なら、これはどうかかな？」

道化師は立ち上がり、全身を覆う黒い衣を翻す。今まで闇と同化していたその衣は、広がるなり横に斬りさかれた痕をあらわにした。その周囲には黒い汚れが染みついている。

——血痕。

“ 舞踏家 ” と呼ばれた穏やかな声の持ち主が、元から細い眼をさらに細める。

「それは……あなたの言うその “ 玩具 ” がつけたものですか？」

「いかにも。どうかな騎士殿？ 興味を抱いたのでは？」

問われるまでもなく、先ほどまで道化師への不快感を宿していた瞳が、今は熱を帯びて道化師の衣を注視していた。

「……強き者というわけか。だがそれを為した者の素性は、押さえであるのか？」

「さて——」

首を横に倒しつつ、道化師は肩をすくめる。

「せいふうきょうかい聖封教会に関わりがあるということはわかつているが、その一味というわけでもない。言動から察するに、外部の雇われ者のようだが——いささか理解できない部分があつてね」

「と、言うത്？」

「見た目は少年のようだが、あれは本来の体ではなからうね。見た目とは裏腹の、猛々しい魂の持ち主だったよ」

「『魂の転移』の秘術ですか……！ しかしあれが行えるものとなると教会でも限られてくるのでは？」

「そのとおり。生にしがみつく老人たちの、延命の手段となっているあの秘術がなぜ外部の人間に施されているのか——そうした疑問もあるけれど、私はむしろ、“ 彼 ” が新たな体に完全に馴染んでいるその現象の方が興味深い」

「なるほど——」

思案するように時間を置き、舞踏家は頷く。

「ただの戯れではない、と。たしかに珍しい存在ですね」

「承知してくれるかな？」

舞踏家は苦笑して、頭を振った。

「それはあなたの “ 遊び方 ” によりますね。あなたはその存在とどのように関わっていくつもりですか？」

「以前に“種”を仕込んでおいた舞台がある。そろそろ収穫の時期だが、都合のいいことに彼らがそこに向かっていてくれているらしくてね」

「直接出向くつもりですか？」

「まさかまさか」

手を振り、道化師はくく、と薄く笑った。

「前回は表だつて動きすぎた。そのせいで実験はうまく進んだし、あれはあれで楽しめたが、また同じようにするというのがない。今回は観客として、舞台を見守ることにするよ」

「そうしていただければ助かります。我々は、あまり表に出ていい存在でもありませんから」

「それで、今度の“舞台”とやらはどこにある？」

騎士の発した問いに、道化師は体を揺さぶりながら舞台の名を口にする。

途端に騎士は不快気に呻いた。

「強き者どもの土地が、貴様の遊びの場とされるわけか」

「彼らには以前から興味があつたのでね」

そうつぶくと道化師は顔を伏せ、体の揺れを大きくした。

仮面に隠れてその表情はうかがえない。それでも、全身から放たれる喜^{きえつ}悦の気配は隠しようがなかった。

荒々しい音を立てて騎士が、優雅な動作で腰を浮かせた舞踏家がそれぞれにその空間から姿を消す。一人になつた道化師は、それでもまだ体を揺らしていた。

その揺れが、不意に止まる。カクン、と顔を上げ、光も届かず闇に閉ざされた上方を見上げながら、道化師は歌うように言葉を紡いだ。

「さてはて——彼らは今度の舞台ではどのように踊ってくれるのかな？ 憎悪が人を駆り立て、絶望が心を殺し——負の想い渦巻くその中において、彼らはどうあがくのだろう？ いかなる形で幕が下りるにせよ、つまらない結末であつてほしくないものだが——いや

いや、都合の良い展開だけを望むのは、観客に徹^{てつ}すると決めた立場では過ぎた行いというもの——」

口を閉ざし、準備が整った舞台で起こる思いつく限りの結末とその過程を夢想する。

脳裏に浮かぶ他人の嘆き（なげ）も、怒りも、しょせんは娯楽の一部に過ぎない。それどころか、自分のそれすらもまた——

燐光^{りんこう}が消える。果てしなく闇に閉ざされた空間の中で、道化師の愉^{ゆえつ}悦の時間はまだ始まったばかりだった。

1・病床の少女と赤髪の傭兵

日の光には映える彩りも、暗がりの中では本来の色を失う。

あてがわれた家の廊下を歩く少年の赤い髪も、日陰に入ると暗い色を帯びた赤土色に変わり、それほど目立つものではなくなっていた。

内心を表すように荒々しい足音を立てながら、少年は廊下の奥にある扉の前で立ち止まった。

「——おい、入るぞ？」

ぶつきらばうに声をかけて扉を開くなり、途端に顔をしかめた。耳についたのは、苦しそうな吐息——

少年が部屋の隅に設置された寝台に近づくと、横になった少女が眉間にしわを寄せた寝顔を天井に向けていた。

ここ数日まともな食事をとれておらず、そのせいで頬はやつれていいる。青みがかった黒髪もほつれ、艶を失っていた。

この地域でのみ発祥する風土病。大の大人ならただの発熱ですむが、体力のない女子供の場合、下手をすれば死に至る——そう聞かされた時のことを思いだし、少年——ギルダス・ソールドは険しくなった顔を横に向けた。

今では命の危機は脱したが、まだ安静とはいえない。これから数日は続くはずの少女の苦しみを想像すると、なぜか重い息が口をついて出た。

慣れない旅に、気候の変化、住み慣れた土地を離れたことでの気疲れ。少女が病にかかった理由はいくらでも思いつくが、実際倒れるまで体調の変化に気付かなかったのは迂闊だった。

「ギル……ダスさん……？」

喘ぐような声が、耳朶を打つ。

少女——リリーネが、熱に潤む瞳でギルダスを見つめていた。
「よつ」

内心を悟られないように気楽な調子で声をかけ、ギルダスはリリーネを眺めた。

「調子は……訊くまでもなさそうだな？」

「……ごめんなさい」

リリーネはそれだけしゃべると、苦しそうに咳をした。

無言で寝台の横に置いてあった水差しを差し出す。少女は遠慮がちに口に含み、中の水をゆっくりと喉に流し込んでいった。

落ち着いたところで水差しを元に戻し、ギルダスはリリーネを見下ろした。

「謝んな。それで治るわけでもねえだろうが」

「ごめん……なさい」

「だから謝るなって……チッ」

怒っていると誤解したのか、少女の目尻に滴が溜まっていく。

ギルダスは発作的に背を向けた。そのまま開いたままの戸口をくぐろうとして、

「あ……」

リリーネのすぐるような声に足を止めた。

一度止めてしまった足は、今度は振り向くために動いた。

「ああっ、くそ！」

髪をかきむしりつつ、ギルダスは寝台に歩み寄る。すぐそばまで寄ると、苦虫を噛みつぶしたような顔で言い放った。

「寝るまでいてやる」

「え……？」

「その代わりだ、早く治せなんて言わねえ。いいか？ どうせ治すんだったら完璧に治せ。あとでまたぶっ倒れたりしたらたまらねえからな」

一気にまくしたてると、リリーネはきょとんとした顔になった。

「おい、聞いてんのか？」

「は、はい……」

上擦うわすった声を発した少女の顔が、みるみる赤くなっていく。

(……また熱が上がったか?)

首を傾げるギルダスから、リリーネは顔を隠すように頭まで毛布を引き上げた。

「あ……あの、ありが……」

「ああ? なんかつたか?」

「い、いえ……なんでも……ないです」

毛布の下から吐き出されるか細い声を、ギルダスは聞き逃した。なんと言ったか聞き出そうとしたが面倒になり、ギルダスは備えてあった椅子を引き寄せると乱暴に腰を下ろした。

よほど体力を消耗しているらしく、それほど経たずにリリーネは眠りについた。最後に穏やかな寝顔を見届けてから、ギルダスは足音を忍ばせて部屋を出る。

「つたく、らしくねえことしてんなあ、俺……」

額にある傷跡をなぞりつつ、深い息を吐く。

旅の連れではあるが、特別親しいわけではない。借りがあるわけでもないし、ましてや傭兵稼業の依頼人というわけでもない。病にかかったからといって気にかける筋合いもないが、かといって放っておく気にもなれない。

はつきりしない気持ちにひっかかるものを感じたギルダスは、頭を振ってもやもやした感情を追い払った

リリーネが病にかかったのはたまたまであって、この地にきた理由は別にある。小娘一人にかかずらっているわけには――

「……あん?」

ふと、ギルダスは自分に向けられた視線に気づいた。視線の元を探ると、廊下の奥に一人の女が立っている。人形めいた整った容姿に、純白を基調としたゆったりとした衣装。

表情によつては十代の後半にも見える女だが、落ち着いた眼差しを向ける今の雰囲気は、二十代半ばのように思えた。

ギルダスにとっては見飽きたとも言っていた相手だが、年齢も含

め、未だに知らないことのほうが多い存在でもある。

もつとも、知らなくても特に不満はない。知らなくてもいいことだし、過ぎた知識というのは往々にして足かせにもなりえるということも知っているから。

(……ひよつとして、聞かれてたか?)

気まずさを隠しつつ、ギルダスは自然な態度で声をかけた。

「リゼッタ……いつからそこにいた？」

ギルダスの雇い主にして、聖封教会の司祭を務める女——リゼッタ・マルフィン是指を立てると、それを唇に添えた。

ひとつ頷き、その指を窓から見える外に向ける。その意図を察し、ギルダスはリゼッタのあとについて屋外へと出た。

陽光が暗がり慣れた目を刺激する。手の平を額に添えつつ、ギルダスは向きなおったリゼッタと目を合わせた。物憂げな色を宿した瞳——小ぶりの唇が、そつと疑問を吐き出す。

「リリーネの容態はどうでしたか？」

「まだ熱がひかねえ。動くのは当然無理だろうな」

「そうですか……」

伏せた瞳が、痛ましさを宿す。続く沈黙に気まずさを覚え、ギルダスはそれを誤魔化すように口を開いた。

「ここの奴らからもらってる薬……あれは本当に効果あんのか？」

「そのはずです。現にリリーネは意識を取り戻しました」

「そりゃそうだが……」

「どのみち私たちに出来ることは、彼女の無事を信じて待つだけ——焦って治るものでもありません。落ち着いて、もう少しだけ様子を見ましょう」

淡々と言うリゼッタを、ギルダスを怪訝そうに見つめた。

なにか？ という疑問がその顔に浮かび、ギルダスは思ったことを口にする。

「おまえ……心配してるわりに落ち着いてるな」

「すぐそばに落ち着きをなくしている人がいれば、かえって冷静に

もなります」

思いもよらぬことを指摘され、ギルダスは目を見開いた。次いで、不機嫌そうに眉を寄せる。

「別に焦っちゃいねえさ」

「そうですか？」

「“魔装具”を探しに来たわけじゃねえんだ。あいつの力が必要になることもねえだろうよ」

聞きようによっては冷酷ともとれる言葉だったが、リゼッタの反応は冷静そのものだった。

「素直じゃないですね」

「はア？ なに言ってるやがる」

「焦っていないなら、なんでそんなに苛ついているんです？」

「苛ついてなんざ——」

自分でもわからなかった感情の正体を言い当てられ、ギルダスは吐き捨てたい衝動を途中で抑えこんだ。

ここで声を荒げれば、苛ついていると自分から認めることになる。それは事実かもしれないが、指摘されたあとにそんな分かりやすい反応を示すのは意地でもごめんだった。

「いや——俺があいつのことで苛ついてるからって、それが本当に“俺自身の感情”じゃないってことぐらい、おまえは知って——」

「本当にそう思っているんですか？」

「……っ！」

今度こそギルダスは絶句した。

まっすぐ向けられた瞳が、胸中を探るようにギルダスの瞳を見据える。

耐えきれずに脇を向いて、ギルダスはふてくされたようにこぼした。

「——知るか」

二人の間に、沈黙の帳が降りる。

代わりに森の奥独特の、鳥の鳴き声や、吹き抜ける風で生まれる

葉擦れの音が場を支配した。

静謐な空間——ただし、その場に漂う空気は穏やかとは言い難い。それを破ったのは、リゼッタの唐突な問いかけだった。

「——ギル。あなたに子供はいますか？」

脈絡のない質問に、ギルダスは一瞬言葉を失う。

「……さあな。孕ませたことぐらいはあるかもしれねえが——」
「はらまつ——！」

うつすらと頬を紅潮させ、幼い表情を覗かせたリゼッタに、ギルダスはうんざりしながら付け足す。

「“前の体”で話だ、商売女相手のな。それより、なんでそんなことを訊く？」

咳払いしつつ、リゼッタは目を伏せた。

「いえ……なんでもありません」

「はあ？　なんだそりゃ？」

納得できない表情を浮かべつつも、脇にそれた会話に気を削がれたギルダスは、そのままリゼッタに背を向けた。

「どこへ？」

「適当にぶらついてくる」

何かを言いかけたリゼッタを遮るように、背中越しに手をひらひらと振ると、

「目立つこたあしねえよ。ここで俺たちがどう見られてるかぐらい知ってるからな」

言うだけ言って、ギルダスはリゼッタとの会話を打ち切り、足を速めた。

どこか落ち着かない後ろ姿を見送りつつ、リゼッタは呟いた。

「言えませんか、こんなこと……」

独りごち、押し殺していたため息をそっと吐く。

——言えるわけがない。

苛立ち、逃げるように立ち去ったギルダスのその態度——

それがまるで、初めて子を持った不器用な父親のようだったなどとは。

2・魔の森

——世界には、いくつもの『魔境』まきようと呼ばれる場所がある。

それは海の真ん中にあり、山の頂にあり、そして——森の奥にもある。

そこに踏み込んだ者を待ち受けるのは、大抵ろくなことではない。忘れられない恐怖を刻まれるか、精神に変調をきたすか、最悪命そのものを失うこともある。

ドーラン辺境領にある『クリアス大森林』もその一つだった。

外縁部はただの森と変わらない。獵師も狩りのために足を運ぶし、すぐそばには薪売りの小屋もある。

しかし、この森のことを知っている者は決して奥にまで足を踏み入れようとはしない。

奥にまで入れば、決して帰ってこれられない“魔の森”——それが、クリアス大森林が魔境とされている由縁ゆえんだった。

「——ま、理由を知れば、なんてこたアないんだがな」

その魔の森の最奥部——“魔境”ただなかの只中にいながら、赤い髪の少年がつまらなそうに鼻を鳴らした。

ギルダス・ソールド——少年の肉体に傭兵の魂を持つ男がつまらなそうにぼやいたのは、リゼッタと別れてからしばらく歩いた後のことである。

「つたく、どこに行っても変わりやしねえ」

足を止め、ギルダスはゆっくりと首を巡らした。

目に入るのは、立ち並ぶ木、木、木——自然そのままに群生した木の数々が視界を埋め尽くす。

どこを向いても代わり映えしない景色に、ギルダスはうんざりしたように息を吐いた。

「ぶらつくって言っても、これじゃあな」

気持ちをまぎらわすような娯楽がなにひとつ見当たらない風景が

目の前に広がっている。その中で一人たたずみながら、ギルダスはひっそりと肩を落とした。

「おまけにさつきからうつとおしいつたらありやしねえ」

枝葉の隙間に見える“本来ならありえないもの”に、ギルダスは目を向けた。

木々に隠れて分かりづらいが、そこには小屋と呼べる程度の建物が立っている。

一つだけではない。ここに来るまでの間にも、いくつか同じような建物を目にしてきた。

そして、その中から感じ取れる穏やかとは言い難い視線——元々機嫌が良くないときに、敵意混じりに視線を向けられておもしろい人間はいない。

（こそこそ覗きやがって——）

殺気をこめて睨み返すと、視線はすぐになくなった。

そうした反応は、まぎれもなく人のものである。

ここ、クリアス大森林の最奥部は、隠者たちの住まう土地だった。人目をはばかるように隠れ住むには、森の奥というのは都合が良
い。

茂る枝が立ち昇る煙を消し、舞い散る葉が足跡を覆い隠してくれ
る。

家屋は木をできるだけ伐採さいばつしないように建てられており、周囲が木に囲まれている家も珍しくない。その様子はどこか人間が木に気
を使っているようで、ギルダスには滑稽こっけいに思えた。

頭上が枝に覆われている影響で、光が差し込む空間はごく限られるが、そのこともそこに住む者の存在を隠すには一役かっている。
もっとも、住み慣れない者にとっては、屋外にいるのにも関わらず日の光を浴びれないということは違和感を覚えることでもある。
それは、ここに来て十日も経っていないギルダスも同様だった。

陰気くさい気分になってくるのだ。

「さて……どうしたもんだかな」

このままだと、落ち着きがない、とりゼツタに指摘された状態のまま帰ることになりかねない。

適当に鬱憤晴らしができそうなものを探しつつ、ギルダスは森の中を歩き回った。

「——ん？」

ふと——その耳が異音をとらえた。

鳥や獣の鳴き声に混じって聞こえるのは水の流れる音——川のせせらぎ。

「……ふん」

鼻を鳴らし、行く当てもないままに足を運ぶと、開けた空間が目の前に広がった。

一面木が生えておらず、川と呼ぶにはささやかな清流と膝下程度の下草が地面を覆っている。

射し込む光が、小川の水面に反射してきらめきを見せた。

「へえ、こんなところがあつたのか」

ここなら昼寝をするのにもいいかもしれない——ギルダスがぼんやりとそんなことを考え、

「ん……？」

目を細めた。

風を切る、かすかな音が聞こえる。細く、鋭く、小さいながらもそれは連続していた。

聞き覚えのある音に、ギルダスは反射的に足音を忍ばせる。

音の元は、すぐに見つかった。

見覚えのある男が一人、小川のそばで棒状のものを振り回している。

若くはない。だが、老けてもいない。

浅く刈った白髪交じりの髪に、深い皺が刻まれた口元は男の積み重ねた年齢を表している。だが、褐色の体はそれを感じさせないほどに鍛えこまれていた。

ギルダスは木陰に隠れつつ、男の決して速いとはいえないその動作に目を見張った。

突き、払い、降り上げる。言葉にすれば単純だが、それらの動きには一切の無駄が排除され、つけ込む隙がまるで見当たらない。

長年の鍛錬でのみ到達できる練達の域――

命のやりとりならともかく、技の完成度を競い合うなら相手にならない――ギルダスの双眸が、だんだんと剣呑なものに変わっていく。

（――殺れるか？）

実際に殺し合うようなことになったら、どう動くべきか――そうした方向には敏感に働く思考に内心苦笑しつつも、ギルダスは男から目をそらさない。

一度“負けている”相手だけに、その目は真剣な色を帯びていた。

男の動きが不意に止まった。

手にしていた得物を下げ、穏やかともいえる表情をギルダスのいる方へ向けてくる。

「悪いが、覗かれるのは趣味ではない。見るのならもっと近くに寄ったらどうか？」

（――気づいてたのかよ）

ギルダスは顔をしかめた。

さっきまで覗かれていた自分が覗いていた側に回っている――そのことにはつの悪いものを感じつつ、仕方なく木陰から出る。

覗いていたことに文句を言うでもなく、男はギルダスが近くまで来るのを待っていた。その表情は、穏やかな微笑を浮かべたままだ。武骨だが、理性も感じさせる微笑である。

（俺にやこんな笑い方は無理だな）

自嘲の思いに、口端が持ち上がる。そうした表情の変化にも、男は反応一つ見せない。

「やはり君か。なにか用か？」

「別に用ってわけじゃねえさ」

警戒を顔に出さないようにしながら、ギルダスはうそぶいた。

「ただぶらぶら歩いてたらここに着いただけだ」

「そうか」

男は追求するでもなく、一つ頷いた。それから思い出したように、
「そういえば、まだ名を言っていなかったな。ジド、という。憶えておいてくれ」

ギルダスは困惑顔でジドと名乗った男を見た。

あと何日ここにいるかもわからない相手、しかも友好とは縁遠い相手に呑気^{のんき}に自己紹介をする男の意図がわからない。

「あ……」

なんと答えるべきかと、中空をさまよっていたギルダスの視線がジドの手にあるもので止まった。

「変わった武器だよな、それって」

ジドが手にした棒状のそれは、槍だった。

ただし、普通の槍ではない。

刃の反対側にあるはずの石突きがついてなかった。大人の身の丈ほどの柄の両端に、穂先になる刃がついている。

そして、色も変わっていた。

一見するとただ黒いだけのそれは、光に当たると緑がかった黒へと変化する。

もちろん、そんなものが普通の武器なわけがない。

『魂精装具^{ソレスト}』——ギルダスの雇い主であるリゼツタが所属する組織

『聖封教会』が、神から与えられた奇跡と定める武具であり、精錬者と呼ばれる能力者たちだけが生み出せる、人の魂の具現化。

ジドの持つその槍は、紛れもなく魂精装具^{ソレスト}だった。

「変わってる、か。珍しい、とはよく言われるが、慣れればこれはこれで使いやすい」

「ああ、そいつは見てればわかる」

小回りが利かず、下手をすれば使い手自身を傷つけかねない武器

だが、ジドにとっては手足も同然なのだろう。

さつき見た素振りには、一切の遅滞は見られなかった

「それで、君の名前は？」

「……ギルダス・ソールド。ギルダスだ。憶えとかなくてもいいけどな」

ジドの微笑が苦笑へと変わる。

「まあ、ちょうどいい機会だ。二人で会えたら頼みたいと思っていたことがある」

「なんだよ」

「君の剣技を見せてもらいたい」

唐突なその頼みに、ギルダスは面食らった。困惑し、眉をひそめる。

「なんでだ？」

「私が見たいからだ」

「それだけか？」

「それだけだ。それとも、それだけの理由ではダメか？」

「ダメかって言われてもな……」

頬を掻きつつ、ギルダスは首をひねった。

本音を言えば——面倒くさい。

「……ああ、ダメだ」

「そうか、残念だ」

ジドはあっさり引き下がった。槍を下げ、本当に残念そうに首を振る。

「一度じっくり見てみたいと思ったのだから」

「そんなもん見てどうすんだよ」

「参考にする」

こともなげに言われ、ギルダスは首を傾げた。

「参考……？　そんだけ強けりや十分だろ」

「武辺ぶへんの道に十分という言葉はない」

ジドはきっぱりと言った。

「それに、君は強い。その年齢でその腕はつきりいつて異常なほどだ。どこでそれほど腕を身につけたか気になるところだが……」
向けられた瞳に、探るような色が混ざる。

同じような目を向けられるのには初めてではない。ギルダスは顔色一つ変えずに続きを促した。

「だが、その前に訊きたいことがある」

「なんだ？ 名前なら言っただぞ」

「そうではない」

わずかにジドの放つ雰囲気が変わった。穏やかな眼差しが、穿つような雰囲気のものへと変わる。

威圧的というわけでもないのに圧迫感を感じ、ギルダスはわずかに後ずさった。

ジドがゆつくりと、口を開いた。

「なぜ“あの時”、本気を出さなかった？」

3・フェルカの民(1)

——時は、七日前に遡る。

ドーラン辺境領、エスタリア街道——

雲一つない晴天の下、その街道を行く三つの人影があつた。

どれも小柄で、遠目にも女子供の一行だとわかる。

とはいえ、さしたる問題があるわけでもない。

エスタリア街道は地理的にクリアス大森林沿いに造られており、その大森林を挟んで先には隣国がある。

大森林の上下の切れ目には国境沿いの砦があり、そこには少ない数の兵士たちが駐在していた。

砦同士を繋ぐ街道は、いざという時の軍事利用も想定され頻繁に整備されている。

ところどころに兵士の詰め所もあり——ともかく、この街道で盗賊などの被害にあつたという話はほぼ皆無だつた。

行き交う人の数も多く、その姿も周囲を警戒しているようには見えない。

もつとも彼らとは異なり——三人の無警戒ぶりは、治安の良さ以外にも理由があつた。

「寄り道はいいんだけどよ」

そのうちの一人、赤髪の少年——ギルダスが、どこか諦念ていねんを含んだ声で旅の共に問いかけた。

「そこでいったい、何やらせる気だ？」

「着いてから話します」

とりつく島のない返答を発したのは、人形めいた容姿の女性——リゼツタである。その答えは半ば予想していたものではあるが、もう少し愛想つてもんがあつても——とギルダスは内心独りごちた。

「ったく、どこに行くかも聞かされてないってエのに……」

「なにか？」

「……なんでもねエ」

無表情の中で唯一険を含んだ眼光を向けられ、口をつぐむ。
歩きながら空を仰ぐその姿は、どこか哀愁を漂わせていた。

「はあ……」

（なんで俺ア、こんなことやってんだろな）

傭兵の自分が、女子供を道連れ——これはいい。護衛は傭兵の仕事としてはありふれたものだ。

問題は、自分の今の姿——誰が見ても大人とはいえない、少年の姿をしているということだ

今の自分を、かつての知り合いが見たら——そのことを想像すると、ギルダスは気持ちが悪むのを抑えられない。そして、彼がなによりも危機感を抱くのは、この現状に何も感じなくなってきたることだ。

慣れている？——それだけだったらまだいい。

認めたくない事実だったが、変わってきているのだ。物事の考え方や、現実に対する受け止め方が。

その証拠に——

ギルダスは少し遅れてきている、もう一人の同行者を振り返った。

「おい、ちよつと待った」

リゼッタに呼びかけて、青ざめた顔で上体を揺らしながら歩く少女に近づく。

リゼッタも少女の様子に気づき、急いで駆け戻ってきた。

「リリーネ、どうしました？」

リゼッタが声をかけ、少女の顔色を窺^{うかが}う。

その様子を見守りながら、ギルダスは違和感を覚えていた。

以前の自分なら、遅れているリリーネに苛立ちだけを感じたはずだ。

だが、今では気遣うリゼッタに同調するような気持ちすら沸き上がっている。

（つたく、どうなってんだ）

自分の気持ちすらままならない。その事実がギルダスの胸中に陰りを落としていた。

「――大丈夫ですか？」

心配そうな声が、三人に投げかけられた。

旅装姿の男が、近づいてくる。

リリーネの様子を見て声をかけてきたのだろう。人の良い一般人といったところか。

だが、その認識はすぐに覆くつがえされた。

男の声色が変わる。

「マルフィン司祭ですね」

心配そうな顔をそのままに、男は声を落とした。目を見張るギルダスをよそに、顔を向けることなくリゼッタに話しかけている。

「教会の者です。このままでお願ひします。どこに監視の目があるかわかりません」

リゼッタは動揺する様子もなく、男の顔を確認するように一瞬だけ目を向けた。知っている相手らしい。

「なにか問題でも？」

「街道の真ん中で立ち止まっていたら目立ちます。木陰へ」

日差しが強いせいだろう。木陰には、他にも休んでいる姿がちらほらと見えた。

リゼッタはリリーネの肩を抱いて、人のいない木陰へと向かった。あくまで見知らぬ他人を気遣う体を装いながら、男もそれについていく。

取り残されたギルダスも慌ててそのあとについていった。

男はリリーネを挟んで、リゼッタと向かい合いに座った。

「それで？」

「町の教会が封鎖されました。司祭を始め、教会の関係者は皆監禁されています。聖封教会の介入を恐れてのことでしょうが……とにかく、彼らとは連絡がとれない状況です」

リゼッタは眉をひそめ、息をのんだ。

「そこまで……」

「ですから、町に行くのは止めたほうがいいでしょう。拘束される可能性があります」

目で問いかけるギルダスに気づいていないのか、リゼッタは黙り込んだ。

何かを考え込む素振りを見せてから、顔を上げる。

「わかりました。それでは直接“現地”に向かいましょう。案内をお願いします」

「私がですか？」

「あなた以外に出来る方がいますか？」

「いませんが……」

男の顔に、初めて素の表情が浮かび上がった。

怯えを含んだためらい——どうやらその案内先は、安穩とした場所ではないらしい。

踏ん切りがつかない様子の男に、リゼッタは取りなすように言った。

「今回の件が終わったら、報告にはあなたのことも含めておきます」

「それなら……」

男は頷いたのを見て、リゼッタがリリーネに声をかける。

「リリーネ、立てますか？」

「大丈夫です……」

顔を上げると、リリーネは控えめに頷いた。

か細い声だったが、意外としつかりとした様子で立ち上がる。

（これなら大丈夫か）

ギルダスが安心すると、男も立ち上がりリリーネに心配そうな顔に向けたまま声をかけてくる。もちろん、話しかけた相手はリリーネではない。

「少し距離を置いて、ついてきてください」

あくまで無関係を装いたいらしい。最後までリゼッタ以外をいなもの扱いながら、男は歩き出した。

先導する男から少し離れて、ギルダスたちも街道を進んだ。その道すがら、ギルダスは小声でリゼツタに話しかける。

「誰だ？」

「聖封教会の密偵みっていです」

「密偵……？」

「情報収集やその伝達などをしている者たちのことです。れっきとした教会の一員ですが、普段は信者や一般人を装っています」

前を歩く男の背中を見たギルダスの口元が、皮肉気に歪んだ。

「神様拝めてるって割にはずいぶん俗ぞくっぽいヤロウだな。手柄になるとわかった途端に手のひら返しやがった」

「教会の神職でも、定義されている“神”を信じているのは少数派です」

「あん？」

嘆くわけでもなく、淡々とリゼツタは続けた。

「神の存在を唱えるのは、あくまで魂精装具ソレストを管理しやすくするための建前——陰ではそう言う者もいます」

「へエ……で、おまえはどっちなんだ？」

何気なく投げかけた問いは、答えられることなく——男が急に立ち止まった。周囲を見渡し、急に向きを変える。その方向を見て、ギルダス是不審げに眉をよせた。

「おい、あっちって——」

「行きます」

リゼツタに促され、ギルダスも渋々歩き出す。

彼らは街道から外れ、まっすぐ森の方へと進んでいった。

「おまえ、俺の前を歩け」

「え……？」

首を傾げたりリーネの背を押して、先に行かせる。そのままギルダスは、最後尾についた。

『魔の森』——クリアス大森林に入ったギルダスの目つきは、その異名に合わせたように鋭いものになっていた。

——緊張感を維持するにも、限度というものがある。

魔の森は、ギルダスの予想以上に広がった。それこそ、張りつめていた気が緩まるほどに。

あまりに代わり映えない景色が続くため、同じところをぐるぐる回っているような気さえしてきている。

案内役の男の足取りから、本当に迷ったわけではないようだが、それでも果ての見えない道というのは精神的に消耗するものがある。前を歩くリリーネの様子をうかがいつつ、ギルダスは口を開いた。「おいおい。さつきからずっと歩き通しだぞ。どこまで行く気だよ？」

うんざりした内心を隠そうともしない口調だった。

もう他人のふりをする必要がないのだろう。男は歩きながら振り返った。

眉をしかめているのは、見た目が子供のギルダスに横柄に声をかけられたかららしい。

「もうすぐだ」

「もうすぐ、ねえ。さつきから進んでる気がしねエんだが」

皮肉がこめられた言葉に、男の尻尻がつり上がる。立ち止まって見下ろしてくる男を、ギルダスは嘲笑うように見上げた。

剣呑な雰囲気けんのんが漂い始める。

「——彼のことは気にしないように。案内を続けてください」

「ですが……」

男の視線が、割って入ったリゼッタに注がれる。その目には、ギルダスの素性を気にするような色がこもっている。

それに応えたのは、いつもよりもさらに硬質な声だった。

「余計な詮索は無用です」

「……は」

男は口をつぐみ、歩みを再開した。

それに続いたギルダスに、歩調を緩めたりゼッタが並んでくる。

そのまま、小声で囁かれた。

「ギル。あなたも挑発するような真似は控えてください」

「そんなつもりはなかったんだけどよ」

肩をすくめてみせる。実際、挑発したわけでもなくギルダスはただ素の態度で応じたただだった。長年の傭兵稼業で擦れた精神は、穏和な対応というものを忘れさせる。

「それより、なんでこんなところに来たのか、そろそろ教えてくれないんじゃないか？」

前を向いたまま、リゼッタは口を閉ざした。それでも、もう黙っている必要はないと判断したとのだろう。

ギルダスにだけ聞こえるように、言葉を紡ぐ。

「私がここに来たのは、争いを止めるためです」

予想とはかけ離れたその内容に、ギルダスは絶句した。それに構わず、リゼッタは続ける。

「正確には、争いをさせないための“盾”となることですが……とにかく、最終的に問題が解決するまでの時間稼ぎが、私がここに来た目的の一つです」

「ちよつと待て。状況がさっぱり掴めねエんだが。……争いだ？
こんなところでそんなもん——」

——ドッ。

「……ひっ！」

くぐもった音の直後、密偵の息を呑んだ声がした。

（——なんだ！？）

リリーネを引き戻しながら、ギルダスは素早く視線を巡らせる。音の原因は、すぐに見つかった。

「なに……？」

「あ……」

同じくそれを目にしたリリーネの震えが、ギルダスにまで伝わっ

てくる。

尻をついた密偵のすぐ前に突き立っているのは――あれは、
“ 矢
” だろうか？

「動くな」

どこからともなく、声がした。

反射的に身構えるギルダスに、同じ声が警告する。

「複数の矢がおまえたちを狙っている。動くと命の保証はできんぞ」

4・フェルカの民(2)

もったいぶるでもなく、声の主は姿を現した。木陰から出てきたのは、褐色の肌をした中年の男である。

男はギルダスたちの順に見つめ、眉をひそめた。

「……おまえたち、何者だ？」

(そいつはこっちの台詞だ——)

内心で言い返しながら、ギルダスは口を閉ざしたまま男を睨みつけた。

男はどうやら戸惑っているらしい。相手のほとんどが女子供なのが気になっているようだった。

困惑しているのはギルダスも同じだった。

声をかけられるまで、音も気配も全くなかった。男の言葉が本当なら、複数の相手に取り囲まれているらしい。それは事実だろう。なにしろ、目の前の男は弓を持っていない。

「私たちは聖封教会の者です」

最初に口火を切ったのはリゼッタだった。

「今回の事態において、あなたたちと話し合いの場を持ちたいと思ひ参りました。集落の長と会わせていただけないでしょうか？」

「確かにその男には見覚えがある」

男は聖封教会の密偵をいちべつ一瞥し、

「いいだろう」

ある程度話についているのか、あっさりと頷いた。

拍子抜けするギルダスをよそに、それでも男はしっかりと釘を刺す。

「集落には案内する。ただし、話を聞くかどうかは、長が判断する。だが、妙な真似をすれば殺す」

「その前に、彼だけでも解放していただけませんか？ 彼は私たちを案内してくれただけです」

「ダメだ」

ようやく立ち上がったものの、強ばった顔をしている密偵を指してリゼッタが放った言葉は、あっさりと却下された。

「その男を逃がせば、この場所を吹聴するかもしれない」
（ふいちよう）

「ですが、教会との繋がりが絶たれるのはあなたたちにとっても都合が悪いことのはずです」

「……それも含めて、長が決めることだ」

これ以上言葉を交わす必要はないとばかりに、男は背を向けた。
「ついてこい」

「——なるほどな。隠れ里ってわけか」

中年の男について歩く時間はそれほど長くはなかった。森の最奥部、そこに木々に紛れて建てられた家屋を見て、ギルダスは納得したように頷く。

税を逃れるため、あるいはなんらかの不都合な理由があつて、人の来ない土地に居をかまえる——そうした者たちが集まってできる集落はさほど珍しいものではない。

人の密集した町にあるような貧民街とは違い、^{スラム}彼らは存在そのものすら知られていない。だからこそ、“魔の森”などという噂が生まれ、人々が姿を消した理由が、魔境だからというだけで納得される。

集落に着いて早々、先導した男は「待っている」とだけ言い残し、姿を消した。

もちろん、解放されたというわけでもなく、いつの間にか姿を現した他の男たちに周囲を取り囲まれている状態である。

（さて……どうしたもんだかな）

しばらくは成り行きを見守ることになるだろうが、場合によっては力尽くで逃げ出すような事態になるかもしれない。

その状況を想定し、ギルダスは周囲を見渡した。

その間にも、木々の陰や家の中から、集落の住人たちがぼつぼつ

と出てきている。

「おいおい……」

ギルダスは呆れたように呻いた。

着いてからそれほど経っていないにも関わらず、今ではギルダスたちを囲む人垣は、十重二十重にまでに膨れ上がっている。

この集落の住人すべてが集まっているのではないかというほどに数の視線が、中心にいるギルダスたちに注がれていた。

好奇心というほど軽いものではなく、敵意というほど明確なものでもない。ただ、警戒しているのは間違いなさそうだった。

リリーネが、ギルダスの裾すそを掴む。顔を伏せてはいるが、それでもどんな表情をしているかは簡単に想像がつく。

（無理もねエな）

大の大人ですら、恐怖を感じて緊張するような状況だ。

あえて振り払うこともせず、ギルダスはリリーネの好きなようにさせ——ある点に気づいた。

「リゼッタ」

「何ですか？」

いつもよりも作った感のある無表情で、リゼッタは応じる。

ギルダスは自分たちを囲む集落の住人たちを見回しながら、その耳に口を寄せた。

彼らのうち、何人かは武器を構えている。

剣に槍、斧、弓——不思議なことに、その種類も形もおよそ共通点がない。それどころか——

「こいつら、まさか」

「考えているとおりです」

一瞬、視線をよこしたリゼッタが頷いた。

「彼らのほとんどは『精錬者』です」

「ほとんど……だと？」

色とりどりの武具を手にした集落の人間たちの中で、ギルダスは顔をしかめて短く呻く。

「いや、こりゃあ……いくらなんでも多すぎるだろ。どうなつてんだ？」

精錬者はそれほど珍しい存在ではない。大きな町にでも行けば、通りを歩くだけで目にもすることもある。

だが、ギルダスたちを囲む数は百人ほど——その中の十人以上が、魂精装具ソレストを持つている。もちろん具現化していない者もいるのだろう。

どちらにしろ、この割合は異常だった。

「この地に精錬者を生み出しやすい理由でもあるのか、それとも他に要因があるのか、はつきりとした理由はわかっていません。ですが、彼ら『フェルカの民』は、以前から精錬者を多く輩出する存在だったそうです」

『フェルカの民』——初めて聞く呼称だったが、それがこの集落に住む者たちを指したものだとはすぐにわかった。

「なるほどな……。聖封教会がわざわざおまえをここに寄越こした理由がこれか？」

魂精装具ソレストを扱える精錬者を監視し、目の届く範囲に置きたがつている聖封教会が、そんな存在を見過すごすはずもない。

ギルダスの問いかけに、リゼッタはあっさりと頷いた。

「そのとおりです。ですが、教会も少し前までは彼らの存在を把握していませんでした」

「あア？ そりゃいったいどういう——」

「何を勝手に喋しゃべっている？」

どこから発せられた怒声が、二人の会話を遮った。

ギルダスは顔をしかめて声のしたほうを振り向く。

人垣を割って出てきたのは、若い女だった。ならしただけの獣の毛皮で褐色の肌を覆おおい、黒の長髪を後ろで束ねている。

露出度の高い装いおんぷりだったが、艶やかさよりもむしろ勇ましさを感じる。見ようによつては山賊のようにも見えるが、その瞳に濁ったところはなかった。

女は殺意のこもった目で望まぬ来訪者を睨みつけていた。

「長が来るまで、大人しくしてろ」

「話ぐらいはいいだろうが」

「黙れっ！」

怒りを剥き出しにして女は叫ぶ。そこまで怒られる理由がわからないギルダスは、困惑したように首を傾げた。

女が瞳と同じ、琥珀色の弓を構えた。

それと同時に女の右手のあたりから、弓と同色の光の粒子がぽつぽつと湧き出る。

粒子は舞い踊るように螺旋を描きながら、やがて一つの形に落ちて着いた。

たった今形成されたばかりの“矢”が弓につがえられ、その鏃^{やじり}がギルダスに向けられる。

「ここであたしがおまえを射殺したとしても、誰も責める者はおらん。なんなら試してみるか？」

そうしたがっている気配を隠そうともせず、女は弓を引き絞った。その目の奥に本気の色を感じ取り、ギルダスは両手をあげる。

「わかったよ。黙ってりゃいいんだろ？」

なんだかわからないが、ここは言うことを聞いておいたほうがいい——その判断に従い、ギルダスは口を閉ざす。

女は何も言わなかった。腕にこめられた力が緩む気配もない。

（なんだ、この女——）

いくらなんでも、弓を引き絞ったままでいるつもりもないだろう。それでも構えを解かないということは——

ギルダスは自分の勘違いに気づいた。

この女の抱く感情は、怒りではなく憎しみだ。それも、相当に根の深い。

初対面の相手に向ける感情としては、明らかに普通はない。

困惑の度合いを深めるギルダスをよそに、女の殺意が、だんだんと強まっていく。

それと同時に、その顔から感情が消えていく。

殺意の固まりになっていく女を見据え、ギルダスは緊張を高めた。放たれた矢がその身を貫くか、虚空を通り過ぎるか——どちらかの結果が出るまで、それほどの猶予はない。

だが、結果はそのどちらでもなかった。

「——ルキア」

張りつめた空間に割り込んだのは、状況をわきまえていないのではないかと思うほど落ち着いた声だった。

その声の主は、人垣を割ってルキアと呼ばれた女に無造作に近づいていく。

剛健——そうした表現が似合う男だった。

鍛えこまれ、徹底的に無駄をなくした体、黒髪のなかに白髪交じり頭を短く刈り込んだその壮年の男は、低い声でルキアに語りかける。

「まだ、決は出ていない」

「ジド……」

怯えたような、怯んだような反応を見せたのは一瞬、女——ルキアは壮年の男を睨んだ。

「こんな時だけ口出しか？ “臆病者”^{おくびょうもん}が」

はつきりと侮蔑^{ぶべつ}の言葉を投げつけられても、男の表情は変わらない。

まっすぐ向けられる眼差しに殺意が薄まり、ルキアは弓をおろした。

「……ふん！」

怒りに燃えた目でギルダスたちを睨みつけ、そのまままた人垣の中に戻っていく。

「……ふう」

ギルダスはため込んでいた息を吐きながら、力を抜いた。

とりあえずこの場でどうこう、という事態にはならず済んだらしい。

顔を上げると、ジドと呼ばれていた男も人垣の中に戻るところだった。

一瞬だけ合ったその瞳に、謝罪の色が混じっていたのは錯覚か――さりげなく足を動かし、ほとんど口を動かさずにささやく。

「こいつらも一枚岩ってわけじゃなさそうだな」

リゼッタは軽く頷き、かいた汗を隠すようにその手を握りしめた。『フェルカの民』と呼ばれた彼らがどういった問題を抱えているかは今はわからない。

そして、ここに来た目的も未だ完全に理解していない。

だが、その目的を果たす上で彼らの問題には関わらないですむと思うほど、ギルダスは楽観論の持ち主ではなかった。

5・フェルカの民(3)

「決は出た」

朗々とした声が、あたりに響く。

年齢にしては精気に満ちた老人が、胸を張ってゆつくりと首を巡らせた。

人垣を割って姿を現したその老人は、ギルダスたちを集落にまで連れてきた男を背後に従えていた。

彼が“長”なのだろう。集落の住民たちは裁定を待つようにおし黙り、言葉の続きに耳を傾けている。

「我らにとつては力こそがすべての理^{ことわり}。ゆえに、今回もそれを元に客人たちの処遇^{しよぐう}を決めることとする」

老人は眼光鋭くある一点に視線を移した。

「ジド、前へ」

求めに応じて、壮年の男が出る。つい先ほど揉め事を収めたばかりの男は、眉を寄せて苦い顔をしていた。

「この男は我らが同胞の中で最も強きものだ。おまえたちには、この男と戦ってもらう。代表を一人出せ」

ギルダスたちに向けて、長が言い放った。

途端に周囲がざわめく。

意味が分からず、ギルダスは眉を持ち上げた。

「どういふこつた……？」

同じく事情を呑み込めないリゼッタが、密偵の男に視線で問いかけた。

「……戦いにおける“強さ”が、彼らにとつて最大の価値観なんです。ですから、何か問題が起こった時は、その“強さ”で解決する場合が多いと聞きます。今回もそうなのでしょう」

強張った声の説明を聞き、ギルダスとリゼッタは視線を交わし合う。

「つてことは……」

「あなたの出番ですね、ギル」

「そうみたいだな」

頷きながら苦笑し、赤髪の傭兵は一步前へ出た。

力こそ全て——ある意味傭兵にも通じるその理屈は、ギルダスにとっては非常にわかりやすい。

「おまえか」

「ああ」

問われるままに頷き、ギルダスは軽く肩を回した。

ざわめきに嘲笑が混じる。それがどういう意味なのか——考えるまでもなくわかった。

「正気ですか!？」

悲鳴じみた声をあげ、密偵がりゼツタに詰め寄る。

「あんな子供に、我々の命を預けるなど——」

（よし、あとでぶん殴る）

背後の喚き声を耳にしながら、ギルダスは密かに決意を固める。

相手が何者であれ、結果は変わらないと思っているのか、長の声に揺らぎはなかった。

「この男が歯牙にもかけぬようなら、おまえたちの話は聞く価値すらないということだ。よいな？」

「良いも悪いも、ここまできたらやるこた変わらねェんだろうが」

軽口で応じ、ギルダスはジドと呼ばれた男に向き合った。

「ま、そういうこった。お手柔らかに頼むぜ」

口角をつり上げて笑う。

ジドはしばらくは眉をひそめていたが、やがて渋々といった様子ですぐそばにいた集落の住人に手を伸ばした。

「剣を貸してくれ」

魂精装具でもない、単なる普通の剣——それを受け取ると、具合を確かめるように素振りを始める。

目を細めてその様子を見ていたギルダスは、区切りをつけるよう

にして右手を前へと伸ばした。

自身の右手の先に、あるべき物の形を想像する。

虚空から、いくつもの光が生み出され始めた。

その色は、黒と、灰。

灰色の粒子がギルダスの手元から徐々に結集していく。柄つかから

鐔つば、鐔から刃、そして切っ先へと一つの剣を象っていく。黒の粒子がいくつも寄り集まり、刀身に彩りを添える。

光の乱舞が終わった後には、黒の斑模様まだらもようを散らした灰色の剣がギルダスの手に握られていた。

反りのある重厚な刀身に残った光隣をひと薙ぎで振り払い、ギルダスは腰を落とした。

赤い髪ソレストの少年が生み出した魂精装具に、ざわめきが一瞬、途絶える。

（——侮あなじっているんだったら、それでも構やしねえ）

静寂が、向き合った二人の間に緊迫感を生じさせる。

（その間にケリをつけるからな）

土が跳ねた。

その土が再び地面に落ちる前に、姿勢を低くしたギルダスが一気に間合いを詰める。

重い剣を持つているとは思えない速度のまま、その半身が捻られる。

体を動かす力が脇に下げた曲剣へと伝わる。

同時に動きを止めるために突き立てた左足が“溜め”の形を作り、曲剣をさらに加速させた。

切っ先が地面にぎりぎり触れない軌道を描き、纏う風を切り裂いて目標へと迫る。

その斬り上げの一撃は——空を斬る。

上体をのけぞってかわしたジドの体には、かすりもしない。

剣の勢いに引きずられて、ギルダスの足が浮き上がった。

それに逆らうことなく、ギルダスは頭上で手首を翻ひるがえした。切っ先

が弧を描く。

斬り上げとは対称の軌道の、頭上からの斬撃。浮き上がった体が沈みこむ勢いそのままに、不安定な体勢の敵に曲剣を振り下ろす。

肩から入って斜めに斬り裂くその一撃は、浅い。少なくとも、死なない程度には。

（それでいい）

狙い通りの展開に、ギルダスは口元を歪めた。

最初から殺すのが狙いではない。殺さず、しかし決着と見なされる程度の傷を——今の状況で求められる成果はそれだった。

魂精装具ソレストの能力は使わない。今の段階で手の内をさらすのは、まだ早すぎる。

最小限の労力で、定められた目標を果たす。

そのやり方に則のっとって繰り出した不意打ちの連撃、必ず当たるはずの二撃目は——

（——！？）

虚空を斬っただけで終わった。

「なっ……」

いつの間にか、男は間合いの外にいた。

足を引き、同時に半身を引いている。

斬撃よりわずかに速く、それを実行したのだろう。

それはすぐにわかった。問題は、いつそれをしたのかわからなかったということだ。

振り下ろした曲剣の切っ先は地面にめりこんでいる。隙だらけの体勢だった。

（まズった——）

ギルダスの脳裏に、防ぎようもない攻撃を無様に受ける自分の姿が浮かぶ。

苦肉の策として、魂精装具ソレストを手放して距離を取ろうとし——

「……？」

ジドは動かなかった。間合いの外にいて、じっとギルダスを見つ

めているだけだ。まるで——何かを計るように。

怪訝な顔で魂精装具ソレストを構えなおすギルダスの周囲では、観客と化していた集落の住民たちがさわめいていた。

目の前で起こった現実が信じられないように驚き、目を丸くしている。

リリーネは強張った顔で唇を震わせ、リゼツタは目を細めて厳しい顔つきをしていた。

「ほっ……」

ジドの引き結ばれていた口元が、微かにほころんだ。

「すまん。どうやら侮っていたらしい」

「できりやあそのまま侮っていてほしいんだがな」

多少の実感をこめて、ギルダスが応じた。その口元はわずかにひきつっている。

「それは止めておこう。こちらの身が危うくなりそうだ」

借りられたばかりの剣が地面に突き立てられる。

「これからは、本気でいく」

ジドの周囲から、光の粒子が出現する。

否——

それは光の縁取りをされた、闇というべき存在だった。

渦巻く“闇”が一つの形を為すまでに、それほどの時間はかからないはずである。

「させるかよ！」

わざわざ相手の準備が整うのを待つ理由などない。

土が勢いよく宙を飛ぶ。

踏み込んだ際に地面にめりこんだ足を、蹴るように跳ね上げた結果だった。

それが飛礫ついでとなってジドの顔を襲う。

遮るように腕を上げた隙について、ギルダスは踏みこんだ。

接近しながらの横薙ぎの斬撃が、ジドの胴体へと迫る。

手加減なし、殺すつもり of 剣撃は後ろに下がってかわされた。

剣の勢いにつられて体が回転する。その勢いを利用して、ギルダスはさらに前へと踏み込んだ。

二人の距離が縮まり——剣の間合いのさらに内側に入った。剣を握ったままギルダスが繰り出したのは、肘だった。

——ガッ！

ギルダスの口から、獣のような唸り声がこぼれる。

当たれば肋の一本も砕くであろう肘打ちは、最悪の形で止められていた。

「危ないな。やはり、油断はできん」

ジドの手に血管が浮き上がり、その掌中にある肘が嫌な音を立てて軋む。

「っ……痛い、だろうがっ！」

とっさに背中にした手で、隠し持っていた短剣を抜き放つのと同時に、肘を固定していた手が離された。

代わりに太股を狙った一撃はかすりもしない。

痺れる二の腕を押さえつつ、ギルダスは跳び退いた。

とはいえ、舌打ちを抑えきれない。

ジドの手に握られているのは、ひと振りの“槍”だった。

半身で脇に挟むようにして構えてうまく長さを隠しているが、それでもその程度の判断はつく。

間合いの有利がある反面、一度懐に入られれば一方的につけこまれるだけの武器だが、それを容易に許す相手とは思えない。

（——どうする？）

苛立ちに似た焦りが、ギルダスの思考を妨げる。

これまでの攻防、全て先手をとってきたが、うまくあしらわれた感はない。

勝手に侮っていたのは自分のほうらしい——その事実を認めつつも、ギルダスに白旗を上げる気はなかった。

「……小細工は終いだ」

小声で呟き、ジドを見据える。短剣を地面に刺し、曲剣は脇に構えた。

膝をたわめ、腰を落とす。

見上げるような前傾姿勢は、最初にしかけて防がれたのと同じ構えだ。

誰もが戦いの最中にいる二人を注視しつつ、息を潜める。

静寂——意識してのことではなく、自然とそうせざるをえない空気が、周囲を包み込む。

細く、息を吸い、吐く。

それを繰り返すうちに、ギルダスの目に映る世界が急速に狭まっていく。

それでいて、意識は目に映らない範囲にも敏感になる。

——前置きは、何もなかった。

ギルダスの体が前のめりになる。

ほとんど倒れる寸前まで傾き、曲げた足の踵が地面に刺さった短剣の柄にかかる。

——その姿が消えた。

ダンッ！

猛烈な踏み込みの音とともに、ギルダスはジドの懐にまで一瞬で潜り込んでいた。

そこから放つ一手は、小柄な体つきだからこそ可能な膝下を水平に薙ぐ斬撃——どれほどの実戦を経験していても、ここまで低い斬撃を受けた者はまずいない。

灰色の刃が、地面すれすれに水平な直線を描く。

それが標的に達する直前——軌道が不自然にねじ曲がった。

「ぐっ……」

（——流された）

渾身の力をこめた斬撃は“槍”に阻まれ、ギルダスは体勢を崩した。

一撃で決めるつもりだったため、それを防がれば大きな隙が生まれる。

曲剣を振りきったギルダスは、今にも槍を繰り出そうとしているジドの姿を捉えた。

（まだだ——！）

柄から強引に片手を引き剥がす。

まだ絶えていない殺意を、見開いた目に宿し——ジドと目が合った。

（こいつ——？）

途端に殺意が揺らいだ。

寸前まで手繰りよせていた“奥の手”が、それに反応して遠ざかっていく。

気づいた時には、首筋に穂先を突きつけられていた。

「終わりだ」

ジドが事実を告げた。

「……ああ」

ギルダスはあっさりと頷いた。

崖っぷちに立たされているというのに、恐怖を感じていない。不思議と確信があった。

時が過ぎる。刃はいつまで経っても、ギルダスの首を切り裂こうとはしなかった。

——予想通りの結果に、ギルダスは短く吐き捨てた。

「ったく、とんだ茶番じゃねえか」

それが聞こえたのか、ジドは槍を引いて構えを解く。

「なんのつもりだ、ジドよ」

^{とが}咎める声音で、長がジドに問いかけた。

「勝負はついた。これ以上やる必要はあるまい」

周囲から不満げな声があがる。それを遮ったのは、ジドの高らかな宣言だった。

「俺の武は無為な人殺しのためのものではない」

曲がることのない意志のこもった声に、不満そうな声が幾分か静まる。

ジドは軽く顎を引いたあと、長に向き直った。

「見ての通りだ。この者は見事俺に本気を出させた。のみならず――」

視線を下に落とす。臍のあたりから一筋の血が流れていた。最後の一撃は、完全に防がれたわけではなかったらしい。

「戦いで傷を負ったのは久しぶりだ」

言葉とは裏腹に、その口調はどこか朗らかだった。

「ジド、何が言いたい……？」

「長よ。俺の考えは前にも言った通りだ。集落の掟には従うが、俺個人は意見をもたない。俺の次の強い奴の言うことに従う」

長は忌々（いまいま）しげな眼差しでジドを見つめた。

軽蔑、憤怒、軽侮――否定的な感情に混じり、理解不能な生き物を見つめるような視線がジドに集まる。

それらを意にも介さず、ジドは胸を張ったままギルダスを手で示した。

「俺はこの者を“戦士”と認める」

数秒の沈黙のあと、耳が割れるようなどよめきが沸き起こった。

「ジド、正気か！？」

「このような子供に……」

度重なる糾弾の声にも、ジドは顔色一つ変えなかった。話についていけずに、ギルダスは首を傾げる。

「ちよつと待て。意味が――」

「いたしかたあるまい」

ギルダスの声を遮って口を開いたのは長だった。途端に住民たちはおし黙る。

「この者らの話を聞くことにする。それが我らにとって益^{えき}あるものなら、受け入れる」

「本気か！？ 長！」

何度目かわからないどよめきよりも先に、怒りに染まった女の声があがった。

つい先ほど、ギルダスに矢を向けてきたルキアとかいう女だ。いつの間にか前に出てきていたらしい。

「ルキア、不遜^{ふそん}だぞ」

長の後ろにいた男が、ルキアを諫^{いさ}める。

「あたしは長に聞いている！ 本気なのか、長！？」

長が不愉快そうにルキアを睨^{にら}んだ。

「不満ならおまえが勝ってみせよ」

怯^{おそ}んだのは一瞬、すぐにルキアの殺意に満ちた目がギルダスに向けられる。

「……やる気かよ？」

うんざりした声で問いかけたが、答えは火を見るより明らかだった。

実際のところ、ジドを中心にしたやりとりの説明がほしかったが、相手がその気ならそんな悠長なことも言っていられない。

首を回して、曲剣を構える——その直後だった。

何かが倒れる音がしたのは。

「リリーネ！？」

「あん？ ……っ！」

リゼッタの声に反応して振り向く。

リリーネが、仰向けに倒れていた。

6・フェルカの民(4)

「なぜ“あの時”、本気を出さなかった？」

ジドの重々しい響きを帯びた問いかけに対し、ギルダスは眉間に皺しわを寄せた。

そう問いかけられたギルダスの脳裏に浮かんだのは、その時の光景ではなく、直後に倒れたリリーネのことである。

当初はただの疲労や緊張感が切れて気を失ったのだろーと思えたリリーネが、実は生死に関わる病だったことがわかり事態はうやむやのうちに収まった。

——それから七日間、ギルダスたちは集落に身を寄せている。

その間の住人たちの反応は、およそ排他的といっていいものだった。

表だって出ていけと言われることはなかったが、ギルダスたちが少しでも外を歩けば、常に刺々しい視線にさらされる。

友好的に話しかけてくるのは、それこそ今日の前にいる男ぐらいだった。

「曇って……いるようには見えねエんだがな、アンタの目は。どう見ても本気だっただろうが」

「そうだな。それは認める」

ジドはあっさりと頷いた。

「確かにあの時の君の目は確かに勝ちを見据みすえていた。だが、途中……最後の最後で、明らかに戦意が萎なえた。なぜだ？」

そんなことまで見抜かれていた驚きを隠しつつ、ギルダスは短く吐き捨てた。

「——アホか」

苛立ちを隠すようにして頭をかきむしりつつ、本音をさらけ出す。「負けて命をとられるわけでもねえんだ。本気なんぞ出せるかよ」

あの戦いのさなか、ギルダスはほんのわずかに違和感を感じていた。ぎりぎりの戦いでは常に感じてきたはずの肌が痺れるような感覚がなかったからだ。

最初は理由がわからなかったが、最後にジドと目を合わせた瞬間に答えが閃いた。

あの戦いで欠けていたものは、“殺意”だ。

ジドの瞳からは、殺意が欠片も感じ取れなかった。殺意を生み出すはずの、怒りや憎しみ、敵意といった負の感情も。ただ戦い、勝つための意志があったただけだ。

一方的に感情をぶつけることほど虚^{むな}しいものはない。それが悪意や敵意といったものならなおさらである。

「それにあのままだったらいいところ相打ちだ。割にあわねえよ」

「なるほど……命が賭かかっていなければ、本気で戦えないというわけか」

「勝ったら良い目見させてくれるってんなら話は別だがな。……ア
ンタ、もしかしてアレか？ 戦い自体を楽しむクチか？」

「より正確に言うなら、強者との戦いを、だ」

戦いというのは、手段であって目的ではない。ほとんどの者は何かを守るため、あるいは何かを得るために戦い、殺し合う。

それでもごく稀^{まれ}にだが、戦いそれ自体を目的としている人種がいることをギルダスは知っていた。

わかりやすい理由としては、自身の強さを示すため、戦いの興奮を楽しむため。そして単に、殺し合いそれ自体が好む者もいる。

戦いの最中の興奮に酔うことこそあれ、好んでそれを味わいたいとは思わないギルダスにとっては理解できない類の人種だった。

「勘違いしないでほしいが、殺し合いが好きなわけではない。あくまで刃を交え、技と力を競い合うことが俺の目的だ」

「同じに聞こえるんだが……」

「生死は結果でしかない。だが俺はむやみに敵を殺そうとは思わない」

なぜなら、と前置きした上でジドが語った理由は、ギルダスの理解の範疇を越えていた。

「――死ねばそれまでだが、生きていればまたより強くなった敵と戦えることができるかもしれないからな」

「次には自分が殺されるかもしれないってのにか？ ……マジもんだな、アンタ」

正気を疑うような目で、ジドを見つめる。

そこまで突き抜けた考え方となると、さっぱりついていけない。理解できないし、しようとも思わなかった。

ジドは平然としていた。そういった目を向けられるのにも慣れているのだろう。

「……まあどうでもいいさ。他人の趣味に口出すほど暇でもねえ」
会話が途切れる。

沈黙の中、ジドは探るような目でギルダスを見下ろしていた。

「……なんだよ？」

「君は普段からそんな態度なのか？」

唐突な疑問に面食らった後、ギルダスは目を細めた。

「だったらどうだ。なんか文句あんのか？」

「いや……妙に練れた戦い方といい、斜に構えた物言いといい、つくづく見た目にそぐわない男だと思ったただけだ。気に障ったなら謝ろう」

どうでもいい、と言いたげにギルダスは手をひらひらと振った。

その程度のことを言われたぐらいでは、もう動揺しない程度の経験は積んでいる。

――もしあからさまに動揺したとしても、まさか見た目が少年でしかないギルダスの中身が、三十半ばの擦れた男だとは誰も思わないだろうが。

「それよりその“君”ってのは止める。ムズ痒くなってくる」

「ふむ、ならなんと呼べばいい？」

「そんなもん好きに決めろよ」

「……なら、名前で呼ばせてもらおう。それなら構わないか？」

「ま、それならな。……ところで、まだ続けるのか？」

槍に視線を合わせながら言つと、ジドは首を横に振った。

「いや、体も冷えてしまったことだし、今日はもう終わりにする」

言い終えた時には、すでにジドの魂精装具ソレスタは形を失い、極小の粒子となっていた。それらもすぐに虚空へと消えてなくなる。

「ではな。おまえたちの目的が、何事もなく済むことを期待しておこう」

「せいぜい期待外れにならねえようにするさ」

歩き出したジドの背に向けて、ギルダスはやる気のなさそうな声を投げかけた。

「さて、と……」

ジドが見えなくなつた後、ギルダスは適当な地面の上に体を投げ出した。

その時には、すでにジドとの会話は頭から消えている。久しぶりに存分に浴びる陽光の気持ちよさに、少しずつ意識がぼやけていく。

「ふああ……」

ここ数日、絶えることのなかった嫌な視線もここには存在しない。一瞬リリーネのことが脳裏をよぎつたが、それも訪れる睡魔に薄れていった。

うつうつとまどろみつつ、ギルダスは意識を手放そうとしていた。

「——ここにおつたか」

平穩の時間は長くは続かない。

聞き覚えのある声に、ギルダスの眠気は一気に吹き飛んだ。

うつすらと目を開けると、そこには予想通りの人物が立っていた。

これ見よがしにため息をつき、起きあがる。

「たしか……ルキアって言ったな。何か用か？」

初めて会ったときに殺意を向けてきた女は、ここでも変わらず殺

意を放っていた。

「とぼける気か？」

苛立ちを滲ませた口調のまま、すでに具現化してある魂精^{ソレスタ}装具の弓を持ち上げる。

最初に戦いを持ちかけられた時は、リリーネが倒れたことで結果的に流れたが、もちろんそれで済んだわけではない。

『あたしと戦え。そんであたしが勝ったらここから出ていけ』

そう何度も勝負を持ちかけられ、今までうまくかわしていたが、いつまでもかわせるとは思っていない。

（来るべき時が来た……つてところか？）

立ち上がりながら、ギルダスはルキアを観察した。

よく見てみると、思っていたよりも若い。二十になるかならないかといったところで、顔立ちもまだ少女の面影を残していた。とはいえ、その整っているともいえる容姿は、この状況ではより迫力を増すのにしか役に立っていない。

ルキアが眉間に皺を寄せたまま、口を開いた。

「あたしと戦え」

「わかった」

——トンッ。

「——え？」

何かを軽く打つような音の直後、ルキアが惚けた声をあげる。

「俺の勝ちだ。満足したか？」

ギルダスの手にした短剣の柄が、ルキアの脇に触れていた。

妙に間の抜けた沈黙の後、ルキアの顔がみるみるうちに赤くなっていく。

「なっ……ふざけるな！」

突きつけられた短剣の柄を振り払い、ルキアは怒声を張り上げた。
「あん？ 俺の勝ちだろ？ 突いたのが刃の方だったらおまえ死ん

でるぞ」

「こんな……！ 納得できるか！」

「——まさか、卑怯だっけ言いたいわけか？」

「そ……そうだ！ だからもう一度——」

ルキアの言葉が、不自然に止まる。見開かれたその目に、かすかに恐怖の色が滲んだ。

「ふざけるなよ、クソガキ」

「なっ……！？」

自分よりも年若い少年に罵倒はじされて、ルキアは言葉を失った。

「戦いくさなんざ、結果がすべてだ。卑怯もクソもあるか。それとも、戦いくさ場さばじゃあ真っ正面から名乗って戦えとでも教わったか？」

「く……」

悔しげに唇を噛むルキアを、ギルダスは冷めた眼差しで見つめた。まともに相手をするのもバカらしく、だからこそその不意打ちだったのだが、思っていたよりも“甘い相手”だったらしい。とても納得したようには見えなかった。

（いつそのこと、徹底的に叩きのめすか？）

少なくとも、この女はジドに比べたら弱い——正面から戦えば、負けることはないだろう。

剣呑な思いつきを実行に移すため、ギルダスが腰を落とした。

不意に、ルキアが顔を上げる。

「結果がすべてだと言っただな」

「？ ああ」

「ならまだ終わっていない。さっきのふざけた不意打ちで、あたしが死んだか？」

ギルダスが怪訝そうに眉を寄せた。そう訊かれれば、答えは一つしかない。

「いや、死んじやいねえが……」

「ならそれが結果だ。あたしはまだ死んどらん。戦う意志もある。まだ勝負は続いている」

(……なるほど、な)

ギルダスはルキアの真意を悟った。

この女は自分が力で劣っていることを知っている。殺すという最後の手段を、ギルダスがとり辛いことも。

知った上で、言っている。自分を止めたければ殺してみろ、と。

思わず感心の吐息がこぼれた。

「……潔いねさつても大事なと思うがな」

「それが戦場で役に立つのか？」

思ってもいないことを口にしたら、逆にこっちが納得できるような言葉を返された。

敵意と戦意をみなぎらせたその意志は、生半可なことではくじけそうにない。

(どうしたもんかね)

もちろんギルダスも引き下がる気はない。

傭兵としての依頼を請け負った上で、自分は今ここにいるのだ。それが依頼を果たす上で必要なら、まだこの集落から出ていくわけにはいかない。

「ならどうする？ おまえが勝つか、それとも死ぬまで続ける気か？」

「そつだ」

迷いのない口調でルキアは断言した。口先だけではなく、本気でそう思っている。

ギルダスは苦い顔をして額の傷跡をなぞった。

(……やるしかねえかな)

手足の骨を一本、いや、二、三本ぐらい折れば、意志はあっても戦うことは不可能だ。

本音を言えば、気は進まない。

女とはいえ、あからさまに殺意を向けられてはあの忌々しい『制約』が働くこともないだろうが、集落の住人たちの敵意を煽あおることになるのは、簡単に想像がついた。

(……それでも、ずっとつきまとわれるよりはましか)

意志を固めて、一步目を踏み出す。と、同時に矢が飛んできた。

「どわっ！」

ギルダスは慌てて跳び退く。そのすぐそばを、矢が通り過ぎていく。

その間にもルキアは新たに生み出した矢で狙いを付けていた――後ずさりながら。

「てめっ……まだ勝負はついてないんじゃないのかよ!？」

「誰がここで決着をつけると言った」

「あアッ!？」

「悔しいが、あたしの力はおまえには及ばん」

さらに矢を放ちながらルキアは後ろに下がる。矢をつがえる速度が尋常ではない。連続して飛んでくる矢を防ぐギルダスとルキアの距離は開く一方だった。

「はっ、なら不意でもつくつもりかあっ？」

「見損なうな、あたしはおまえとは違う！」

矢を放つと同時、ルキアが叫ぶ。

「やる時は正面からだ。でないで力で上回ったことにはならん」

飛来する矢をかわし、打ち払い、ギルダスは舌打ちした。すでに二人の距離は、かなり離れている。

少なくとも、ここから追いつくことは出来そうにない。

「機^きを待つ。その時まで、せいぜい首を洗って待っておれ！」

最後に放たれた矢を払ったときには――

ルキアの姿は、木々に紛れて消えていた。

7・発端

緊迫した雰囲気^{きんぱく}が、その場にいる者に緊張をもたらししていた。

クリアス大森林——その中心部の、ほんの少し前まで人の営みが行われていた場所。

そこには今、二つの異なる目的を持つ者がいた。

彼らのうち、白い仮面で顔を隠した女と、赤い髪の少年の二人組は現状の維持を望んでいた。

一方、彼らと向かい合ったもう一つの集団は状況の変化を望んでいる。

彼らのうち片方が目的を遂^とげるためには、もう片方の目的^{さまた}を妨げる必要がある。

そして、十人ほどの集団の側の目的のためには、目の前の二人組——特に女の方がこの森に留まるのは都合が悪かった。

「——今すぐ、この森から退去せよ」
居丈高^{いたけだか}に言ったのは、集団の中でも一際目立つ男だった。

貧相な体を上質の衣服で包み、髪を撫でつけて整えた中年の男だ。足を踏ん張って威勢よく見せているが、血走らせた目と時おり唾を飲み込む動作が、その内心を表していた。

男を取り囲むようにいるのは、統一された兵装の男たちである。それなりに修練を積んでいるらしい彼らは、腰の剣に手を添えて万が一の場合に備えている。

彼らの半分は、女のすぐ後ろに立っている少年に注目していた。

「この森は、どの国の領土にも属していなかったはずですが」
冷淡な声音で女が突き放す。

くり返される似たようなやりとりに、交渉役の中年男は噛みしめた歯を軋ませた。

（小娘が……！）

どれほど言葉を費やしても、相手には譲歩^{じょうぽ}する気がない。

こちらが提示できる条件がないのだからそれも無理はないが、男にしたところでこの交渉をまとめなければ今の立場を失う恐れがあった。

——それならまだいいかもしれない。最悪、命すら失う可能性がある。

今回で交渉は三度目になる。次はもうない、と明言されていた。「退去しないと言うのなら——」

激情のままに吐き出そうとした言葉を、男は途中で止めた。

女の後ろに立っていた少年の手に、いつの間にか灰色の剣が握られている。

兵士たちの息を呑む音が聞こえた。

悪夢のような光景がよみがえる。

——二度目の交渉の時、痺れを切らして無理矢理女を連れだそうとしたことがある。

その時もこちらの兵は十人ほどいて、相手は今と同じで二人組だった。

男は兵たちに女の捕縛を命じた。少年の存在は頭になかった。そして——見事に失敗した。

原因は計算に入れていなかった少年の存在である。彼らは駆け寄る兵たちの前に無造作に出ると、瞬く間に兵たちの半数を斬り倒した。それも、一人も殺すことなく。

残りの兵たちが動きを止めると、少年は何事もなかったように下がり——その後、男は最低限の体裁をとりつくろって、泡を食ったように逃げ出した。

あの時の醜態しゅうたいは、思い出すのも苦痛だった。

二度と同じような真似はしたくないと思う。と同時に、力尽くで手段が封じられたことを男は悟った。

「『言うのなら』——どうすると?」

言葉を失った男に、事務的な疑問が投げかけられる。

仮面を被った女の感情の消えた声に、男の激情はあっさりと封じ

られた。

懇願にも似た口調で、男は声を絞り出す。

「……どうしても、出ていかないつもりか？」

「ええ」

仮面の奥に覗く碧眼へきがんには、ほんのかすかな揺らぎもない。

絶望的だった。

「わかった……」

男は肩を落とした。

交渉は失敗、指示を出した上役——ドーラン辺境領領主は、自分を許さないだろう。

男は踵を返して歩きだした。

ほんのわずかにでも生き残れる方法——処刑という処罰が下される前に、逃げ出す可能性を探りながら。

「それで——これからどうなる？」

二人だけになった森の中で、仮面を外したりゼツタの美貌を横目にギルダスは問いかけた。

どこで手に入れたのか、その仮面には着けた者の感情を封じ込める力があるという。今さら疑う余地もない話だが、仮面を外した時との落差にはいまだ違和感がつきまとう。

「わかりません。ですが、今の男がもう一度来る可能性はないでしょう」

「だろうな」

ギルダスは短く同意する。

最後に見せた男の表情には、諦めきつた者の気力の無さが刻まれていた。

これからあの男にはどういった未来が待ちうけているのかわからないが、おそらくそれは自分たちとは関わりのないことなのだろう。

リゼツタが瞳にわずかに同情の色を浮かべるのとは対照的に、ギルダスは男の存在を脳裏から消し去りつつ問いを重ねた。

「ってことは、他の奴を送ってくるか？」

「その可能性は低いと思います。あちら側にも、もう交渉の余地はないと伝わっているでしょうから」

「……もうちよつと引き延ばすこともできたんじゃないか？ その方が都合がよかっただろ」

「あちら側の要求は、“すぐにでも私たちにこの森から出ていけ”という単純なものです。段階的に引き延ばせるようなものでもありませんし、それをしてもすぐに見透かされます」

「そういうもんか」

その手のことに関してあまり詳しくないギルダスは曖昧に頷いた。「いずれにしても、これで向こうの出方も変わってくるはずです。何が起きてもいいように備えておいてください」

「……ああ、わかった」

次はどう出るか、新しい交渉人を送ってくるのか、絡め手であるか、それとも痺れを切らして攻め込んでくるのか——いずれにしろ受け身のこちら側は後手に回るしかない。

何が起ころうともその場その場で最善の手段を選ぶしかないだろう。ギルダスは無意識のうちに、周囲の様子をうかがった。もしこの場で戦うことになったら、どう動くべきか——そんなことを考えているうちに、いくつかの不自然な跡が見つかった。

何か鋭いもので斬られた枝の断面――

木々の表皮にこびりついた、黒い染み――

かすかに残る、ギルダスにとっては嗅ぎ慣れた臭い――死臭。

かつての惨劇の舞台である痕跡は、未だそこらじゅうに残っている。

「かなり死んだな……」

「……ええ」

沈鬱な表情でリゼツタは頷いた。

ここで何が起こったのか、具体的なことを二人は知らない。

知っているのは、かつてここにも『フェルカの民』の集落があったことと、そこがある日襲撃を受けたことだけである。

あまりに突然のことに、住人たちは女子供を含めて多く者が殺されたという。

そして、その襲撃者たちを率いていたのは、ドーラン辺境領領主——クリアス大森林に隣接する領地を治める統治者であり、またフェルカの民の庇護者^{ひしや}であるはずの男だった。

「……集落にいる間に、長から話を伺いました」

硬い口調で話し始めたリゼツタを、ギルダスは見上げた。

「『フェルカの民』と呼ばれる彼らの起源は、もっと南方にあったそうです」

「南方？ ああ、言われてみれば……」

彼らの浅黒い肌を思い出し、ギルダスは納得したように頷いた。

南方出身の者の多くは、黒かそれに近い色の肌を持つ。

「彼らの一族は生まれついてからの精錬者が多く、またそれゆえに戦いの技能に長けていたそうです。しかし、その力を危険視されて他の勢力をまとめて敵に回し、やがて敗北しました——」

しかし彼らは生き残った。

逃げのびて、自分たちの素性を隠し、その戦いに特化した技能を金に換える職能集団になったという。

「傭兵みたいなもんか」

「そうですね。ですが、彼らの能力はあまりに目立つものだったんです」

ただ戦が上手いだけの者なら、どこにでもいる。

しかし彼らは『精錬者』だった。その異能は小規模であるからこそ、かえって注目を集める。

「際だった力を持つ小規模の集団に向けられる反応は大きく分けて二つです」

すなわち、その力を恐れて迫害するか、味方に取り込んで利用す

るか。

時代が変わるたびに、フェルカの民が受ける待遇も変わり——やがて彼らは故郷を捨てる道を選んだ。

故郷からはるかに離れた土地、人目を避けるような場所に集落を構えたことから、彼らの歴史が生易しさとは無縁であることは想像に難くない。

「力こそ理——乱暴ですが簡潔な彼らのその信条も、この時に生まれたのでしょね」

淡々と語るリゼツタの表情には、その時代、彼らがどんな目に遭っていたのかを想像しているのか、憂^{うれ}いが宿^つっていた。

力こそ理——すなわち、弱き者に理なく、生きる価値もない。そう断じる価値観が平然と受け入れられるようになるまでの経緯は、険しいばかりだったのだろう。

リゼツタの話を黙って聞いていたギルダスは——吐き捨てるように言った。

「それがどうした。信条があろうがなかろうが、結局は同じことの繰り返しだろうが」

非難の眼差しを向けられて構わず、ギルダスはつまらなそうに鼻を鳴らした。

「昔のことはどうやったって取り返しがつかねえんだ。それに氣をとられて今やることを見失うんじゃねえぞ」

尖った口調でリゼツタが反論する。

「過去の悲劇を知ればこそ、それを現在でも繰り返すべきではないと考えることもできます」

「知っていても知らなくても、被害を受ける側になってみないとわからないってこともあるぜ？」

従属し、また迫害を受け——その繰り返しに嫌気がさしたのかは知らないが、場所を移したただけでは彼らの立場が変わらなかった。

フェルカの民がこの地に移住した際、彼らはその時代のドーラン辺境領領主との間に、“我々の存在を秘匿^{ひそく}する代わりに、有事の際

には力を貸す”という契約を結んだ。

その契約に則り、彼らの関係は領主が代替わりしても続けられてきたが——ある日突然に終わりを告げた。

現に、ギルダスたちが今いる場所は、ほんの少し前まで死体が乱雑に打ち捨てられていた。

歴史は繰り返される——

どこかで聞いた言い回しをギルダスを思い出した。

「そんな問答は傍観者にでもやらせておいてください」

リゼツタにしては珍しく、吐き捨てるような口調だった。

「私たちがやるべきことは、起こるかもしれない争いを止めることです。再び争いが起これば、死者もまた多く出るでしょう。それは避けなければなりません」

「それがわかってれば結構だな」

再び鼻を鳴らして、ギルダスは肩をすくめた。

「もう少し……あと数日もしないうちに、話はまとまるはずですよ。」

それまで、私たちはやるべきことをやるだけです」

「確かなんだらうな？　聖封教会が裏で手を回して、この件の片をつけようとしているってのは」

“聖封教会がフェルカの民を巡る問題に介入して、争いを防ごうとしている”——リゼツタから聞かされた話だが、いまだに実感がわかなかった。

というより、世間から隔離された環境にいるため、事実かどうかもわからない。もつとも、聖封教会と一国の陰謀めいたやりとりなど、ギルダス一人では確かめようもないことだった。

ここ数年の間に爆発的に拡大してきた聖封教会の勢力は、もはや大国のそれにも比肩しうるほどになっている。固有の領土を持たない性質上、その力は大陸各地に影響を及ぼす。

対して、ドーラン辺境領を含むヴァルト王国は、領土も小さく、軍事力も外交力も際だったところがない小国だった。

聖封教会が介入する余地は十分にあるが、スケールが大きすぎて

一介の傭兵でしかないギルダスにはいまいちぴんとこない。

「聖封教会の司祭のおまえが集落に居座りこんで“盾”になり、領主の側が攻めあぐねている間に国との間で話をまとめる——か。話 はわかるけどよ、それにしちゃあちよつといい加減じゃねえか？ いくらなんでも、たった一人を送り込んで時間稼ぎをするってのは 無茶だと思うぞ？」

「ことが急すぎたんです。それに、わたし一人の命で数百人が救えるかもしれないのなら、決して無茶な判断とは思いません。加えて言うなら、これはわたしだけがでる状況にあります」

本来なら、リゼツタはただの交渉役として出向く予定だった。

領主が不穏な動きを見せていることは察していたが、彼が“城下にある教会を封鎖する”という乱暴な手段を使ってくるなどとは想像もしていなかったという。

結果として領主に対する抑えとなるはずの人員は動きを封じ込まれ、また巨大すぎる組織の性質上、聖封教会の動きは後手に回り——結果として、リゼツタ一人だけで現地での問題に取り組むことになってしまった。

それに付き合う形になってしまったギルダスにしてみれば、愚痴のひとつも言いたくなるというものだった。

集落までギルダスたちを案内した密偵の男とも、日に一度は連絡をとりあう約束を交わしていたが、結局はあの時以来顔を合わせていない。代わりに待ち合わせた場所に現れたのは、ドーラン辺境領領主の使者を名乗る男だった。

捕まえられた、と考えるのが妥当だろう。

「ともかく、聖封教会とドーラン辺境領の主国であるヴァルト王国の取引が成立すれば、今回の件は領主の手から離れます。この森は聖封教会の管轄になり、フェルカの民もその保護下におかれ、彼らに捕らわれている人々も解放できます」

不用意にフェルカの民の生活区に入り込んだ人々は、その場で捕らえられ、労力として生かされていた。

もし彼らが殺されていたら、さらに話はこじれていただろう。

「良いことづくめってわけか。ま、ここに住んでいる連中がどう思うかは別だけだよ」

どこの誰かもわからない、それこそまるで関係のない連中が首を突っこみ、自分たちの仲間を殺した領主との争いを勝手に止めようとしている。おもしろく思わない者がいるのも当然だった。

「憎まれるのは、この問題に介入しようとした時点で覚悟しています」

言い切ったりゼツタの目を見て、ギルダスは鼻白んだ。

揺らぎのない瞳だった。

それは自分の行動が絶対的に正しくないと知りながらも、それをする意志を曲げないことを決意した者の目だ。

(……ったく)

その目が苦手だった。理屈も損得も通じない、自分のやるべきことを見据えている者の眼差し。

情に引きずられることなく、後悔に囚われることなく——自分にはないものから、ギルダスは視線をそらした。

(なんでおまえは、そんな目ができる?)

心の中で呟いた疑問に、答えは当然ながら返ってはこない。

「ですが……一つだけ、確信がもてないことがあります」

代わりに、どこか迷ったような声が^{じだ}耳朶を打った。

一転して躊躇いを含んだ声音に、ギルダスは思わず視線を戻す。

「ドールン辺境領領主の考えです。なぜ、彼は協力関係にあったフェルカの民を裏切るような真似をしたのか——」

さっきまでの眼差しは影を潜め、なにかを考え込んでいるようにリゼッタは顔を伏せていた。

8・転機（1）

ルキアにとって、強者とはそれだけで尊敬に値する存在だった。例え相手が敵だとしても、幼くても、自分より強い——ただその一点で、彼女はその人物を認めることができる。それは彼女の生まれ育った環境が大きく影響していたが、価値観の由来など本人にとってはどうでもいいことだった。

ルキアは強者を敬^{うやま}う。反面、弱者を嫌う。特に同年代かそれより上で、彼女よりも弱い男には彼女の態度は素っ気ない。

ルキアが許容できる弱者は、老人と子供、戦の手段を知らない女ぐらいである。

ルキアは弱者を嫌う。とはいえ、彼女の弱者に対する態度は、むしろ無関心に近いものである。

ルキアがあからさまな嫌悪を覚えることは少ない。彼女の怒りや憎しみは、ほとんどの場合その場限りのものである。

だからルキアが誰かを嫌悪し、その感情が長続きする場合、その相手はルキアが心底から嫌う相手であり——

また、同時に認める相手でもあった。

ここ数日、ルキアは常に苛立っていた。

ギルダス相手に勝負を仕掛けてから、彼女の思考はどうすればギルダスに勝てるか——その一点にのみ働いている。

（どうしたらいい？）

何度も頭の中で自問するが、答えは出てこない。

剣の届かないはるか遠くから、気の抜けている瞬間を狙って矢を放つ——二人の異なる武器から考えれば、それが最適であることは知っていたが、ルキアはその手段を選ばない。

あの時以来、屋外にいるギルダスには遠くから見てもわかるほど隙がない。狙撃ではあっさりかわされるだろうし、そもそもそんな

やり方はルキアの誇りが許さなかった。

なにより、あのジドが戦士と認めた相手には、自分から敗北を認めさせるような勝ち方がしたい。

“戦士と認める”——それは、フェルカの民にとって最高の賛辞だった。

軽々しく口にいっている言葉ではないが、ルキアにはジドの言葉自体を否定する気はない。

ジドに一太刀浴びせることはできる者は集落でもないし、あのときの戦いぶりを見ればギルダスの実力が並をはるかに上回るものであることがわかる。

あんな出会いがたでなければ、もしかしたら今とは違う関係になっただけかもしれない——そう思うほど、ギルダスは明確な強者だった。

だが何も知らないよそ者なのに、自分たちの問題に首を突っ込んできたことには怒りを覚えていた。

その怒りを思い知らせたい。

さらにできれば、生かしたままこの森から叩き出したい。人を殺すのに躊躇いはないが、あそこまで練り上げた技術をあの若さで終わらせるのは惜しい気がした。

それはルキアの強者に対する敬意であると同時に、彼女の青さを裏付ける想いでもあった。

ギルダスが知ればあざ笑うであろう想いを抱え、ルキアは一人思案する。

しかしいくら考えても、彼女の望む答えは出てきそうになかった。それが苛立ちとなり、ルキアの心を蝕んでいた。

「……ん？」

ふとルキアは足を止めると、怪訝そうに周囲を見渡した。

苛立ちに任せて歩き回るうちに、いつの間にか集落の外れのほうにまで来てしまったらしい。

視界の端にある小屋に目を止めて、ルキアは顔つきをさらに険しくした。

住人もなく単なる物置として使われていたその小屋は、今はルキアの苛立ちの元が寝泊まりしている。

一度だけ睨みつけ、そのまま離れようとしたルキアは、ふと違和感を覚えた。

話し声が聞こえる。それも、複数。こんな集落の者も滅多に来ない外れの小屋の近くで、いったい何を――？

ルキアは頭を振って考えを振り捨てた。ここで考えているよりも、直接確かめた方が早い。

「――だな」

「だけど……」

「ここまで来て怖じ気づくな。相手はヨソもんだ。手段を選んでやる必要もねえ」

「そうだ。それに、今あのガキと女はいねえ。今やるしかねえ」

「けどよ。もう一人のガキも強かったら……」

「そんなわけあるか。異常なのはあのガキだけだ。それに、もう一人のガキは寝込んでる」

会話の節々からにじみ出る不穏な気配に、ルキアは自分でも知らないうちに足を踏み出していた。

「何を話してる？」

「ッ！……なんだ、ルキアか」

集まっているのは、ルキアにも見覚えのある者たちだった。集落の若者たちである。彼らは張り詰めた顔で振り返ると、声をかけた相手がルキアだと知って安堵の息をこぼした。

「こんなところに集まって、何をこそこそしてる、おまえたち」

ルキアが険しい口調で問うと、彼らはばつの悪そうな顔を向けた。

そのうち、一人が渋々と口を開く。

「あのヨソもんを追い出そうと思ってよ」

「……どうやって？」

「あいつらの仲間に、病気のガキがいたろ？ あいつを使って、出ていくように言う」

一瞬で頭が沸騰した。煮えたぎる感情が、ルキアの声を軋ませる。
「おまえら……」

「ルキアだつて、あいつらを追い出したがつてただろ？ だから――」

彼らは一斉に表情を強ばらせた。魂精装具ソレスタを具現化したルキアが、感情の消えた顔で自分たちを見渡したからだ。

「お、おい……」

「卑怯もんが……！」

弓を片手に持ったまま、ルキアが地を蹴る。

片手に持った弓を突き出す。その片端が一人の腹を突いた。

「がつ！」

反転させ、背後にいた男の顎を跳ね上げる。

「ぐあっ！」

戦いとも呼べない一方的な展開だった。

ルキアの弓を槍に見立てた槍術に、男たちは為す術もなく打ち倒される。

元々、ルキアが“無関心”な相手である。加えてその槍術は、ルキアがもつとも嫌う男にかつて教わったものだった。

それほど時間もかからずに、立っているのはルキアと一人の男だけになっていた。

残ったのは、男たちの中でも特に威勢が良かった一人である。今ではその威勢の良さもなりを潜め、男は顔面蒼白になって立ち尽くしていた。

ルキアは黙ったまま、具現化した矢をつがえる。

「ま、待って……」

「去いね」

「ヒッ！」

——ドッ。

射る寸前に狙いを変えた矢は、男の両足の間に突き立っていた。

「ヒッ……！」

よろめきながら逃げ出す男を最後まで見ることなく、ルキアは周囲を見渡した。倒れていた者たちもルキアの視線を当てられると、慌てて立ち上がりおぼつかない足取りで逃げ出していく。

「ふん……」

忌々（いまいま）しかった。強い者に勝てないからといって、弱い者を狙うその魂胆が。

先ほどまで胸を焦がしそうだった激情が、急激に冷めていく。虚しさを宿した瞳を、ルキアはすぐ近くの小屋へと向けた。

ルキアは気づかない。この場に近づくものの気配に。

緑深い森林で鍛えられた感覚も、激情の余韻に乱された今のルキアには十分に発揮できるものではなかった。

ほんの数分前——

奇しくもルキアと同じ道筋をたどりながら、ギルダスはリゼッタとの会話を思い返していた。

「——持て余しただけじゃねえのか？」

領主がなぜフェルカの民を裏切ったのか、その言葉にギルダスは大きく考えないまま思いつきを口にした。

「それで襲撃というのも急すぎます」

首を振って、リゼッタはギルダスの思いつきを否定する。

「この地の領主は、代々フェルカの民と“戦力を提供するかわりに、税を免除しその存在を秘匿する”という契約を結んできました。その関係は、両方の側にとって利点があるはずなんです。なのにそれを今さら反故にする理由がはっきりしません」

ギルダスは鼻を鳴らしつつ肩をすくめた。

リゼッタもギルダスに話しているというよりも、口に出して情報を整理しているといった様子で、特に答えは求めてこない。

「外部からの介入が……いえ、でもこの取り決めは彼らだけのものだし、そもそもそのことは誰にも知られていないはず……とすると、やっぱりあの件が……」

「何か引つかかることでもあるのか？」

リゼッタは独り言めいた呟きを止めると、頭を振りながら顔を上げた。

「襲撃に先立つて、領主は一人息子を失っています。鹿狩りの最中に何者かに襲われたそうです」

「まさかそれをやったのがこの誰かだったのか？」

「わかりません。結局、犯人は見つからなかったそうですから。ですが、時期的に見てそのことが領主にフェルカの民を裏切るきっかけになったのは間違いないと思います」

「へえ……」

「私たちのすることに役立つかはわかりませんが、一応気には留めておいてください」

「まあ、憶えてたらな」

話は終わりとばかりに、ギルダスはぞんざいに手を振った。

正直、そこらへんの経緯はどうでもいい。

その場で二人は別れ、ギルダスはこちら数日の寢床になっている小屋へと向かった。

——その足が止まったのは、小屋のすぐ目前まで来た時である。

「——よお」

かけられた声は、ここ数日ルキアが思い描いていた相手のものだった。それまで気付かなかったことに内心舌打ちしつつ、ルキアは身構えながら振り返る。

「おまえ今、ここで何をやろうとしてた？」

似合わない穏やかな声を出しながら、赤髪の少年はにじり寄ってくる。

「なに？　どういう——っ！」

ルキアはすぐにその裏に隠されたものに気づいた。

小屋には、病で寝込んだ連れの少女。その近くには、自分に敵意を向ける女。しかも女は武装している。

ギルダスが脳裏に描いた真実に、ルキアの頭が一瞬で真っ白になる。

自分が蹴散らした相手と同じに見られたことへの怒りがルキアの思考を停止させた。

ギルダスの表情が一変する。薄笑いを浮かべた口元はそのままに、瞳に炎のような苛烈な怒りが宿る。

「気に入らないからつてずいぶん汚い真似するじゃねえか？　ええ？」

「……あたしがそんな下らないことをするとしても言いたいのか」

「違うのかよ」

ルキアは答える代わりに、ギルダスを睨みつけた。

否定する気にもなれない。言葉を重ねる余裕もない。それほどに彼女は怒りにとりつかれていた。

二人の怒気に、空気が張りつめていく。あとは些細なきっかけで、戦いが始まる。

見計らったように、キィ——と高い音が鳴った。ルキアが飛び退きながら矢をつがえる。

「待って……」

弱々しい声が、その動きを制止した。

「リリーネ？」

振り返ると、寝ているはずの少女が壁にもたれるように出てくる場所だった。

「ギル……ダスさん……違うんです」

「——あん？」

ギルダスは怪訝そうに眉を跳ねあげる。壁にもたれたまま、少女の小さな体がずれ落ちた。

「おい！」

ギルダスが駆け寄って抱き抱える。

ここ数日、まともに食事をとっていないせいか、その体はやせ細って見えた。

熱に潤んだ瞳が、ギルダスに向けられる。

「その人は……私を助けてくれて……」

「あ？ そりやどういう——おい？ おい！」

少女は意識を失っていた。一瞬背筋がひやりとした感覚に襲われるが、聞こえてきたか細い寝息に、体の力が抜ける。どうやら単に寝入っただけらしい。

「見てたのか……」

自分でも意識しないうちに、ルキアは呆然とした声を出していた。ギルダスが振り返る。ルキアは意識して表情に陰しさを取り戻すと、すぐに踵を返した。

「ちよつと待て」

それを聞く義務はない。だというのに、ルキアは反射的に足を止めていた。

「どういうことか説明ぐらいしろ。わけがわからねえ」

9・転機（2）

かすかな木漏れ日が、風に煽られて波打つ金色の髪に反射して光を放つ。

木々に囲まれ、物憂げに立つ一人の女性——絵の題材にでもなりそうな風景だった。

ここ数日は洗う余裕もなかったはずだが、リゼッタの髪は本来の光沢を失っていない。だが内心では、くすぶる気持ちを持て余すような日々が続いていた。

ギルダスと別れ、一人になったリゼッタはただじつと眼を伏せていた。

やるべきこと、やらなければならないことは山ほどあるが、今の段階でできることは知れている。

「——無力ですね」

改めて声に出して思う。

問題の渦中にいるだけで、外部からの介入を待つしかない自分の力の無さが今は疎ましかった。

それを選んだのは自分自身とはいえ、時おりそれをたまらなく苦痛に思う。

リゼッタの巡礼司祭として各地を巡る役目は、押しつけられたものではなかった。

聖封教会でもっと上の地位へと昇る選択肢もあったが、それを拒んだのも彼女自身である。

昇り詰めればできることも多くなる。しかし引き替えに、今ほど自由はきかなくなる。自由でなくなるのが嫌だったわけではない。

より多くを助けるため、目の前で苦しんでいる者を見捨てることなどできそうにない——そう考えた上での決断だった。

今さらその選択を後悔するような真似などしたくはない。

ふっと息を吐き、空を見上げる。

頭の上を覆う枝葉の隙間から、つがいらしき鳥たちが飛んでいる様子が見えた。

あの鳥たちのように、なんの縛りもなく生きていけたら——幼い頃にそう思ったこともある。

だが人の身でそれをするには、世のしがらみに縛られながら生きることよりもはるかに難しい。縛りがないとはいえ、人と関わらない世捨て人のような生き方をしたいとは思わなかった。

リゼッタにとって、聖封教会の教義はさほど重要なものではない。ただ理不尽に人が殺されたり、傷つけられたりするのだけは我慢できなかった。

それが自分の身近で起こっていれば、できる範囲で止めたいと思う。個人でできることは限られるが、傍観者を気取って何もやらないよりはいい。そう思っていた。

ふと——先ほど交わした会話が脳裏をよぎる。

「……」

リゼッタの、見る者が見れば張り詰めていたとわかるその表情がかすかに緩む。

本来の肉体を失い、今は少年の体にその魂を宿し、自分とは異なる考え方をする傭兵のことを思い出していた。

その意見に同意する気はないが、今のリゼッタにとってギルダスはもつとも身近な存在といえる。それだけに情もあるし、頼りにもしている。野卑^{やひ}な口調を隠しもしないところは苦手だったが、そうした部分も根っからのものではないと思っていた。

なにより、ギルダスは傭兵としての筋を通すことにこだわりを見せている。自分を粗野^{そや}な人間に見せるのも、そのこだわりからではないかとリゼッタは疑っていた。

そうしたこだわりを持つという点だけでもリゼッタは好感を抱いている。

（——それでも）

リゼッタの表情が再び物憂げなものへと変わった。

二人の関係は、依頼者と傭兵のそれである。——それだけだったから良かったかもしれない。

だが、実際は違う。ギルダスはリゼッタの持つ異能が必要だし、リゼッタはギルダスを監視する立場にある。

望むと望まざると、その関係は変わるものではない。ギルダス自身はそれほど深刻にとらえているわけでもないが、だからといってこちらまで気楽に考えていいわけでもないと思う。

「——」

リゼッタは力なく頭を振った。

ここ数日の行き詰まった日々の影響か、思考はすぐに否定的な方向へ流れてしまう。

今の段階でやれることは少ないし、ギルダスとのことは考えて答えが出る問題でもない。

そう割り切り、リゼッタは歩きだした。

今日はまだリリーネを見舞っていない。だいぶ良くなってはきたが、それでもようやく飲み物以外のものが口にできるようになった程度だ。

少しだけ様子を見て、起きているようなら軽く話でもしよう——そう決めて小屋へと向かう。

その矢先のことだった。

「あなたは……」

見覚えのある男が、リゼッタの前に姿を現したのは。

同じ頃、ギルダス・ソールドは小屋の外壁にもたれて、額の傷跡をなぞっていた。

対面にはむすっと黙り込んだルキアがいる。

ルキアから事の真相を聞き出した直後から、二人はずっとその様子だった。

(どうしたもんだかな……)

頭を抱えなくなる衝動を抑えつつ、ギルダスはルキアを盗み見た。問答無用に疑ったことに引け目は覚えつつも、ひねくれた気性が素直に謝ることに抵抗を感じさせている。

また、引け目を感じているのはルキアも同じようだった。

もっともその対象はギルダスでなく、危うく同胞の齒牙にかけられそうになったリリーネである。

それを察しつつも、ギルダスは内心で面倒な奴だとも思う。何も他人のしたことにもまで責任を感じることはないだろうに、というのが本音だった。

そのリリーネといえば、ギルダスに寝台に運ばれた後は死んだように眠っていた。無理に起きあがったせいだろう。あの様子ならしばらくは目を覚ましそうにない。

起きていればルキアも何か言うことができるが、さすがに寝ている相手に話しかけても仕方がない。しかしこのまま立ち去るのも抵抗がある。そうした葛藤が、話を終えた後もルキアが去ろうとしないう理由となっているのだろう。

気まずい沈黙の後、結局先に折れたのはギルダスだった。

「なあ」

ギロ、と射殺するような眼差しが向けられる。若干怯みつつも、ギルダスは言葉を継いだ。

「あー、その、なんだ……悪かったな」

ルキアが驚いたような顔をする。だがそれも一瞬、すぐに口元を引き結び、元の険しい顔つきへと戻る。

「謝罪などいらん。元はあたしの仲間が馬鹿をやったからだ」

「そりゃそうかもしれないが」

ギロ、と再び睨まれ、ギルダスはたまりかねたように両手を上げた。

「っと、いちいち睨むなよ」

「睨んでなどおらん」

「睨んでるだろうが」

「これは地顔だ」

「……あそ」

明らかな嘘に、肩の力が抜ける。ルキアはつまらなそうに鼻を鳴らした。ギルダスの口調も自然と投げやりなものになっていく。

「まあどうでもいいけどな。礼ぐらいは受けとつとけ。俺が礼を言うなんて滅多にないことだからよ」

「そんなこと知らん」

「……そりゃそうだ」

話すのも嫌だというような対応である。リゼッタに輪をかけた無愛想さに、ギルダスは諦めて口を閉ざした。

そうしてルキアがいなくなるのをじつと待つ。だが彼女は微動だにせず、険しい顔でギルダスを見つめていた。

「……なんか用か？」

根負けしたギルダスが仕方なく訊くと、ルキアは予想もしなかった言葉を投げかけてきた。

「あの娘はおまえの女か？」

「あ？」

いきなり突拍子もないことを言われ、ギルダスの目が点になる。

たつぷりと時間をかけて言葉の意味を理解したギルダスは、首をひねりつつ頭を掻いた。

「なんでそんな結論に達したかわからんが、とりあえず違うとだけ言っておく」

「回りくどい言い方だ」

あからさまな疑いの目を向けられたギルダスは困窮こんきゆうして身を仰け反らせた。

確かに見た目でいえば、ギルダスとリリーネの年齢は近い。だが、ギルダスの実年齢はもっと上である。

その彼にしてみれば、自分の半分も生きていないリリーネをそういった目で見ようなどと思ったことすらなかった。

「なんでそんなこと訊くよ？　そういうことに興味があるってわけでもねえだろうに」

ルキアの猛々（たけだけ）しい言動からして、ことさら色恋沙汰に興味があるとも思えない。

ギルダスの率直な疑問に、ルキアは顔を背けた。

「別に。ただ意外だったただけだ。おまえみたいな奴が他人のことで怒るなんて」

「は？　……おいおい、俺はどんなふうに見られてんだ？」

ギルダスは思わず苦笑する。本音を隠そうともしないその言葉が、妙におかしかった。

「だがま、その見立ては間違ってるんじゃないかもな」

怪訝そうに振り向いたルキアに、ギルダスは唇を皮肉気に歪ませた。

「別に俺はリリーネのために怒ったわけじゃねえぜ。あいつになにかあれば、後で怖い依頼主に怒られそうなんぞでな」

「依頼主とは、もう一人の女のことが」

「ああ、俺は傭兵だからな。依頼主の機嫌はできる限りとつとかなきゃならねえ。そうしないと稼ぐこともできねえからな」

その軽い口調に、ルキアの瞳が険しく吊り上がっていく。

「……本心から言っているのか？」

ギルダスは迷うことなく頷こうとし——なぜか躊躇いを覚えた。

一瞬の間が空く。傍目^{はため}から見れば、それはギルダスが迷っているように見える間である。すぐにそのことに気づき、ギルダスは慚然^{ふぜん}と吐き捨てた。

「嘘を言う理由もねえだろ」

さっきの反応と併せて、その態度は強がっている者のそれにしか見えない。

案の定、ルキアも険のとれた顔でギルダスをまじまじと見つめていた。

苛立ちを覚えつつも、ギルダスは平静を装う。なぜか、ここで怒

りだしたら負けのような気がした。

束の間、お互いが見つめあう時間が続く。

ギルダスにとって気まずい時間——それを破ったのは、近づいてくる足音だった。

ルキアが身を翻し、音の近づく方向を睨みつける。少し遅れてギルダスも反応したが、その瞳に険しさはなかった。

「噂をすれば……ってか」

どこかほっとした様子で呟く。

足音の主はすぐに姿を現わした。

「ギル！ 探し……ました……よ」

ギルダスを見つけて立ち止まったりゼツタは、息も切れ切れに声をかけてきた。肩を上下させながら、汗で額に張り付いた金髪をうっとうしいそうにかき上げる。

いつもとは違ったその様子に、ギルダスは首を傾げた。彼女が全力で走ることなど滅多にない。

「なにかあったのか？」

リゼツタは最後に深呼吸すると、緊迫感を滲ませた声で言った。

「領主が、傭兵を雇いました。すでにここに向かっていているそうです」

10・血霧の獵兵（1）

——領主に雇われた傭兵がこちらに向かっている。

「どういうことだ？」

その言葉を聞いて頭の中が冷えるような錯覚を味わったあと、ギルダスは目を細めてリゼッタに問いかけた。

「詳しいことは、彼に説明してもらいます」

「彼？」

リゼッタが背後を振り返る。それに合わせたように、これといって特徴のない顔をしたまだ若そうな男が一人、姿を現した。

ギルダスは思わず目を見張った。

「おまえ……捕まってたんじゃないかったのか」

初めて会った時と雰囲気はかなり変わっていたが、その男はギルダスたちをフェルカの民の集落まで案内した聖封教会の密偵に間違いなかった。

「そんな失態を犯すか」

密偵はギルダスを嫌そうに見てそう吐き捨てたあと、事情を説明した。

「いわく——」

ギルダスとジドの“決闘”のあと、解放された密偵の男はいつものように何食わぬ顔で森から出たらしい。

翌日、リゼッタとの待ち合わせ場所へ向かおうとした男だが、なぜか森を監視する兵士の数が急に増えていることに気づいた。

入りこめないほどでもないが、密偵は領主の動きを探ることを優先した。兵士の数が増えた理由を知ろうとしたのだ。

結果、そこで知り得た情報はリゼッタとの連絡のやりとりなどよりもはるかに重大事であったため、さらに詳しく調べるために森へと向く余裕もなかったらしい。

「その情報が、領主が傭兵を雇ったというものだ」

「ちなみに彼はその傭兵団が森へと発ったことを知り、急いでここまで駆けつけてきてくれたそうです」

補足するようにリゼッタが付け足す。

ちなみに、ここでいう傭兵とは、個人のことを指すのではない。徒党を組んで依頼を受けるいわゆる『傭兵団』のことである。

話を聞いて、ギルダスは首を傾げた。

密偵が捕まっていなかったのなら、一つわからないことがある。

「ならなんで待ち合わせた場所に領主側の奴らがいたんだ？」

「そんなこともわからないか？ 捕まっている司祭か誰かが口を割ったのだろうさ。あの場所を知っているのは私だけじゃない。なにせ元はフェルカの民の集落の一つだったんだからな」

さも馬鹿にしたような口調である。会ったときから友好的とは言えなかったが、密偵の男は明らかにギルダスを嫌っているらしい。

普段ならそれに反応するところだが、ギルダスは言葉の意味を理解して顔をひきつらせた。

「ちょっと待て。教会の人間がそのことを教えたってこたあ、つまり――」

「今使っている集落の場所も知られていると思って間違いないでしょうね」

どこか悲壮さを滲ませたりゼッタの声が、事の重大さを物語っていた。

「おい！ どういうことだ！？」

黙って話を聞いていたルキアが、我慢の限界というように怒声をあげた。

リゼッタはルキアに視線を向けると、冷めた声で言い放った。

「少し黙っていてもええですか？」

「なっ……」

絶句するルキアをよそに、リゼッタは疑問を口にした。

「傭兵団が集落にたどり着くまで、時間はどれくらいかかると思い

ますか？」

「おそらく二、三時間後かと……。傭兵団と私が森に入ったのはほぼ同時でしたが、なにせ初めて通る道です。集落までの道順には目印がありますが、そう簡単に見つかるものでもありません。集団なら見過ごすこともないでしょうが、彼らも手探りで進むことになるでしょうから」

丁寧な口調で答える密偵に頷き、リゼツタは目を伏せた。

「……なぜドーランは傭兵を雇ったんでしょうか？ 彼自身も兵士を抱えています。わざわざ傭兵を雇う意味はないはずですが」

「あ、ああ……確かに。おい、その傭兵団、名前と何人ぐらいいるかわかるか？」

リゼツタのルキアに対する態度に戸惑いつつも、ギルダスは密偵に顔を向けた。対策を立てるためにも、最低限人数は知っておいたほうがいい。

「人数はともかく、名まで必要なのか？」

「知っている奴らかもしれねえ。いいからさっさと教える。それともわからねえのか？」

挑発的な物言いに、密偵の眉がぴくりと跳ね上がる。それでも口論している暇はないと思ったのか、渋々といった口調で答えた。

「人数は約五十人。『ブルート・イエーガー血霧の猟兵』という傭兵団だ。傭兵組合の関係者から聞いたから間違いない」

「げ……」

その名を聞いた途端、ギルダスの顔があからさまにひきつった。

「よりもよつてあいつらかよ」

「知っているんですか？」

「嫌ってほどにな」

頷き、ギルダスは眉を寄せたまま話し始める。

『ブルート・イエーガー血霧の猟兵』——一般的な知名度はさほどでもないが、その名は傭兵たちの間では広く知れ渡っていた。

もつとも、その理由は肯定的なものからではない。同業者でも顔

をしめめるような、度を超した残虐さが理由だった。意味のない殺戮を好み、人殺しが趣味とまで言われていたのだ。

その団名も、戦場で常に血煙をまとうていることからつけられたのだという噂すらある。

「かなり荒っぽい連中だぞ。際どい依頼も、金次第で引き受けるような奴らだからな。大きな戦がなくなってから話を聞かなくなったから、てっきり潰れたもんだと思ってたが……」

もっとも、ギルダスの知識の中にある彼らの人数は二百人ほどである。その時に比べればはるかの小規模だった。とはいえ、戦に明け暮れた五十人の傭兵——はつきりいつて驚異である。

「待てよ。あいつらだったら……」

「どうしましたか？」

「いや、わざわざ領主が傭兵を雇った理由なんだが……もしかしたら奴ら、“暴走”を装う気かもしれないねえな」

その場にいたギルダス以外の人物——憤怒に顔を赤くしていたルキアも含めた三人の顔つきが、そろって怪訝なものへと変わる。

「どういうことですか？」

リゼッタが率先して訊くと、ギルダスは苦い顔になって口を開いた。

「そのままの意味だ。手柄を立てるために先走ったふうを装って、集落を襲うってことだよ。命じられてはいないが、依頼者の意志を汲み取ったってことにしてな」

当然、この場合は傭兵団と依頼者——領主は口裏を合わせているので、後で領主が責められてもそんなことは頼んでいないと言い訳ができる。傭兵団も、ただ自衛のために雇ったとも言えさむ話である。

もちろん、そんな言い訳が通用するかどうかは別問題だ。

「危ない橋を渡ることが多いんで、俺がいた傭兵団ではやったことはいないけどな。似たような話は聞いたことがある」

その場合の依頼料は、口止め料込みの通常よりも割高なものとな

る。だが金が払われる代わりに命を奪われることもあり、まともな傭兵ならまず引き受けない類の依頼だった。

「今さらそんな言い訳が通るわけが——」

反論しかけた密偵の言葉を、ギルダスを冷めた視線で遮った。

「そうかもしれないが、そうじゃないかもしれない。そんなことは領主の奴らにはわからねえんじゃないか？ 集落の奴らは叩きたいが、聖封教会は敵に回したくねえ。その両方を通すための、ぎりぎりの妥協案なんだろうよ——つってもこれは俺の予想だからな。合ってるも限らねえ」

言葉尻に間違っていた時の予防線を張りながら、ギルダスは興味深そうにリゼッタへと視線を移した。

「というか実際どうなんだ？ もし集落の連中が皆殺しにでもされたら、聖封教会はどう出る？」

リゼッタは数秒考え込み、やがて重々しく口を開いた。

「そんな事態になれば、おそらく聖封教会は今ほどこの件に深入りしなくなる……かもしれない」

曖昧に言葉を濁すリゼッタに、色めき立ったルキアが詰め寄る。

その間に体を差し込んで、ギルダスは言葉の続きを待った。

「ふう……」

しばらく逡巡した後、区切りをつけるようにリゼッタはため息をついた。

リゼッタの細い手が、白衣の懷から仮面を取り出す。額から目元、鼻筋までを覆い隠す仮面を、リゼッタはゆっくりと顔に押しつけた。仮面はリゼッタの顔の形にあつらえた品であるように、寸分の隙間もなく密着する。

びくり、とリゼッタの体が震えた。

「……？」

「マルフィン司祭？」

その行動の意味がわからないルキアと密偵が、困惑した表情になった。

次にリゼッタが仮面から手を離れた時には、そこからは悪びれたような様子はなくなっていた。

「これはあくまで事態が最悪の方向へ進んだ場合の、仮定の話です。そう思っただけ聞いてください」

感情の消えた声が、その口から吐き出される。

まるで別人だった。いや——実際に今のリゼッタとさっきまでのリゼッタは別人と言ってもいい存在である。

ギルダスに話しかけてはいるが、その言葉がルキアに向けられたものなのは明らかだった。

「聖封教会もいきなり手のひらを返しはしないでしょうが、消極的にはなるでしょう。この件をあくまでこの国で起こったこととして対応するようになります。領主はこの国の法で裁かれ、その結果がどうなるかと口出しはしないはずです」

「マルフィン司祭……！」

密偵が悲鳴のような声を上げる。その目が話すのを止めるように訴えていた。その反応から、リゼッタの話が決してありえないものではないということがえる。

「身内が理不尽に捕まったってのにか？」

街の教会が封鎖された件をあげたが、リゼッタは首を横に振った。「もちろんそのことに抗議はするでしょうが、あくまで別件として扱われることになります。今の段階では、フェルカの民は聖封教会とは関係のない存在ですから」

ギルダスは呆れてため息をついた。

聖封教会の対応にはない。部外者がいる前で、ここまで本音を話すりゼッタにだ。ギルダスとはかく、当事者であるルキアもここにはいるのに、彼女の言葉に取り繕うような様子はない。

「わかりやすいけどよ、ちょっと割り切りが良すぎじゃねえか？」

「聖封教会はすべての人間を救済を唱えているわけではありません。この件に介入したのは、ことが教会の教義にかかわるものだからです」

身も蓋もないことをリゼツタははっきりと言いつた。

聖封教会がこの問題に首を突っ込んだのは、フェルカの民の多くが精錬者だからだ。

魂精^{ソレスト}装具を神の与えた奇跡とし、それを具現化する精錬者が魂精^{ソレ}装具^{スタ}を悪用しないように監視・管理する。それこそが聖封教会の目的であり、存在意義といっていい——少なくとも、建前上は。

もし精錬者がこの件に関わっていなかったらそもそも放置しておいただろうし、彼らが死んでしまった場合も距離を置くだろう。この機会に彼らを取り込もうという、聖封教会の目的はすでに果たせなくなっているからだ。

そこに人道だの人権だのと言った思想はない。ギルダスにはわかりやすい話だったが、ここでそこまで本音を——聖封教会の組織としての本音を明かすりゼツタの意図がわからなかった。

——ギリ。

「くっ……！」

歯ぎしりの音に反応してギルダスが振り返ると、ルキアが走り出すところだった。

「ギル！」

「あ？ お、おお」

呼びかけの意味を察して、ギルダスはルキアの腕をつかむ。振り回された逆の腕をかい潜ると、関節をきめてルキアを地面に押し倒した。

「っ……なんのつもりだ！」

痛みと屈辱で顔を真っ赤にしたルキアが、歩み寄ってきたルキアを見上げて抗議の声を張り上げる。

「今、何をするつもりだったのですか？」

リゼツタは地面に膝をつけると、うつぶせになったルキアに淡々とした声をかけた。

「決まっとる。皆にこのことを知らせにいく！」

「なんと伝えるつもりですか？」

「敵がくるんだろっ、それ以外に伝えることがあるか！」

「それから？ どうするつもりですか？」

「迎え撃つ！」

「勝てるつもりですか？ それに、戦えない人たちもいるはずですがその人たちはどうするつもりですか？」

「勝ち負けなんぞ後からついてくる話だ！ 戦えない者も逃げさせる。森はあたしらにとって庭みたいなものだ。ここだったらどうとでも逃げれる」

「仮に迎え撃ち、追い払うことができて……あなたたちもただではすみませんよ」

「そんなことわかつとる！ くそっ、どけ！」

ギルダスをはねのけようと、ルキアがもがいた。

「……っと、無理に外そうとすんな。折れるぞ」

顔をしかめたギルダスの忠告を無視して、ルキアは暴れ続ける。その様子を見ても、リゼッタの顔は感情ひとつ浮かばなかった。

ギルダスはその表情と同様の、仮面の奥に覗ける伶俐さを宿した瞳に嫌な予感を覚え始めていた。

「さつきから何だ、おまえは！ なにが言いたい！？」

「相手は領主に仕えているわけではありません。お金で雇われただけの傭兵です」

「だからどうした！」

「戦わずにすむかもしれない、ということですよ」

ぴたり、とルキアの動きが止まる。ゆっくりと上げた彼女の顔には、疑心が色濃く宿っていた。

リゼッタに疑いの眼差しを注いだのは、ルキアだけではない。

「……手があるのか？ 話して聞くような連中じゃねえぞ？」

ギルダスの問いに頷き、リゼッタはルキアに話しかけた。

「さっき話したような最悪の事態にならないように、あなたにも協力してもらいます。そうならないためにも、私たちはここに来たの

ですから

11・血霧の獵兵(2)

鳥のさえずり、虫の鳴き声、動物たちの営みが生み出す様々な音

風を受けた枝がしなり、その先に繁った葉が擦れあう――

自然に満ちあふれた森林が奏でる様々な音色がそこにはあった。
季節によってその音色は変わるものの、森が存在する限り絶える
ことはない。

その音色は一人の人間が生まれ、そして土に還るよりもずっと長い
間奏でられてきた。

聴く者によっては心穏やかになり、荒んだ気持ちを癒してくれる
かもしれない。物語を自らの声で唱^{うた}って生活の糧を得る語り部^{かたりべ}なら
即興で詩の一つでも作り上げただろう。

だが――今その森の奥深くを指して進んでいるのは、そんな感
性とは無縁の世界を生きていた者たちだった。

「うおっ」

列を組んで歩くその集団の一人――片方の目が醜い傷跡で塞がっ
た男が、いきなり驚いたような声をあげた。そばにいた一人が驚い
て振り返る。

「どうした？」

「ちっ……なんでもねえ。虫に刺されたただけだ」

「そんなことで騒ぐなよ。馬鹿かテメエは？」

「んだとお？ コラ、今なんつった」

「ハ、目だけじゃなくて耳まで使えなくなっただか？ もう死んだほ
うがいいんじゃないかねえかテメエ」

男は容赦のない罵倒で隻眼の男をなじった。びっくり、と隻眼の男
の額に青筋が浮かぶ。

「……殺す」

――隻眼の男が、いきなり背中中の武器を抜く。

片端が尖った鉄槌——戦鎚が、罵倒を口にした男に振り下ろされる。

当たれば即死の一撃を、男は危うく盾で受けた。甲高い金属同士の接触音が、森の音色を遮る。

戦鎚を受けた男は、直後に腰の両刃剣を抜いて横薙ぎに振った。

隻眼の男は戦鎚を滑らせて、それを受け止める。足が止まり、男たちは至近距離でにらみ合った。その表情は、ふざけているようには見えない。本気で殺す気なのだ。

それを見る周囲の男たち——同様に武装で身を固めた傭兵たちにも動揺した様子はない。

日常的な風景でも見るかのような醒めた目を向けるか、無責任に野次を飛ばしている。

仲間同士であっても、ほんの些細なことで殺し合う——それが傭兵団『血霧の獵兵』の実態だった。

「ぐっ……」

「っ……」

擦れ合う二つの凶器が、お互いの体の間でせめぎ合う。

放っておけば、どちらか片方が死ぬ——そんな常人なら怯えて立ちすくむしかない状況のなか、

「ナーニやってんだおまえら」

まるで緊張を感じさせない声が、殺気立つ二人の男にかけられた。剣と鎚で鏝迫り合いをしていた男たちは、慌てて武器を引っ込め、声のしたほうに向き直る。

そんな二人に、一人の男が顎をぼりぼりと掻きながら近づいていた。争っていた二人の顔が自然と上向く。その二人も恵まれた体格の持ち主だが、その男は彼らと比べても頭二つ分抜けていた。逆立てた髪が、人並み外れた体格をさらに際立たせている。

男は無造作に近づくと、面倒くさそうに交互に二人を見下ろした。

「た、大将……」

「おいおい。いかんだろぅが、お仕事の最中に他のことしてちゃ。」

そういうことはな、後でやれ後で」

「だけだよ……」

隻眼の男が、額から汗を流しながら不満そうな声をあげる。

「んん？」

「あ、いや……。なんでもねえ」

だが視線が合うと、目をそらして口をつぐむ。その態度が両者の立場の違いを物語っていた。

「ん、わかればよろしい」

ニツ、男は口端をつり上げて笑う。嫌みのないさっぱりとした笑みだった。

笑みを浮かべたまま、男は陽気な口調で続ける。

「とはいえ、馬鹿にされて殺したくなるっておまえの気持ちもわからんでもない。その鬱憤うづぶんはこれからいくところで晴らせ。そこでだつたら好きに暴れていいぞー」

男は周囲を見渡すと、近くにいた傭兵たちにも話しかけた。

「なんせ今回は皆殺しにすれば、奪うのも犯すのも、なんでもしていいってお墨付きだからな。おまえら、好き放題暴れていいぞ」

『おお！』

口調に合わない過激な発言に、歴戦の男たちは欲望にまみれた蛮声で応えた。

再び歩き出したその歩みは、さっきまでと比べていくぶんかペーすが速い。どの顔も欲にまみれてぎらついていた。

その先頭に陣取って男も歩き始める。脚の長さからして違うので、ほかの傭兵たちのように急いでいるといった印象はない。

「ん？」

その目が、不意に細められた。男の見つめる先には、さっきまでとなんら変わらない緑にあふれた光景が広がっている。

足を止めた男のすぐ脇を、血気に逸った一人の傭兵が抜き去ろうとした。

男は遮るように腕を伸ばす。

「？ 大将？」

「まー待て待て、気合いが入ってるのは結構なことだが、油断は禁物だぞ」

「わかってますって。けどよ大将、今回の依頼はしみつたれた集落を潰すだけなんだろう？ 油断もしたくなるってもんですよ」

「そうなんだけどな。そこらへんちよつとひつかかるところがあるし、なにより今この状況が一番ヤバイ」

「へ？ そりやどいうことぞ？」

「教えられたルートは一つきりだったろ。となると当然このルートは相手にも知られてるってことだ。ということはどいうことだ？」

「……あ」

男はうんうんと頷いた。こうした状況で想定できることは、それほど多くはない。

「待ち伏せに向いてるってこった」

男の手が背中伸びる。その手が背中にある“得物”に触れた瞬間、

「こんなふうにな」

男の口端が最大限につり上がった。

——ガギッ！

刃が空を斬り裂く。軌道上にあるものすべてを両断しながら、それは頭上から振ってきたもうひとつの刃に激突した。

その衝撃に、樹上から斬りかかってきた人影が弾き飛ばされる。

「……ほっ、受けたか」

しとめ損ねたことに驚きながら、男は自らの得物を引き戻した。相手が騎士でも、馬ごと斬れそうな大きさの剣である。それでも男の体格からすると普通のサイズにしか見えない。その色は血に塗れたような赤。男があらかじめ具現化していた魂精装具^{ソレスト}だった。

状況を理解した周囲の傭兵たちが殺気立つ。男はその動きを手を

振って抑え、弾き飛ばされつつもうまく着地した人影に視線を向けた。

奇襲してきた人影——炎のように赤い髪の少年は、怖じ気づいた様子もなく剣を構えている。

「大した胆力だな」

男は感心したように話しかけた。少年の存在はあらかじめ聞いていたので驚きはしないが、それでもそのすべてを信じていたわけではない——実際に会うまでは。

「おまえさんが話に出てきたガキか。ガキにいいようにやられて情けねえとは思ってたんだが……それなりに腕は立つみたいだな」

「よう、おまえさん。どうして俺たちが来るのがわかった？ まさかずっと木の上で待ちかまえていた訳じゃあるまい」

朗らかに話しかけてくる巨漢の男に、ギルダスは無言で応じた。

答える義理はないし——必要なこと以外は話すとも言われている。「だんまりか。じゃあ、何の用だ？ まさか本気で一人でやり合うつもりじゃないだろ？」

「忠告にきた」

「ほつ、忠告なあ？」

明らかに面白がつている様子で、男は身を乗り出した。大剣を地面に突き刺し、聞く体勢になる。

ギルダスは意識して無表情を続けながら言った。

「あんたらが依頼通りに仕事をして、金は入らねエ」

「……ほつ」

男の眉が、ぴくりと跳ね上がる。

「俺の知らんことをいろいろ知ってるみたいだが……ま、いい。続けてみな」

「あんたらは知らねエだろうが、今回の件にはあの“聖封教会”が

一枚噛んでる」

「聖封教会が……？」

ギルダスはゆっくりと頷いた。精錬者なら、聖封教会がどういった存在かは誰でも知っている。その規模や、どういったことができるか、ということも。

「今回の件であんたらの依頼主——ドールン辺境領領主は、聖封教会を敵に回した。今頃は教会とヴァルト王国が交渉してる最中だ。それが終われば、領主はヴァルト王国に地位を取り上げられる。私財もろともな。……引き返しな。ここの領主相手にタダ働きする義理もねエだろ」

「……それが本当だって証拠はあんのかい？ おまえさん、集落の連中に雇われた傭兵なんだろう？」

「領主からはそう聞いてんのか。傭兵だったのは本当だが、雇い主は違う。——リゼツタ！」

ギルダスの呼びかけに応じて、今まで木陰に身を潜めていたりゼツタが姿を現す。純白を基調としたゆつたりとした衣装——聖封教会の法衣を身につけた女の登場に、傭兵たちはざわめいた。その顔につけた白の仮面も、その一助になっている。

「あの女が俺の依頼主で、聖封教会の司祭殿だ」

「……どこか適当な女に、それっぽい格好をさせただけかもしれねエわな」

「疑うなら二、三日待ってみろよ。俺の言ったことが本当だってわかる。それとも——」

あくまで疑う男に、ギルダスは笑いかけた。友好さとは真逆の、見る者によつては悪寒を覚えるような笑みである。

「待ちきれねエなら、ここでやり合ったって俺は一向に構わねエよ。依頼主殿の御意向で柄じゃねエ話し合いなんぞやってるが、俺としちゃあそっちのほうがわかりやすくていい」

少年の顔に凄みのある笑みを浮かべたまま、ギルダスは腰を落とした。

実際のところ、五十人の傭兵を敵に回して勝てる自信などない。ようするにハツタリだが、この場合は相手にほんの少しでも危機感を抱かせるのが目的だった。

二、三日中に話がつく確証などないが、少し調べればギルダスの言っていることがなんの根拠もないデタラメではないことはすぐにわかる。

言葉とは裏腹に、ギルダスは傭兵たちが武器を納めて引き返すことを望んでいた。

だが――

「く……くく」

傭兵たちはお互いに視線を交わしあう中、そのうちの誰かが笑い声をもらす。

「……？」

笑い声はだんだんと増えていき――それはすぐに耳を塞ぎなくなるような爆笑へと変わった。

ギルダスと向き合っていた男が、振り返って手を広げた。

「どうする、おまえら？ 金が出ないんだとさ」

「そりゃ困ったな」

「ああ、困った」

水を向けられても傭兵たちに動揺はない。そのうちの一人が、へらへらと笑いながらある提案をした。

「こうなったら、その集落で金目のもんを根こそぎいただくしかねえなあ」

「っ……」

（――そうくるか）

さすがにこれで終わると考えるのは、楽観的過ぎる予想だったらしい。

「聖封教会に喧嘩を売る気かよ」

「聖封教会なんて知らねえなあ」

傭兵の一人が、とぼけたような声を出す。

「そんな話、なあんにも聞いてねえからな」

違う一人が、調子を合わせた。

どうやら、そんな話など聞かなかったとシラをきるつもりらしい。それ以前に、男たちは聖封教会をあまり恐れているようには見えなかった。

怖い者知らず、命を惜しまない狂人の群れ——そんな風評が、ギルダスの脳裏をよぎる。

ずらりと引き抜いた大剣を、男は肩に担いだ。

「ま、ぶつちやけるとだ。金の心配もないんだよな実は」

「……？」

「今回の件が妙にきな臭いってことはわかってたからな。もう貰ってる。前払いで、な」

——くは。くく。くふふふ。

嘲笑が耳をつく。

嫌らしい笑みを浮かべたまま、傭兵たちは少しずつにじり寄ってきた。

「だからって諦めて殺されるなんて言うつもりもないぞ。死ぬ寸前まで抵抗してみろ。その方が遊びがいがあるしなあ。おまえさんも望むところなんだろう？ ……ああ、そっちの司祭殿には、別の遊びの相手をお願いするかね。変な仮面をかぶつちやいるが、見たところ顔つきは悪くなさそうだ。ちっと人数は多いが、最後まで付き合ってくれよ？」

男の口元が歪に歪んだ。取り囲むように近づいてくる傭兵たちと同じ、圧倒的優位に立ったものが浮かべる嗜虐じやく的なものへと笑みの質が変わっていく。

ギルダスは曲剣を下げて、顔を俯かせた。それを見て、男はつまらなそうに鼻を鳴らす。

「なんだあ？ つまらねえなあ、諦めたのか——」

「——クク」

低い笑い声が、ギルダスの口からこぼれた。

無造作に近づいていた男の足が、ぴたりと止まる。

「……なにがおかしい？」

「なにがおかしいって？ そりゃ笑うしかねエだろ。 あんたらは何もわかつちやいねエんだからよ。……なんで聖封教会が今回の件に首を突っ込んだと思う？」

嘲る口調のギルダスが顔を上げる。そこには、ついさつきまで傭兵たちが浮かべていたのと同質の笑みが張り付いていた。

ギルダスが手をあげ、一本だけ立てた指をくいつと折り曲げた。

直後——どこから飛んできた矢が、傭兵たちの前へと突き刺さった。

傭兵たちは一斉に飛び退き、それぞれ近くの木の陰に身を隠す。

「伏兵だと！」

「どこから飛んできた！？」

矢の飛んできた方向を警戒する傭兵たちをつまらなそうに見渡すと、ギルダスは一人残った巨漢の男に語りかけた。

「その矢を見てみるよ」

地面に突き刺さっている矢は、通常ではありえない琥珀色をしていた。

「魂精装具……？」
ソレスト

「あんたら、自分たちが潰そうとしている集落について全然知らされてねエみたいだな。あそこの奴らは、ほとんどが精錬者だ。だから聖封教会のこの件に首を突っ込んだんだよ。それをやったのも——」

顎で指し示すと、琥珀色の矢はちょうど光の粒子に分解されるところだった。

「その集落の一人だ。あんたらに襲われようと、ただ殺されるような大人しい連中じゃねエのさ」

傭兵たちが色めきたつ。ただ一人、巨漢の男はギルダスの言葉が真実かどうか見極めるように黙っている。

「それに——」

ギルダスが再び癡猛な笑みを浮かべる。その表情からは、さつきまでは混じっていた演技の色が抜けていた。

「さつき言ったことも単なるハツタリじゃねエぜ？ 俺もただ殺されるつもりはねえ。この人数相手にやかなわねエだろうが、最低でも五人は道連れだ」

「この……ガキの分際で——」

「待ちな」

いきり立つ傭兵の一人を、男は無表情で止めた。男だけは、相手が見た目通り、“ただのガキ”ではないことを知っている。

男が黙り込む。周りの傭兵たちは、男の決断を待つかのように動きを止めた。

一度依頼を引き受けた傭兵としての自負心。

ギルダスの言葉の真偽と、集落の人間たちの実力。

ギルダスと、その背後にちらつく聖封教会を敵に回すことへのリスク。

それらを天秤にかけて、男は答えを探しているように見えた。

いや——天秤にかける要素は、もう一つあった。

「やっぱり、引けねえな」

男が笑う。さっきまでのような嫌らしい笑顔ではない。むしろ朗らかとっていい笑みだったが、そこには妙な凄みがあった。

おそらくこの顔で、この男は何人も殺してきたのだろう——そう思える笑顔だった。

「いくらおまえがただのガキじゃなくても、やっぱりガキはガキだ。ガキ一人に脅されてすごすこと引き下がったなんてな、みつともなくてできることじゃあねエんだよ。おまえも傭兵なら、そこらへんわかるだろ？」

頷きこそしなかったが、ギルダスは内心で同意した。

傭兵としての——しかも、五十人の傭兵たちを従わせる傭兵団長としての面子が男にはあった。それは精神的な問題だけではなく、実質的な問題も兼ねている。ここで引いたら、男を見限る傭兵たちも

出てくるだろう。

その要因が、天秤をギルダスが望まない方へ傾かせた決め手になった。

「……そうかよ」

（——ここまでだな）

ギルダスは深々と息を吐いた。その表情が、ある種の覚悟を決めたかのような壮絶なものへと変わっていく。

リゼッタの筋立て通りに交渉は進んだが、最後の最後で決裂した。あとは血塗れの殺し合いだけだ。

とはいえ、まともにぶつかって生き残る可能性は無いに等しい。

まず最初に団長らしき巨漢の男に一太刀浴びせる。その結果に関わらず、あとは背中を向けて一目散に逃げだす。うまくいけば、ばらばらになった傭兵たちを相手に有利に戦いを進められるかもしれない。

頭の中で生き残る算段を巡らせて――

「――二つほど、尋ねたいのですが」

唐突な疑問の声は、ギルダスの背後からのものだった。

12・血霧の獵兵（3）

「——二つほど、尋ねたいのですが」

唐突な疑問の声は、ギルダスの背後からのものだった。

（リゼッタ？）

傭兵たちを前にして振り向くことができないギルダスは、耳に意識を集中する。

初めて口を開いたリゼッタに、巨漢の男は面食らったようだった。殺気が薄れ、曖昧な表情で首を傾げている。

「なんだ？ 命乞いってわけじゃなさそうだが」

「聖封教会が魂精装具ソレストを悪用する精錬者を発見した場合——どう処罰するかは、ご存じですか？」

「へ？」

男は間の抜けた声をあげる。ギルダスも場にそぐわない質問に思わず振り返りそうになった。

「どう処罰するか……？ そりゃ牢屋にでも入れられるか、下手すりゃ死刑なんだろう？」

「それは普通の罪人を裁く方法です」

「……へえ」

男の声音が変わる。好奇心がもたげたらしく、顎を出して話を続けるように促した。

「罪が軽ければ、罰は普通の罪人と同じです。鞭打ちや懲役ちやうえきなど、なんら変わらない罰が課せられます。ですが、命であがなうほどの罪を犯した者への罰は、通常とは異なります」

「命取られる以外にどんな罰があるってんだ？」

首を傾げる男の問いに、リゼッタはすぐには答えない。ギルダスも男を見据えてまま、話の続きに耳を傾けていた。

「あなたの仲間には、あなた以外にも精錬者がいるようですね」

元々戦いを生業とする者の集団である。精錬者が何人かいてもお

かしくはない。

リゼッタは魂精装具ソレストを持っていてる傭兵の一人一人を順番に見渡した。なんとも居心地の悪い間に何人かの傭兵が身じろぎした。

男の眉間に皺しわが寄っていくのを見計らったように、リゼッタはゆつくりと口を開いた。

「もし、精錬者がなんらかの重罪を犯した場合——その精錬者は、魂精装具ソレストを破壊されます。その意味は……おわかりでしょう？」

「……」

男の顔から、表情が消えていく。リゼッタに視線を向けられた精錬者の傭兵たちの顔も、急に強ばっていった。

初めて聞く話に、ギルダスも思わずリゼッタを振り返った。その顔は仮面に覆われ、言っていることが本当なのか読みとることはできない。ただ、嘘だと断言できるような確証もなかった。

——魂精装具ソレストを破壊された場合、精錬者は心を失うといわれている。魂精装具ソレストは人の魂の具現化したものといわれているだけに、その説には妙に説得力があった。

厳密に言えば魂精装具ソレストと魂の関連性は証明できているわけではない。それどころか、魂とは何かという疑問にはつきりとした答えを持っていない者もほとんどいない。だが、魂精装具ソレストを失った精錬者が廃人同然になるのは周知の事実だった。

ある意味それは、命を奪われるよりも恐ろしい罰である。

「……なるほど、そんなだったら、戦で殺されたほうがずっとマシだな」

男の口調から陽気さが消えていた。無言になった傭兵たちにも、動揺の気配が漂っている。

彼らにとって死は身近で恐れるものではないが、心を失うという未知の体験は味わいたくないらしい。

「訊きたいことは二つあるって言ったな。もう一つは？」

傭兵たちの恐れを察したのか、男はあからさまに話題を変えてきた。リゼッタも話を続ける気はないらしく、今度はあっさり男の問

いに応じる。

「今回の件であなたたちに払われた依頼料は、いくらほどですか？」

「……それを訊いてどうする？」

リゼッタからの返事はない。答えを聞かずに話を続ける気はないという意思表示である。

今この場を主導しているのは間違いなくリゼッタで、無視できるような状況ではない。顔つきを険しくしながらも、男はむすつとした口調で答えた。

男の告げた金額は、依頼の内容からすれば破格のものだった。口止め料も含まれているからだろう。

リゼッタがちらりとギルダスに視線を向けてきた。

「……まあ、そんなもんだろっな」

ギルダスが頷くと、リゼッタは男に視線を戻して淡々とした口調で話し始めた。

「私は一介の司祭ですが、旅費や与えられた役目に関しての経費は聖封教会から支給される立場にあります」

いきなり話題が変わり、男は困惑顔になる。

「その金額に制限は決められていません。もちろん、限度はありますが、小規模の傭兵団を雇う程度の金額なら自由にできます」

「ほお……」

リゼッタの意図を察して、男の口元に笑みが浮かんだ。ただし目は笑っていない。それがわかつているのか、リゼッタの口調は決められた台詞を呼んでいるように淀みない。

「もしあなたの方がこの件から身を引いてくれたら、おそらく数日のうちにそれなりのお金があなただちに入るでしょう」

ギルダスは話に耳を傾けながら、内心で嘆息した。要するにリゼッタは、金をやるから手を引け、と言っているのだ。

相手によっては効果はあるが、こいつに通じるのか——ギルダスは両方が視界に入るように、体を傾ける。

男の反応は冷ややかなものだった。

「そりゃありがたいな。どこの誰かは知らねえが、俺たちみたいな人種に金を恵んでくれるってか」

内容とは裏腹の、あまり信じていない口調である。

「で？ 俺たちに確実に金が入るって保証はあんのかい？」

眼を細める男を前に、リゼツタは懷から何かを取り出した。

躊躇いもなく放り投げられたそれは、放物線を描いて男の手のひらに収まる。

「？ なんだこりゃ？」

手の中の品を見下ろして、男は首を傾げる。脇からそれを覗きこんだ傭兵の一人が驚いた声をあげた。

「大将……！ こりゃかなりの値打ちもんですぜ！」

「これがか？」

男が半信半疑といった様子でそれをつまみあげた。宝石のような丸い石を核に、周囲を螺旋状に細工された金属が覆っている装飾品のような代物である。

宝石や貴金属の目利きなどできないギルドスにも、それが凝った細工だということはわかった。

「どの町でもかまいません。ことが終わったら、それをその町にある聖封教会にまで持っていくってください。引き替えに、あなたたちが満足するだけのお金が渡されるはずです」

「担保、ってわけか」

男はつぶやき、あまり乗り気ではなさそうな様子で空を仰いだ。

「それと——」

「んん？」

「もし仮に、私たちがこの森で行方を経った場合、あなたたちの情報が聖封教会に流れるようになっていきます。引き替えにこなかった場合もです。その際のあなたたちの処遇は、さっき話したとおりですのであしからず」

瞬間——男は眼球が飛び出るのではないかと思えるほど目を見開いた。

リゼッタをまじまじと見つめ、次につまみあげた“担保”と交互に見る。

対照的に、リゼッタはこの場に姿を現してから一貫した無表情だった。

「……へ」

男の口元が、不意に歪んだ。

不適な笑みが、その顔に浮かぶ。

男は渡された“担保”を掌中に納めると、大剣を肩に担いだ。

「そいつは俺を脅してんかい？」

「私は事実を述べているだけです」

「ふうん」

男は無造作に顎を掻いた。

「参ったね、こりゃ」

大げさに嘆息し、空を仰ぐ——その眼光が鋭く光ったようにギルダスには見えた。

前置きはそれだけだった。

男の上半体が前へと倒れながらひねられる。担がれた大剣が全身の力を使って振りおろされ、残像を残して男の手から離れた。

気を抜いたいたわけではない。注意していても、かろうじて反応できるほどの速さだった。

うなりをあげて、大剣が回転する。狙いはギルダスではない。さらにその後ろ——リゼッタだった。

「くっ！」

ギルダスとはつさに剣を伸ばした。大剣と接触し、弾かれる。取り落とさずにはすんだが、大剣の軌道は変わっていない。

「避ける、リゼッタ！」

振り向きながら叫ぶ。

リゼッタは——動かない。立ったまま、迫る大剣を見つめている。
(くそっ——)

間に合わないとはわかりながらも、ギルダスは走り出した。手を

伸ばす。

それよりも早く、大剣はリゼッタに到達し——直前で止まった。大剣がおこした風に、リゼッタの髪が舞い上がる。その体には、傷ひとつついていない。

大剣は空中で動きを止めていた。何もない場所で投げられた剣が止まるはずもない。つまりは、そういった“能力”なのだろう。それを示すように、剣は再び回転して男の手に戻っていった。

「なんのつもりだ、てめえ」

厳しい顔でギルダスは問いつめる。返事によっては斬るつもりだった。

男は問いに答えず、リゼッタを見ていた。

「びびったかい？」

「なにがですか？」

何事もなかったように答える。男がうれしそうに笑った。

「クツクツ……大したもんだ、あんた。きっちり命張ってらあな」

「試したってことか……！」

噛みしめた歯を軋ませて、ギルダスが吐き捨てた。

「そうさ。どんだけ口が回ろうが、お偉い身分だろうが命を張らねえ奴を俺ア信用しねえ。そう決めてる。特に、下っ端を前面に立たせて、自分は安全なところでのうのうと口上たれてるような奴はな」

言いながら男は感心したように笑みを浮かべていた。

「口だけの野郎だったら乗る気はなかったんだぜ？ けどあんただったらいい、引き上げてやらア。そんなかわり、筋は通せよ？」

「最初から曲げる気などありません。そして口先で納得しないのはこちらも同様です」

「ほっ、あんたが傭兵だったらおもしろかったのにな」

男は愉快そうに頷き、くるりと身を翻した。

一部始終を見ていた傭兵たちは、毒気を抜かれたような顔で男に注目する。

ゆっくりと首を巡らせてから、男は息を吸った。そして——

「おまえら！　引き上げた！」
高々と張り上げられた声が、ことの終わりを告げた。

13・血霧の獵兵（4）

男の号令の後――

特に問題も起こらず、傭兵たちは拍子抜けした顔で来た道を引き返していった。何人かは未練があるような者もいたが、男の顔を見ては諦めたように足をひきずっていく。

その様子を見ながら、ギルダスは視界の端に意識を移した。

巨漢の男が腕を組んで立っている。まだ動かないところを見ると、どうやら最後尾に行く気らしい。

ギルダスが油断なくその挙動を見ていると、急に振り返った男と目が合った。

男はニツと笑い、なれなれしく話しかけてくる。

「そんなに構えるなよ。ここまできて騙しやしねえさ」

「そう言われて素直に信じろってか？　できるかよ」

ギルダスは吐き捨てた。

金であっさりと依頼主を裏切るような男だ。口で何を言おうと、

あっさり信じる気にはなれなかった。

「^{ちげ}違えねえ」

男は怒るでもなく、あっさりと笑い飛ばした。それを見えますますギルダスには不信感を募らせていく。

「^{ふぶんりつ}気に入らねえな。不文律^{ふぶんりつ}つてもんがあるだろうが」

「傭兵の鉄則ってヤツかい？　おまえさん若いのに固いこと言っ
あ」

“一度引き受けた依頼は、よほどのことがない限り投げ出してはならない”。そうした不文律が傭兵には存在している。

必ずしも守られているわけでもなく、明文化されてもない上に罰則もない。だが、だからこそ重要視されてもいた。それを破るような傭兵は、他の傭兵たちに信用されず傭兵ギルドからの待遇も悪くなる。要するに、仕事を回してもらえなくなるのだ。

このことを知った依頼人などは感心するが、ようは信用の問題だった。

ただでさえ傭兵は白い眼で見られることが多いのに、それに加えて依頼人を簡単に裏切るようであれば、誰も傭兵を頼らなくなる。

「安心しな。誰でも裏切るってわけじゃない」

男は視線を脇にそらした。

「裏切っていい相手といけねえ相手ぐらいわきまえてるよ」

その目が見つめる先には、立ち去る傭兵たちを見届けているリゼツタがいる。

「なんなんだろな。こう、言葉にできるはつきりした怖さってのはないんだが……女で敵に回したくないって思ったのは初めてだぜ」

「……」

「それにだ、おまえらの話通りもうすぐ領主がクビになるんだったら俺らの評判が悪くなることもないだろうからな」

肝心の依頼主がいなくなれば、自分たちが裏切ったことへの悪評が立つこともない。だから裏切ることに抵抗はない——男はそう言いたいらしい。

開き直ったような物言いに軽い口調だったが気は抜けない。

領主は聖封教会のことも伝えていなかったから、領主の側にも問題はあつた。そのことを知った時点で契約を取りやめにしても、ギルダスにもそれを責めるつもりはない。

それはいい。

問題はすべてを知った上で『血霧の獵兵』が集落を襲おうとしたことだ。

集落の住人たちが、ただの無力な民だった場合——どうなったかを想像して、ギルダスは顔をしかめた。他人事とはいえ、惨劇を想像して楽しむ趣味はない。

自然と皮肉が口からこぼれた。

「おまえらの評判なんざ、元々最悪なんじゃねエのか」

「へ？」

きょんとした顔を見せたあと、男はいきなり爆笑した。困惑するギルダスをよそに、目の端に涙をためながら、ヒーヒーと苦しうに腹を押さえる。

「何で笑う？」

「プハッ、ク、クク……い、いや。悪い悪い。そんなふうには馬鹿正直に言ってくるヤツは久しぶりだったから、おかしくってな」

馬鹿正直と言われて、ギルダスの顔が慥然としたものに変わる。

男はそれすらおかしいようにニヤニヤと笑みを浮かべた。

「それで、評判の話だったか？　そうでもないぜ。俺たちみたいな悪党はな、こう見えても腹黒い奴らには評判がいい。どこにだってそういう奴はいるもんだ。戦がなくても俺たちの食い扶持がなくなることもないだろうぜ」

忌々（いまいま）しげに顔をゆがめながら、ギルダスは顔を背けた。今さら頷くのもばからしくなるほどわかりきったことだったからだ。

金があり、悪意があり、なおかつ自分の手が汚れるのを嫌う人間はどこにでもいる。『血霧の獵兵』のような金次第でなんでもやる集団は、そういう者たちにとって欠かせない存在なのだろう。

——ポン。

ニヤニヤ笑っていた男が、急に何かを思い出したように両手を打ち合わせた。

「そうそう、おまえさん、名前はなんてんだ？」

「あア？」

「名前だよ、名前。そんなくらい教えてくれないだろ？」

「……ギルダスだ」

「んん？　どこかで聞いた気がするな」

男は顎に指を添えて首を傾げた。それでも結局思い当たる節はなかったらしく、

「まあいいか」

と、大きく頷く。

と思いきや今度はおもむろに近寄ってきて、口元に手を添えた。反射的に剣を叩きつけそうになるギルダスを目で抑え、耳打ちしてくる。

「おまえさん、ウチにこねエか？　なかなか見所あるぜ」

ぎよつとして見返すと、男はイタズラを思いついた時の子供のような笑みを浮かべていた。

「待ち伏せのとき、殺気むき出しにしてたのってあれ、ワザとだろ？」

ギルダスは顔をしかめた。見透かされていたことは予想済みだったが、男の提案は気に障った。

「ゴメンだな。あんたの下で働きてエとは思わねえ」

ギルダスに睨みつけられ、男はひよいと肩をすくめて振り返った。話している間に、傭兵たちの最後尾はかなり先まで進んでいる。

「そか。俺は『血霧の猟兵』の団長をやってるグレッグってんだが、気が変わったら会いに来い」

「変わらねエよ」

「なら次に会った時は殺し合いだな。おまえだったらそっちでも楽しめそうだ」

巨漢の男——傭兵団『ブルート・イエーガー血霧の猟兵』団長のグレッグは、にやりと笑ってから歩き始めた。

背中越しにひらひらと手を振るその姿は、妙にさばけたものがある。

その背を見るギルダスの表情は、自然と苦々しいものへと変わっていった。

「くそつ、冗談じゃねエぞ」

悪評ばかりが先立って、その実力には不透明なところがある『血霧の猟兵』だったが、戦狂いとも呼ばれるような連中だ。弱いわけがない。

特に、団長のグレッグは望んで剣を交えたいとは思わない——それほどの使い手だった。

傭兵たちの姿が完全に消えたところで、ギルダスは深々と息を吐いた。

気づけば、リゼッタがすぐ傍に立っている。

「……まさか、本当に上手くいくなんてな」

薄氷を踏むような時間が過ぎ、さすがに気疲れしていた。対照的に、リゼッタにはまるで疲れた様子が見られない。

「おまえが口を挟むなんざ、聞いてなかったからよ。ま、そのおかげでなんとか話はまとまったんだろうが」

事前の話では、交渉がギルダス一人で行うはずだった。リゼッタの口出しは、完全に予定外である。

「口を出す予定などありませんでし。ましてや——」
リゼッタは急に口をつぐんだ。

怪訝そうに見つめるギルダスの前で、顔につけていた仮面を外す。びくりと体を震わせた後——リゼッタの露わになった表情が微妙に変化した。

知らない者からすればそうは思えないだろうが、ギルダスにはリゼッタの不機嫌さがひしひしと伝わってくる。

「いえ、なんでもありません」

「……ならいいけどな」

言葉を濁すリゼッタからギルダスは視線を外した。今のリゼッタを追求することは、藪をつつくのと同意だ。飛び出た蛇に噛まれてはたまらない。

それに、リゼッタの不機嫌が悪い理由はなんとなく想像がついていた。必要なことだったとはいえ、傭兵たちを買収じみた真似をしたのが気に入らないのだろう。

微妙に重い空気のなか、茂みをかき分ける音が二人の耳に届く。姿を現したのは、傭兵たちの襲来を知らせた聖封教会の密偵である。

交渉の間、リゼッタの指示で彼はすぐそばに身を潜めていた。交

渉が失敗すれば、集落まで駆けつけてそのことを知らせ、その後には聖封教会へも報告に走る予定だった。

密偵はリゼッタに近づくと、

「傭兵たちは森の外れへと向かっています。それと、言われたとおり印を変えておきました。これで集落までの道筋は途絶^{ただ}えたはずす」

と簡潔に報告した。

どうやら気づかれないように傭兵たちの後をつけていたらしい。

それ以外にも、集落まで続く道筋の目印にも手を加えていたようだった。

「あん……？　ちょっと待て。今さらだけどよ、交渉なんて面倒臭えことせずに最初からそうしてたらよかつたんじゃねエか？」

ギルダスが頭を傾げると、密偵は何を今さら、と言いたげな顔で、

「私にそんなことを決める権限はない」

と無愛想に返した。

「知らされた時点で、彼らはすでに森に入っていましたから。偶然集落にたどり着かないとも限りませんし、中で迷った彼らが自棄になつて森に火を放つということも考えられました」

リゼッタの補足にギルダスは曖昧に頷く。

実際には、森のただ中で火をつけても放火した側も巻き込まれるのでその可能性は低かつただろう。

「それでは、私はこれで」

用事は終わった、とばかりに密偵が踵を返した。その背に向かつて、リゼッタが礼を告げる。

「ええ、ありがとうございます」

振り返った密偵は意外そうな顔をしていた。

「いえ……役目ですから」

そう言いおいて、木々の間へと消えていく。

まるでいないものと扱われたギルダスはつまらなそうな顔のまま、横にいるリゼッタに問いかけた。

「あ……ところで、その、なんだ」

「なんですか？」

「本当にあいつらに金を払う気か？」

とたんにリゼッタが眼を細める。背筋に悪寒を感じたギルダスは、さりげなくリゼッタとの距離を空けた。

「そのつもりです」

返ってきたのは、実に素っ気ない声だった。

「不本意ですが、約束は約束です。それに、個人的には嫌いですがあぁいった人種は敵に回すと厄介でしょうから」

「……ま、そうだな」

さして関心なさそうに相づちを打ちつつも、ギルダスは内心で安堵していた。

わざわざ不機嫌になるような話題をふったのは、リゼッタが金を払わないつもりだったら、払うように説得するためだ。

もし『血霧の獵兵』が報復に来るとしたら、矢面に立つのはギルダス自身である。

「それに、彼らには預けたものを返してもらわなければなりません」
リゼッタがグレッグに渡したもの——その装飾品のような代物を思い出し、ギルダスは首を傾げた。

「そっぴやよ、アレってなんだったんだ？」

「聖封教会の限られた者たちに与えられる“証”です」

「証？ ……よくわからねエが、そんなもん取引材料にしてよかったのか？」

「構いません。私にとっては、ただの物です」

「ふうん……」

会話をしながら、二人の足は自然とリリーネのいる小屋のほうへ向かっていった。

その歩みが、急に止まる。

顔をしかめるギルダスの隣で、リゼッタが一步前へ出て深々と頭を下げた。

「あなたの協力のおかげで助かりました。ありがとうございます」
「矢を一本射ただけだ」

無愛想な返事は、ルキアのものである。
待ちかまえていたらしいルキアは、睨みつけるような眼差しを二人に注いでいた。

最初に礼を言ったりゼツタを見下ろし、次にギルダスを見据える。
その段階で、ルキアの険しい顔がさらに険しくなっていく。

「な、なんだよ？」

「……なんでもない！」

怯むギルダスに吐き捨て、ルキアは背を向けた。

(……なんなんだ？)

呆れるギルダスをよそに、その背中が遠ざかっていく。

そのまま立ち去るのかと思いきや、ルキアは急に立ち止まった。

「……？」

「あたしは、おまえらが嫌いだ」

いぶかしげにギルダスがルキアを見てみると、顔を前へ向けたままのルキアが言った。

ギルダスとリゼツタは思わず目を合わせる。

「早く出ていかんかとは今も思つとる」

「……何が言いてえ？」

ギルダスは眉根を寄せた。礼など期待していないし、そもそもフェルカの民のためにやったことではないが、今さらわかりきったことを命を張った直後に言われてはさすがに腹も立つ。

同時に違和感も覚えていた。ルキアの口調からは、その内容とは裏腹に、常にあつた突き放すような感じはなくなっている。

「だけど、おまえらがいなかったら仲間たちが何人も死んでたろうだから……」

ルキアがちらりと振り向いた。ギルダスとルキアの視線がその瞬間だけ交錯する。

ルキアの瞳が躊躇^{ためら}いに揺れたのは一瞬、

「二度とあんな下らん真似はさせん。あたしの戦士としての誇りにかけて誓う」

強い決意の込められた言葉をあとに、彼女は太股で歩き出す。その姿をギルダスは呆然と見送った。

彼女の後ろ姿が見えなつた後で、ギルダスは思わず苦笑する。

「……ったく」

どうやら、今はルキアなりの礼のつもりらしい。

「どっちが回りくどいんだか」

「ギル？」

リゼッタの問いかけの意味をこめた眼差しから逃れるように、ギルダスは歩きだした。

「ちよつと待つてください、ギル。彼女と何かあつたんですか？」

「あー、ちよつと待て。ちゃんと説明するから」

どのみち、伝えなければならぬことだ。

追いかけてきたリゼッタを一瞥し、ギルダスは小屋の前での出来事を話し始めた。

なるべくリゼッタを刺激しないようにと、頭を悩ませながら。

14・狂気の脈動

夜——明かりも灯されていない部屋の中、一人の男が椅子に腰掛けていた。

何をするでもなく、男は肘掛けに両手を置いて中空を見据えている。

眉間には深い皺しわが刻まれていた。加齢以外にも、ここ数年におきた様々な変化が彼にその皺を刻ませていた。

すでに中年の域を越えようとしているその男には、世界のすべてが色あせて見えた。

ドーラン・クリサウス——この地を治める領主の名であり、また同時に男の名でもあった。

静かなばかりだった部屋に、扉を叩く音が響く。

「……入れ」

「失礼いたします」

入ってきたのは、ドーランよりもさらに年を経た老人だった。ドーランにとっては見慣れた顔である。

「旦那様。お加減はいかがですか」

返事はない。代わりに顔を向けたドーランが、億劫おっくうそうに口を開いた。

「どうであつた？ 例の傭兵どもは」

老人が表情を曇らせる。

「それが……クリアス大森林から出てきたところまではわかっているのですが、そこから先の足取りは掴めていません」

「そうか」

ドーランはあっさりと頷いた。

ある目的で雇った傭兵が行方をくらませた——その話を聞いてから、すでに三日が過ぎている。

森を出てきてから消息を絶ったということは、彼らの身に何かあ

つたとは考えられず、おのずと答えは一つに絞られた。

おそらくは——裏切り。依頼料をだまし取った上での逃走である。それを知ってもドーランの感情に波が立つことはない。傭兵団に対する怒りも、依頼料を全額前払いしたことへの後悔もない。

もともと大して期待していなかったということもある。だがそれ以前に——彼の心は、滅多なことでは反応しなくなっていた。

「申し訳ありません。すぐにでも見つけだし、事情を問いただして

——」

「よい」

「は？」

「もうきやつらは領外に出ているだろう。時間の無駄だ。やはり、決着は私の手でつけなければなるまい」

「ですが……」

老人は口をつぐんだ。抗弁は無礼にあたる——そう信じているのだ。その愚直なまでの実直さを、ドーランは評価していた。

傭兵を雇うことを進言したのもこの老人である。本人はそのことに責任を感じているらしいが、責める気にはなれなかった。

すべては主であるドーランの立場を心配してのことだ。その気遣いには感謝していたが、今さら立場や身分に執着はなかった。

跡継ぎもなく、自分が死ねば領土も財産も国に召し上げられるか、遠戚の手に渡るだけだ。

「時間がない。すでに王家には聖封教会の手が伸びているのだろう？」

「は……」

無念さを滲ませた声が、老人の口からこぼれでる。

「なら王家より命が下るより早く、ことを起こし、すべてを終わらせる」

「旦那様……」

「準備は任せる。行け」

「……は」

苦渋に顔を歪め退室しようとした老人に、ドーランは声をかけた。
「すまん。おまえには苦勞をかける」

「いえ、そのような勿体なき……」

振り返った老人の瞳は、やや潤んでいるように見えた。

再び一人になったドーランは、緩慢な動作で椅子から腰を浮かせた。
窓に近づき、眼下の街を見下ろす。

夜遅いこともあってほとんどの家は寝静まっているが、酒場などが集まる一画は、まだ明かりが灯っていた。

少し前までは、その光景を見るたびに誇らしさを覚えたものだが、今はもう何も感じない。

——いつからこうなったのか。

代々この地を統治する領主の家系に生まれ、生まれついで恵まれてはいるが、自由のきかない身分として育てられてきた。

疎ましいと思ったことはある。だが、それでも投げ出そうとはしなかった。

果たすべき責任があり、統べるべき領地があり、守るべき領民たちがいる。

それらを自覚すれば、重圧を感じる以上に張り合いが体をつき動かした。

元々が国境沿いにある“辺境領”だ。ドーランの代にこそ戦はなかったが、領地の運営は決して安穩なばかりではなかった。

それでもドーランは私欲を押し殺し、領主としての責務を忠実に果たそうとした。

妻を早くに亡くした後、後添えもとらずに治世に没頭し、幼くして母親を失った息子にも厳格な教育を施した。

妻の忘れ形見であり、ただ一人の息子をドーランは深く愛していた。だからといって露骨に愛情は示さず、むしろ厳しく接した。そうしたほうが息子の将来につながると信じていたから。

——そう、信じていた。信じていたのだ。

ほんの数年前までは、繰り返される日々が変わりなく続き、やがては領主の地位を息子に譲って静かな余生を過ごし、果てには息子や彼が築いた家族に見送られてこの世を静かに去ると。

なぜこんなことになったのか——

「オルセル……」

街を見下ろしながらドーランは呟いた。その目に夜景を映しながらも、彼の意識は数年前に亡くなった息子の死について占められていた。

何の予兆もなかった。

鹿狩りの最中に襲撃を受けたという息子の死体は、背に矢を受け、胸には大きな切り傷があった。

その無惨な死体を見た時——嘆こうとする心を押し殺し、傍目から見れば冷酷ともとれる態度を貫いたのは、領主として染み込んだ心構えからだった。

いつこうに見つからない犯人探しを諦めたのも、同じ理由である。ただでさえ息子につけていた兵たちもことごとく皆殺しにされていた。いつまでも残った兵たちを、手がかりも見つからないような事件の人手に割くわけにはいかない。

自分には領主としてやるべきことがあり、彼らにも領土の治安を守るという役目がある。

それから数年——ドーランは領主としての責務を全うしてきた。望むべき未来がもう失われているにもかかわらず、以前となんら変わらない日々を過ごしてきた。

心をすり減らせ、感情が鈍化させながら。

やりがいもなく、ただやっている——そうした日々が続く中、まれにある夢を見るときだけ感情がよみがえる。

それらは、息子の最後を思い出させるような悪夢であり、よみが

える感情は絶望と呼べるものだった。

悪夢を見るたびに、ドーランの眉間のしわは深くなっていた。

それを初めて見たのも、悪夢を見たある日の夜のことである。

悪夢の続きか現実かは今でもわからない。

いつものようにドーランが悪夢にうなされて目覚めを迎えたある日――死んだはずの息子が部屋の隅に立っていた。

驚いたが、すぐに夢だと思った。

うつむかせた顔、血に汚れた体、生気の失せたその存在を前に、ドーランは思わず問いかけた。

「なぜ……なぜおまえは死んだのだ。オルセル」

問いかけに応じず、その日の悪夢は終わった。気がつけば朝で、差し込む光が瞼まぶたの上からでも眩しく感じられた。目を開き、やはり夢かとドーランはため息をついた。

しかしそれは翌日も続いた。

同じように現れた息子を前に、ドーランは不審気に問いかけた。

「オルセル……本当におまえなのか？ 顔を見せてくれ」

部屋の隅にいたそれが、顔を上げた。

ドーランは息を呑んだ。濁った瞳。青白い顔。それでも間違いないそれはドーランの愛した息子だった。

その日の悪夢はそれで終わった。

さらに翌日。

さすがに三度目となるともう驚かない。その日、オルセルは最初から顔を上げていた。

「オルセル……なぜおまえは……」

現れる理由を問おうとして、ドーランはくわつと目を見開いた。

「まさか……何か伝えたいことがあるのか」

オルセルがかすかに頷いた気がした。ドーランは身を乗り出そうしたが、すぐに動けないことに気づいた。もどかしげに口を開く。

「何だ？ 何が――」

問いかけ、ドーランは気づいた。何者かに殺された息子が言いたいことなど、決まっているではないか。

誰に殺されたのか――

そのことにドーランが思い至った瞬間、オルセルの口元がかすかに歪んだ。

目を伏せていたドーランはそれには気づかない。彼が顔を上げたときには、すでにオルセルの表情は死者のそれへと戻っていた。

「おまえは誰に……誰に殺されたのだ？」

ドーランの意を決しての問いかけに、オルセルの半開きの唇が動いた。

その隙間からこぼれた声にドーランは耳を疑った。問いただす暇もなく、その日の夢はそれで終わった。

翌朝――朝食を食べず、ドーランは一人考え込んだ。

息子の言葉が、耳について離れない。

『フェルカの民――』

確かに最後、彼はそう言っていた。

思い当たる節はある。

息子はクリアス大森林のそばで殺された。

あの森に住まう者など、誰もいない――そうなっているが、そうでないことをドーランは知っている。

（なぜ……その可能性を疑わなかった）

一度芽生えた疑心は、すぐに大きくなっていった。

息子を失う前のドーランなら、証拠もなく、ただの夢や幻で犯人を断定することなどありえなかった。だがそのことを自覚させる者は、不幸にも今のドーランのそばにはいなかった。

それ夜以来、オルセルが姿を現したことはないが、息子の最後を思い出す悪夢はなおも続いた。

不思議なことに、悪夢の中の時間は少しずつさかのぼっていった。死体になって館に運びこまれたオルセル。

発見された、野ざらしの死体。

地面に伏せ、誰にも看取られず息を引き取る息子。

最後の瞬間——絶望をその目に宿して、斬撃を身に受けるオルセル。

その瞳に、それをした者の姿が映っていた。剣を振りおろしたのは、特徴的な褐色の肌の——

夢から跳ね起きたドーランの心は混乱し、やがては憎しみがすべてを塗りつぶしていった。

領主としての自覚も、忠臣への感謝の思いも。もう二度と目を開かない息子を見たときのあの感情に上書きされていく。

フェルカの民とは、先祖代々の盟約を結んでいた。領主の地位を受け継いだ際に聞かされた話だ。

彼らと協力し領地の安寧に努めてきたことも、彼らの活躍で危うく窮地きゅうちを脱したことも聞いている。

知った上で思う。

——知ったことが……！

もう話すことのない息子の姿がドーランの脳裏には深く刻まれていた。

それと比べれば、過去の功績などなんだというのか。それらがあから奥尔セルを殺した罪を帳消しにしろというのか。

許せるものか——

プツリ、と口の中に血の味が広がっていく。噛みきられた唇から、一筋の血が顎を伝った。

「ク、クク……」

血の味に自分がこれから起こす惨劇を連想して、自然と笑みがこみ上げてくる。

壮絶な笑みを浮かべたドーランの表情は、理知的な為政者として

一つの街を発展させてきた男のそれとはかけ離れたものになっていた。

——彼は知らない。

彼が見た幻も、悪夢も、すべてが見せられたものであるというところを。

自身の絶望も憎しみも、すべては仕組まれたものであるということも。

彼は知っている。

自分が——少しずつ、狂い始めていることを。知りつつも、ドラン・クリサウスは甘美な狂気の衝動に身を浸していった。

15・戦士の追憶

大地はぬかるみ、泥のようになっていた。

降りしきる雨が血と戦塵を洗い流し、地面に黒と紅の斑模様を描いている。

その上に、おびただしい数の死体があった。それらはほんの少し前まで酒を飲み交わしていた、戦場で信頼を築いた戦友たちだった。腕の中には愛した女の肢体があった。

雨に打たれ、その体は少しずつ冷たく、硬くなっていく。だらりと垂れた腕はもう二度と動かず、閉じられた瞼もこれから先開くことはない。

それが何を意味するのか——わかつてはいても、認めたくはない。認めた瞬間、きっと心が千々に砕け散ってしまう。そんな予感がした。

すべてが幻のようだった。

体を濡らす雨も、それが地面に跳ね返って生じる音も、本来ならば指一本動かすこともできないような苦痛も——すべてがどこか遠い世界の出来事のように曖昧としていた。

その日——

彼はかけがえのないものを失った。

「ここにいたか」

雲一つない晴天が広がっていた。

とはいえ、奥深い森の中では、陽光の恵みを得られる場所は限られる。必然、ジドがその少年と再会したのは以前にも顔を合わせた場所だった。

「……あんたか」

燃えるように赤い髪は、陽光の下ではことさらによく目立つ。ギルダスと名乗った少年はゆっくりと首を巡らせた。

「すまん。寝ていたか？」

「横になってただけだ。……で、何か用か」

たいして気にしたふうもなく体を起こし、立てた膝に腕を乗せる。緊張など欠片も感じられない態度である。だが、その目はジドを観察するように細められていた。

警戒されているのを察して、ジドは少し離れた位置で立ち止まった。

「連れの少女の具合はどうだ？　かなり回復したと聞いたが……」

「ああ、自力で起きあがれるようにはなった。まだ自分で歩くのはキツそうだけだな」

「そうか。それはよかった」

本心からの言葉に、ギルダスは怪訝そうに眉を寄せた。わざわざそんなことを言いにきたのか——そう言いたげな態度である。もちろん、それだけを言いにきたわけではない。

「礼を言いにきた」

唐突な言葉に面食らったように、ギルダスは眉を持ち上げた。

「先日——良からぬ輩やからから集落を守ってくれたそうだな」

「……なんであんたがそれを知ってる？」

「ルキアから聞いた」

ジドがあっさりと答えると、ギルダスは警戒を和らげ、首を傾げた。

「あの女はあんたを嫌ってるって思ってたけどな」

「そうだな。私はルキアに嫌われている」

頷くと、ますます怪訝そうな面もちになる。ならなぜ話すのかと、困惑しているようだった。

「おそらく——私を焚たき付けようとしたのだろうな」

半端な答えで口を濁しながら、ジドはそのことを伝えにきたルキアのことを思い出した。怒りの中に、かすかに懇願するような表情

をしたルキアに、

——そうか。

ジドはそれだけ言って応じた。

落胆したように肩を落としたのも一瞬、次の瞬間、ルキアは罵声を浴びせて踵を返していた。

昔からルキアを知るジドにしてみれば、彼女らしい感情をむき出しにした態度といえる。

「ともかく、感謝したい。おまえたちがいなければただではすまなかつただろう」

「感謝されるいわれはねえ。あんたらの為にやったわけじゃねえかな」

うつとおしそうな口調に、ジドは思わず苦笑する。照れ隠しなどでなく、本音を口に出しているとわかるからかえっておかしかった。

つくづく、少年らしくない少年だと思う。

「ところで、前から気になってただけだよ」

「なんだ？」

惘然^{ぶぜん}としていたギルドスが、ふと思いついたような顔で疑問を口にした。

「なんであんたは集落の奴らに嫌われてるんだ？」

それは悪意のない、何気ない疑問だった。

ジドの表情から笑みが消える。

「……なぜそんなことを？」

「別に理由はねえさ。ただ気になったただけだ。あんたらは強ければ偉いんだろ。なのに他の奴らのあんたへの扱いが粗末なのは話が合わないわねエんじゃねえか？」

ジドは目を伏せ、誰にともなく呟いた。

「強き者は、弱き者を守り導かなければならない……」

「あん？」

「強き者は敬われ厚遇されるが、代わりに責務も生じるという、フェルカの民の慣わしだ。……いや、誇りある人間なら当たり前のこと

となのだらうな。私が嫌われているのは、その責務を放棄したからだ」

「あんたがか？ 無責任な奴にや見えねエがな」

「私は無責任な人間だよ。でなければ嫌われてまで責務を投げ出そうとはしないだろう？ それに、人を導くには向いていない。……私には“覚悟”がない。何かを守るために、何かに手をかけるという覚悟が」

「覚悟、ねえ」

「たとえば、集落の仲間が何者かに襲われたとしても……私はその者を返り討ちにすることはできないだろうな」

「あんただったら殺さなくても、適当にあしらうことだってできそうだがな」

「相手の腕が立ったり、複数いたりした場合はその限りではない。それに禍根を残さないためにも、相手を殺してしまった方がいいことだつてある。私にはそうしたことをする覚悟がない。そんな者が皆を導く大役を果たせるわけがない。導く者には冷酷な果断さも必要だろうし、それができないものはいつか敵を殺すのに躊躇ったあげく、守るべき者を死なせるだけだ」

“臆病者”——ルキアの罵声を思いだし、ジドは自嘲した。敵を殺すのを躊躇い、味方を失う可能性に怯え、すべてを投げ出している自分に反論する余地はない。

「信じられねエな」

いつの間にか立ち上がったギルダスが、腕を組んでまじまじとジドを見ていた。

「あんたの戦い方は実戦を知らねエ奴のものとは思えねえ。実戦を知ってる奴が人を殺してねエとも思えねえ。あんただって最初から腕が立つたわけじゃねエんだろ？」

「確かに、昔は戦場に出たこともある」

森の奥で隠れるように生活しているフェルカの民とはいえ、全員が森の中で一生を終えるわけではない。素性を隠し、森の外に出る

者も稀に^{まれ}だがいた。

「私の場合は腕試しと、経験を積むためだった。傭兵の真似事をし
て戦場を渡り歩いたよ。その時には、人を殺すのにためらいは覚え
なかった。そんなことを考えていればこちらが殺されてしまうから

――」

元より好んで人を殺すような残虐性は持ち合わせていない。だが
狂気と殺意が充満する戦場では、そんなことは関係なかった。

最初の戦場ではあらゆる感情が麻痺し、理性を失った。理性が戻
ったときには血塗れで立っている自分に気づき、生き残ったことに
まず安堵した。

「それで良心が痛んだってか？」

さも馬鹿らしいと言いたげなギルダスに、ジドは苦笑で答えた。

「それもあるが、それだけではない。色々とおったのだよ。人を殺
すのに抵抗を覚えるようになり、気づけば魂精装具^{ソレスト}も本来の色を失
っていた。元はただの深緑だったのだから」

言いながら具現化した魂精装具^{ソレスト}は、黒く染めあげられている。光
に当てたときだけ、名残^{なごり}を示すようにかすかな緑色が浮きあがった。
緑がかった黒色をした両穂の槍を、ギルダスは注視していた。眉
をしかめている。

「そんな話は聞いたことがねえな」

ぽつりと呟かれた声は、ジドの耳には届かなかった。

魂精装具^{ソレスト}をかき消したジドは、ギルダスに会いに来たもう一つの
用件を切り出した。

「ところで、頼みたいことがある」

「なんだ？ またあんたの前で剣筋でも見せろってか？」

「そうではない」

ジドは首を横に振ると、一息置いて話し始めた。

「これからおまえがどのくらいここに留まるかは知らない。だがそ
の間だけ、ほんの少しでいい。ルキアのことを気にかけてやってく
れないか」

「……あ？」

呆氣にとられた様子で、ギルダスは間の抜けた声をあげた。

冗談や気まぐれで口にしたわけではないことを訴えるように、ジドはギルダスを真摯な瞳で見つめた。

「なんだそりゃ」

眉をひそめ、ギルダスが頭を搔く。

「俺はあいつに嫌われてるんだがな」

「嫌われていた、だろう？」

ギルダスの手がぴたりと止まる。

やる気のなさそうに開かれた瞳が、ジドの意図を探るように細められた。

「なぜあの娘があそこまで領主に憎悪を抱いているか、知っているか？」

「……さあな」

「もう一つあった集落が奇襲を受けたの時、ルキアは血を分けた姉を失っている」

ギルダスの眉が一瞬跳ね上がった。

「あの娘の姉は戦士としての道を選ばなかった。心根の優しい娘だったのだな。とても戦いに向いているような性格ではなかった」

「あいつとは正反對ってわけか」

「そうだな」

つい笑みをこぼしたジドの表情は、すぐに曇った。

「姉が殺されてから、ルキアの心は常に憎しみにとらわれている」

「身内を殺されたんなら、大抵の奴はそうなるだろうよ」

「そうだな。だがルキアの場合は……憎しみが先走りすぎる。元々激しいところはあるが、いきなり何の因縁もない相手に矢を向けるような娘ではない」

初めて会ったときのことを思い出したのか、ギルダスは途端に嫌な顔をした。ジドもルキアの心情を考えて、沈痛な表情になる。

「強すぎる憎しみは時に身を滅ぼす。それをいさめようにも、集落

の者たちもほとんどが近い者を殺されている。彼女の憎しみに同調はしても、いさめようとまではしないだろうな」

「それを俺にやれってか？」

「そこまでは言わん。ただ、もしルキアが暴走しそうになったときにそばにいたら、あの娘を止めてやってほしい」

元々フェルカの民は同族意識が強い。その中でも、ジドは特にルキアを気にかけていた。

腕の立つジドを、幼いルキアが慕ってくれていたこともある。だがそれ以上に、ルキアには過去の自分と重なるところがあるのだ。だからこそ、若くして死んでほしくないと思う。

ギルダスの返事は、

「関係ねえな」

素っ気ないと言えるほどあっさりしたものだっただ。

「俺はあんたらの仲間じゃねえんだ。あの女が誰を憎んでようが、それで死のうが知ったことじゃねえ。そういうことはあんたらがやれ。それが筋だろうが」

「私にその資格は——」

「あんたの事情なんざ知らねえよ」

目つきを尖らせながら、ギルダスは鼻をならした。

二人の視線が交錯する。苛立ちがこめられたギルダスの瞳を、ジドはその真意を探るように見つめた。

「……そうだな」

息が詰まるような沈黙の後、ジドは怒りもせず深々と息を吐いた。投げかけられた言葉の一つ一つが、胸の深いところに刺さっている。

責務を放棄したとは言え、仲間を見捨てるような真似まではしたくない。

そう思っただけだが、いくら他人に委ねようとその時点でそれは見捨てたも同然なのだ。自覚していたことを改めて突きつけられた気がして、ジドは自分の卑怯さを思い知らされた。

「その通りだ」

自然に笑みがこぼれる。自嘲ではなく、抑えきれない苦笑だった。罵声に近い言葉を浴びせられたというのに、なぜか晴れ晴れしい気分になっている。

「そんな当たり前のことを教えられるとはな」

「だいたいあんたらは俺を買いすぎだ。会ったばかりの奴に親切にするほど俺ア親切な人間じゃねえぜ」

ギルダスの言いように、ジドは意外そうに目をしばたかせた。

「……なんだ？」

「いや——なんでもない」

（そうでもないだろう）

内心では違うことを思いながら、ジドは赤髪の少年を見下ろした。本当にどうでもいいことなら、断って終わりのはずである。その後の部分は余計だ。

芯の部分で人がいいのか、それとも言うまでもなくルキアのことを気にしてくれていたのか——いずれにしても、この少年は自分で言うような人間ではないように思う。

——ふと、ギルダスが脇を向いた。眉根をよせて、空を見上げる。

「なんだ……？」

「どうかしたか？」

「いや……何だか焦げ臭くねえか？」

16・切迫

「兵たちの準備は整いました」

老境に入ってもう数年経つドーラン辺境領の忠臣が、椅子に腰掛けた主に駆け寄って声をかけた。

彼らがいるのは、住居である領主の館ではない。夜明けとともに設営されたばかりの、陣の中だった。

陣の内と外には、完全武装の兵士たちが行き来している。どの顔も緊張で張りつめていた。

比べて緊張を感じさせない表情のドーランは軽く頷き、口を開いた。その目は街道とは反対側、森の奥に向けられたままである。

「何人だ？」

「は？ …… およそ五百人ですが」

自領が抱えている兵士の数を、主が知らないわけがない。訝しく思いながらも、老人は忠実に答えた。

「そうではない」

「……と言いますと？」

「躊躇いを持たずに戦えるのは、五百のうちどのくらいいる？」

十年以上、戦のなかった辺境領である。

他国が攻め入ったわけでもなく、はっきりとした目的を告げられただけでもない。ほとんどが戦の経験のない兵たちの間では、困惑するような雰囲気広がっていた。

「は……百五十人ほどかと」

百五十のうちのほとんどは、前回の“奇襲”に参加した兵たちである。

「そうか」

そう答えたドーランの声には、何の感慨もない。そんなものだろう、と納得したようにも思えた。

「ではこう伝えよ。クリアス大森林に、他領で暴虐を働いた賊ども

が潜伏している。我らが討つのは、この非道な賊どもである——そのようにな」

嘘をついてでも、兵たちに戦意をもってもらうのが大事と考えたらしい。かしこまりました、老人は恭しく頭を下げる。

「しかしよろしいのですか？」

「何がだ？」

「この策のことです」

伐採はっさいされたばかりの木の爆はぜる音が、すぐ近くで聞こえる。

頭上を見上げれば、大量の煙が木々の上まで立ち上っていた。

フェルカの民と決着をつけるにあたつて、彼らには大きな問題があつた。

集落の場所はわからないのだ。それがわからないようでは、攻め入ることなどできない。

攻め入ることが不可能の中、煙で燻いぶし出すというのはドーランの発案だつた。

とはいえ、広大な森の中、その隅で煙を出しても集落にまで届くはずもない。フェルカの民の敵意と危機感をあおるのが目的だつた。森を焼かれるのではないか——そうした思いを利用して誘い出そうというのだ。

この時のために、老人は森に詳しい獵師や木こりを招き寄せている。

とはいえ——

「これだけ大量の煙、風向きが少しでも変われば私たちも巻き込まれます。街道にまで及ぶかもしれません。それに、下手をすれば本当に火が——」

「よいではないか」

「は？」

「このような森、なくなつたからとて困る者はおるまい。いつそそちらのほうが助かるのではないか」

「……本気で仰っているのですか」

先代の頃より仕えている忠臣の老人は、思わず主の正気を疑った。クリアス大森林は、ただの森ではない。隣国との戦を抑えるための緩衝地帯として長年役立ってきたし、木材や獣肉など、森林から生活の糧を得る民もいる。

辺境領には欠かせない存在なのだ。それをあつさり切り捨てるような言葉を、目の前の主が口にするのは信じられなかった。

主の口元がつり上がる。浮かべたのは、どこかいびつな笑みだった。

返事を聞かずとも、それが答えとなった。

「……かしこまりました」

老人は姿勢を正すと、主と同じように森の奥へと視線を向けた。たとえ主が間違っていたとしても、覚悟を決めなければならぬ。どのみち、事態はすでに収まりのつかないところまで進んでいるのだから。

はるか遠方で立ち上る黒煙——それを枝葉の隙間から目にしながら、ギルダスは走り続けていた。

一人ではない。すぐ横を、ジドが併走へいそうしている。

「クソがつ……」

あの煙が何を意味しているのか——漠然ばくぜんとだが、ギルダスにはその答えが読めた。

焦燥感のままに吐き出した罵り声に、ジドがちらりと視線をよこす。

やがて木々の合間に隠れるように建つ家の割合が増えていき、彼らは集落の中心部にたどり着いた。初めて集落を訪れた時、ギルダスたちが連れてこられた場所である。

すでにその場は、喧騒に包まれていた。

多くの住人たちが集まり、落ち着かなそうにしている。

「ちっ……やべエな」

舌打ちをすると、ギルダスは首を巡らせた。
すべてが褐色の肌の住民たちの中、一人だけ白い肌の持ち主はす
ぐに見つかった。

「落ち着いてください！ 火が放たれたわけではありません！」

喧騒の中でも聞こえるようにだろう。リゼッタは珍しく声を張り
上げていた。

すぐ傍まで駆け寄り、声をかける。

「リゼッタ」

「ギル……」

「こいつが狙いか」

「おそらくは」

リゼッタは苦い声で答えた。

予感が正しかったことを知り、ギルダスは唸り声をあげて、周り
にいるフェルカの民を見渡した。どの目も不安に揺れ、余裕がない。
「あの煙はいつたい、なんのつもりじゃ！」

「炭焼きにしては煙の量が多すぎる！ 何かの合図ではなからうな
！？」

「まさか、森を焼くつもりじゃ……」

「馬鹿な！ そんなことをして誰が得をする！」

一人の男の発言に、住人たちが気色ばむ。不安そうに黒煙を見上
げる者、目つきを鋭くさせる者。誰もが平静を失っていた。

「あいつだ……」

「なに？」

「あいつが、あの男が、森ごと俺たちを根絶やしにしよう……」
「そんな……」

その場がしんと静まり返る。

彼らの顔は、一様に沈痛な色に染まっていた。

ほんの少し前に、同胞がどういった目にあっただか——それを彼ら
は嫌というほど知っている。

そして、それをしたのが、誰かということも。

「ふざけるな……！」

沈痛な表情が、憎悪のそれへと変わっていく。

「領主は我々からこの森まで奪うつもりか！」

「待ってください」

怒りが再燃しかけたその直前——冷徹な声が、彼らの激情に冷水を浴びせた。

険しい視線が、リゼッタに集まる。

「森は焼かれてはいません」

「なんだと……？」

「あれは一ヶ所で火を焚^たいているだけです。その証拠に煙が広がっていません」

にわかにざわめきが広がった。

確かに……いや、だが……——そんな戸惑いの声が、周囲から漏れ聞こえる。

「なんでそんな……それに何の意味がある？」

「それは——」

リゼッタが話そうとしたその時、周囲が静まり返った。視線が一斉にある方向を向く。

姿を現したのは、皺深い顔をした老人だった。

「長……」

集落の長老であるその老人は眼光鋭く視線を巡らし、

「間に合わなかったようだな」

リゼッタに冷めた眼差しを向けた。聖封教会の手回しよりも、領主が痺れを切らすのが早かった——そう言いたいらしい。

リゼッタは首を横に振り、確信を込めた声で言った。

「あれは“誘い”です」

「誘いだと？」

「あれをしている者たちは、ここまで来れる方法がありません。場所がわかりませんから。だからああして煙を出し、集落の住民たち

をおびき寄せようとしているのです」

ギルダスも同意を示すように頷く。

『血霧の猟兵』とは異なり、領主たちはこの地に住まう者だ。いくらなんでも、森に火を放つなどという乱暴な手段をとるとは思えなかった。下手をすれば、全焼しかねないのだ。

長は思案するように眉を寄せると、やがて深々と頷いた。

「そうかもしれない」

「誘いに乗らず、彼らが諦めるのを待つのが最善です」

「……確かにおまえの言うとおりかもしれん。だが、今はそうでも、本当に火を放たないという確証もあるまい」

「それは……」

リゼツタは言葉を詰まらせる。リゼツタもギルダスも、領主がどんな人物を知らない。だから策が失敗した場合、どんな手を打ってくるのかまでは予測できなかった。

「むしろ僕は、今が最後の猶予と考える」

長はリゼツタに背を向けた。もう話すことはない——その態度がそう語っていた。

「事ここに至って、もはや悠長なことは言っておられまい」

「待ってください——」

「長、それでは……！」

「うむ」

勢い込んだ一人の男に、長は頷いてみせる。

「この地は我らにとつて最後の拠り辺。失われることはなんとしても避けなければならん——戦士たちよ！」

長は胸を張り、周囲にいるフェルカの民に高々と宣告した。

「今こそ我らの遺恨を晴らす時ぞ！ 今度の騒乱の首謀者の首、おのが刃をもつて刈りとれい！」

『オオッ！！』

怒りと戦意の籠められた喚声がそれに応じる。

さっきまでの不安は影を潜め、今は誰の目にも戦いにいく覚悟が

宿っていた。

もう、止められそうにない。

リゼッタが唇を噛んだ。ギルダスは忌々しそうに舌打ちをする。戦端が開かれれば、今までやってきたことがすべて無駄に終わる。無力感と苛立ちが、二人の表情を険しくさせていた。

その二人にかけられた声は、場にそぐわない落ち着いたものだった。

「——待つ以外に、方法はあるか？」

ギルダスが振り返ると、ジドがすぐそばに立っていた。ただ一人冷静さを失っていないらしく、その物腰はいつにも増して静かだ。

リゼッタが少し考えてから、力なく首を振った。

「ここまでできたら、刃を交えずにことを終わらせるのは不可能でしょう」

「……そうか」

落胆したようにジドが目を伏せる。

「ですが、戦禍を最小限にすることは可能です」

「どうということだ？」

「あれをしているのは、間違いなくドーランの手の者でしょう。もしあの煙がこの住人たちをおびき寄せるためのものなら、すぐ近くで兵たちが待ちかまえているはずです」

ジドは黙って話に耳を傾けている。ギルダスは嫌な予感を覚えて身じろぎした。

「もしかしたら、ドーランがそこにいるかもしれない。いなくとも、指揮をとっている者はいるはずです。その人物を捕らえ、人質にすればあるいは——」

「森の外に追い払うこともできるかもしれない、そういうことか」
リゼッタが頷く。

ジドは難しい顔になって腕を組んだ。

仮定の上に仮定を積み重ねた話だ。割がいいとは、とてもではないが言えない。

「それは……おまえたち以外にはできんだろうな」

「だろうな」

すでに話の行く先が読めていたギルダスが、うんざりしたように答えた。

フェルカの民は、皆殺気立っている。殺さずに捕らえるなどと悠長なことができるとは思えない。

「……やるしかないのだろうな」

沈黙の後、ジドが呟く。次に顔を上げたときには、そこにはある種の決意が宿っていた。

「ここは私が抑えよう」

「あん？」

間の抜けた声をあげるギルダスとリゼッタに、ジドは背を向けた。戦意をたぎらせた同胞を見て、どこか満足そうな顔をしている長に話しかける。

「長よ」

途端にその表情が歪んだ。

「ジドか。なんの用だ」

その声には嘲るような響きがあった。それを気にしたふうもなく、ジドは長を見据えた。

「俺は反対する」

「……今なんと言った？」

「避けれるかもしれない争いだ。それで同胞が死ぬのは、俺には承知できない」

「貴様……」

長が殺意すらこもった目で、ジドを睨みつける。

長だけではない。話を聞いていた誰もが、怒りの視線をジドに向けていた。

刺々しい視線を浴びても、ジドは動じなかった。その態度に、逆に殺気を向けていた方が萎縮していく。

「森を焼かれてもいいと言うのか」

「そうは言わん。だが、少しでいい。待つてほしい」

「待つてどうする？ 奴らが諦めるのをただ待つつもりか？」

「いや、そうではない。彼らに――」

言いながらギルダスたちを指し示す。

「策がある。その成否がはっきりしてからでも、動くのは遅くないと思う」

長がぐわつと目を見開いた。その唇がわなわなと震え、今にも怒声を吐き出すように見えた瞬間、

「俺も動く」

ジドがそう告げた。

長の表情が、啞然としたものになる。

やがて忌々しそうにジドとギルダスたちを交互に見ると、怒りを吐き出すように重々しい声で告げた。

「太陽が天頂に昇るまでを刻限とする」

「では――」

「火が放たれたらもう待たぬぞ」

「無論だ。礼を言う」

「いらん。それより、為すべき事を為せ」

ジドがはっきりと頷く。

振り向き、ギルダスたちに向き直った。

その目が、信じると語っていた。

17・強襲(1)

「さて――」

長との話が終わったあと、ギルダスとリゼッタ、ジドの三人は喧噪から離れた場所で顔をつき合わせていた。

場所を移動したのは、このあとどう動くかを決めるためだ。刺々しい視線にさらされては、落ち着いて話もできない。

「焦って動き始めてもいい結果は得られませんが……あまり時間の余裕もなさそうですね」

リゼッタが言いながら額に手をかざしながら空を見上げる。

与えられた猶予は、太陽が天頂に昇るまで。夜明け間もないとは言え、余裕はそうあまりない。

「あの煙のところまで、だいたいどのぐらいかかるかわかりますか？」

「さほど遠くはない。歩いていつでも時間内にはたどり着くだろう――それまでに何もなければの話だが」

その可能性がないことを確信した口調でジドが言う。

リゼッタの推測通り、あの煙がフェルカの民をおびき寄せるためのものなら、襲撃にそなえ警戒している兵士がその周りにはいるはずである。

そうした連中をやり過ぎしながら進めば、普通に行くよりもだいぶ時間はかかるだろう。

ギルダスがふと思いついた疑問を口にした。

「ところで、あの爺さんは信用できるのか？ 時間が来るまでに動き出されでもしたら、下手すりゃ俺たちが囲まれることになるぞ」

「長は一度口にしたことは曲げない。それに影響力もある。長の考えに逆らって飛び出そうとする者はいないだろうな」

後ろのことは気にしなくていい、ということらしい。

「なら気にするのはあっち側だけってことだな」

煙の立つ方向を睨みすえる。立ち昇る煙の量は相変わらず多いが、広がる様子はない——今のところは。

「向こうの状況がわかれば、少しはやりやすくなるんだがな」

半ばぼやきに近い口調で、ギルダスが呟き——背中中に手を伸ばした。

ガサ——

同時にジドも動き出す。具現化した魂精装具ソレスタを構え、音のしたほうに突きつける。少し遅れて、ギルダスが取り出した短剣を投げる体勢に入る。

「……あア？」

音の元を見たギルダスの表情が、呆けたものになる。視界に入ったのは、木の幹に手について息を荒げる密偵の男だった。

ついギルダスは、思いついた疑問を口にする。

「もしかしておまえ、出てくるタイミング、計ってたのか？」

「ふざけたことを……」

忌々しそうに吐き捨て、密偵は額の汗をぬぐった。よほど急いできたのだろう。息を整えて、リゼッタへ向き直る。

「マルフィン司祭、重要なお話があります」

「あの煙に関係したことですか？」

「は、ドーランが——この森にいます」

リゼッタが目を細める。ギルダスが唇を歪めた。ジドが口元をかくすかに引き結ぶ。

「あの煙の近くにですね？」

煙の意図をリゼッタが察していることには気づいたらしい。リゼッタの問いかけに密偵の男が頷くと、すぐそばに近づいた。ギルダスとジドを一瞥しいちべつ、リゼッタの耳元で何かを話し始める。

あからさまな除け者扱いだが、今さら腹も立たない。

話が終わるまでの間、手持ち無沙汰になったギルダスはそばに立

つジドを見上げた。こんな事態だというのに、この壮年の男は苛立つ様子も見せずに腕を組んで立っている。

「あんたが手伝ってくれるってんなら助かるけどよ、どういふ風の吹き回しだ？」

泰然たいぜんと構えるジドに、ギルダスは気になっていたことを訊いた。

「意外なことでもないだろう」

ゆったりとした動作で首を動かし、ギルダスを見る。何気ない動作だが、そこには明確な意志が宿っているように思えた。

「元はといえば私たちの問題だ。任せきりというわけにもいくまい。それに――」

ジドが不意に表情を緩める。

「覚悟がないならなにに、やるべきことにはやっておきたいと思つてな」

「……ま、なんでもいいけどな」

ギルダスは曖昧あいまいに頷く。

ジドの心境の変化に興味はないが、その腕前は身をもって知っている。さらにはこの森のことにも詳しいだろうから、手伝ってくれるというのを拒む理由はなかった。

「――それでは」

話は終わつたらしい。リゼッタから離れた密偵は、伝えるべきことは伝えた、といわんばかりに背中を向ける。その後ろ姿をつまらなそうに見てから、ギルダスはリゼッタに問いかけた。

「で、なんだつて？」

リゼッタが振り返る。その顔にはかすかに緊張が浮いているように見えた。

「ドーランは本陣を構え、襲撃に備えているようです。周りには兵士たちが警護についており、それ以外にもかなりの数の兵士たちが、本陣を中心に配置されているようです」

襲撃を察知して、警報を鳴らす役割なのでしょうとリゼッタが付け足す。自然のままの森の中で、突発的な事態を避けるためだとい

うことは想像がついた。

「何人ぐらいだ？」

「すべてを把握できたわけではないのですが……ただ、ここに来る前に様子を見に行った兵舎に、人氣がなかったそうです」

つまりは総動員、ということらしい。ギルダスは首を傾げた。

「ようするに……何人だ？」

「ドーランの抱えている兵士の数は七百ほどです。ですが、街道や町の警備についている兵を除けば、自由に動かせるのはおよそ五百ほどだそうです。おそらく、そのほとんどが……」

言葉尻を濁し、リゼツタは黙り込んだ。

「五百……」

ギルダスの顔つきが険しいものへと変わる。

比べてこちらは三人。まともにぶつかっていったのでは勝ち目はないどころか、相手にもならない。

「そう思い詰めることもないだろう」

平然とそう言ったのはジドだった。話を聞いていたはずだが、動揺した様子はない。

「五百人いるとしても、そのすべてを相手にしなければならいわけではない。標的にはたった一人だ。そう思えば十分可能だと思わないか」

「……ま、そりゃそうだが」

密偵の消えた方向を見て、ギルダスはリゼツタにぼやいた。

「いつそのこと、あいつにも手伝わせたほうがよかったんじゃないか？」

「基本的に彼の役目は、情報の収集と伝達だけです」

リゼツタの表情が、あえて取り繕ったような無表情に変わる。

「それに彼と一緒に来てもらった場合、私たちに失敗した時に何が起こったのか報告する人がいなくなります」

さらつと不吉なことを言うリゼツタをギルダスは嫌そうに見て、やがて諦めたように深々と息を吐いた。

「……ま、いい。半端なのがいっても邪魔になるだけだろうからな」
これからやることは、最終的には奇襲だ。その時戦えない者がいても邪魔になるだけだ。そう割り切り、一步踏み出した。

「じゃ、行くか」

あえて気楽に言う。隠れる場所ならいくらでもある森の中だ。あの程度までだったら、気づかれずに近づくことは十分可能はずである。

あとは運次第――

そう勢い込んだところで、水を差された。

「気になることが一つある」

思わずよろめきかけ、ギルダスは強ばった顔で振り返る。

「なんだよ……」

「気づいているかもしれんが、あの場にルキアがいなかった」

「……なに？」

記憶を掘り返し、ギルダスは舌打ちした。その中に、ルキアの姿はない。それにルキアがもしあそこにいたとすれば、口出ししないはずがなかった。

「まさか、あいつ……」

ギルダスの脳裏に、ある可能性が浮かぶ。

こんな状況で、ルキアの行く先に思いつくのは一つしかない。

「あのクソ女……!」

煙を見上げる。すぐそばで、ジドが重々しく告げた。

「急ごう」

煙を見たときには、すでに体は動きだしていた。

煙が上がる方角がドールン辺境領側だとか、その範囲が広がる様子がないということに気づいたのは、走り出した後だった。

体をつき動かしたのは直感で、それは本来ならこの森にいるはず

のない兵士たちの姿を見つけた時点で確信に変わっていた。

視界の一端、枝と葉の隙間に、二人組の兵士たちが立っている。

背中を合わせ、落ち着かない様子で辺りに目を配っていた。

彼らの目をかいくぐり、ルキアは小走りに駆け抜ける。人の手が入っていない森の中、ほんのわずかな音も立てない。

まるで気づいたふうもない兵士たちを冷めた眼差しで一瞥いちへつしたあと、ルキアはその場を足早に離れた。

生活のため、ルキアはふだん弓矢を手あてに狩りをしている。森の獣たちに比べれば、人間の目を欺くのははるかに容易だった。それだけでなく、この森は庭のようなものである。

むしろ、こみあげる殺意を抑えるほうが難しかった。

一度などは弓を引き絞り、矢を射る直前までいった。

それをしなかったのは、噛みきった唇から流れる血の味で我に返ったからだ。

頭にこびりつくような殺意を、無理やり振り払った。

二本目の矢があると決めてかかれば、一本目の狙いもおろそかになる。いつか仇を討つ機会がきても、仕掛けるのはただの一度——そう決めていた。

そのただ一度の機会を、雑魚に費やそうとは思わない。

身を潜め、息づかいも抑え、存在そのものがないように装いながら森を進む。

いつもに比べて、鳥や獣の鳴き声が少ない。見かけることもあまりなかった。

おそらく彼らは、本能的にこれから何か起こることがわかっているのだろう。

人に比べれば、動物ははるかに鋭敏だ。

その動物さながらに、ルキアは感覚をとぎすましていた。

周囲に意識を張り巡らせ、黙々と体を動かす。ルキアにとっては慣れた作業であり、頭を使わずとも十分こなせる。緊張もしなかった。

兵士を見かけるときに煮えたちそうになる感情を誤魔化すため、自然と頭は別のことを考えていた。

（シサラ——）

争いに縁がない穏やかな姉だった。

それでいて誰にも軽んじられることなく、誰からも愛された。

ルキアもそうだ。腕力では負けないこの姉に、ルキアはなぜか頭が上がらなかった。

ルキアが十五になった年のこと——

成長し、自分が女であることも疎ましくなったころのことだ。同時にルキアに戦士としての才能が芽生えはじめ、つまらない嫉妬しつとや皮肉をぶつけられた時も、姉は自分の味方だった。

『——つまらん』

『何が？』

『なんであいつらは女ってだけであたしを見下す？ 腹が立つ。殴りたくなってくる』

『あら、だめよ。そんなことしちゃ』

『だって……』

唇をとがらせるルキアに、

『いいじゃない、見下されたって』

シサラはそう言って微笑んでみせた。

『そんなこと気にする必要はないわ。ルキアには才能があるんだから。そのうち誰も何も言えなくなるわよ』

『そう……かな？』

『きっとそう。だからルキアには、そんなことにこだわらないでいてほしいなあって、姉さん思っわ』

『……わかった。シサラがそう言うなら、我慢する』

『うん、ありがとう——』

ささくれた心に、シサラの笑みはそつと染み渡った。

その後で、

『おしとやかになれとは言わないけど、あまり乱暴に振る舞うのも』

姉さんどうかなって思うんだ。いい人ができた時のために、少しは女の子らしい喋り方も覚えておいたほうがいいかもね』

そう言っていたはずっぽく笑ったのには閉口したが、いつでも穏やかに笑っていられる姉だった。

直情的な自分にはない、ある種の強さを持つ姉に、ルキアは憧れを抱いていた。

その姉も、すでもうない。

なぶりものにされ、少しずつ殺されたかのような姉の顔は、今までに見たことのない苦しみで満ちていた。

姉が死の淵にいる時に、ルキアは何も知らず、何もできなかった。まんまと誘き出され、異常に気づいて仲間たちと集落に戻った時にはすべてが終わっていた。

燃え上がる赤と、地面に染み込んだ紅。炎が踊り、少し前まで生きていた知り合いはみな物言わない存在になり果てていた。

人と木の燃える臭い、流れ尽くした血の臭い――

あの時の光景が、蘇る。一度だって忘れたことはなく、頭の裏側にこびりついたようにそれはあった。

カチリ、と音を立てて、ルキアの頭の中が切り替わる。昂たかぶった怒りと憎しみが、混じり気のない殺意へと昇華されていく。あれほど表情豊かだったルキアの顔が、別人のように何も無いものへと変わっていく。

狩りのさなか、獲物めがけて矢を解き放つ、その瞬間、その時の境地にルキアはいた。

（殺す――）

標的とするべき相手の顔だけ思い浮かべ、ルキアはただ一人森の中を駆け抜ける。

ルキアは今まで、一回も人を殺したことがない。それでも、標的に矢を放つ瞬間、自分がためらわないことを彼女は確信していた。

18・強襲(2)

——ドサ。

緑深い森の中で、警笛を持った兵士が力なく崩れ落ちた。首に赤く線が走っていたが、血は出ていない。気を失っているだけだ。

「チツ……だいぶ見張りの数が増えてきたな」

ギルダスが曲剣を肩にかついで呟く。

「それだけ近づいてきているということだろう」

そう言った壮年の戦士——ジドの足下には、もう一人の兵士が倒れていた。

すでに二人が気絶させた兵士の数は、優に十を越えていた。

集落を出てから約二時間——

三人と少人数だったのがよかつたらしく、移動を始めてしばらくは順調だった。

見張りと思しき兵士には気付かれず、たまにこちらから見かけても、ジドの先導で見つからずにやり過ごすことができていた。

だが、そうした幸運も長続きはしない。

煙の元に近づくにつれて兵士の数も多くなり、どうしてもやり過ぎせそうにない時は、今のよう警笛を鳴らせないうちに気絶させるという手を使っている。兵士たちはたいてい二人一組で、ギルダス一人では不可能なことだった。

「のんびりしたこと言つてられねエだろうが。最初に気絶させた奴が起きちまうぞ」

気絶させた兵は縛り上げた上に口も塞いであるが、物音や唸り声まで止めさせることはできない。それを他の兵士が聞きつけば、ギルダスたちの存在が露見ろけんすることになる。

忌々しげに吐き捨てて、ギルダスは背後を覗き見た。

「こんなことなら——」

言いかけ、慌てて視線を元に戻す。

気絶させた兵士を縛りつけるギルダスたちを、リゼツタは無表情で見ていた。

リゼツタの無表情が、ほとんどの場合装ったものであることをギルダスは知っている。だが今の彼女は装っているわけではなく、素で表情がない。

リゼツタがそんな顔をするとき、彼女の機嫌は決まって悪い。

無表情ながら苛立っていると思われる態度に、ギルダスは内心で舌打ちした。

（つたく……急ぐんなら面倒な注文なんざつけるなっつてんだ）

できる限り殺さないように、とは動き始めてすぐにリゼツタが言ったことだった。

すべてが終わった後で残る禍根^{かこん}は少ない方がいいということらしいが、ギルダスはこの雇い主が人死にを極端に嫌うことも知っている。

「よし、終わった……で、あとどれくらいで着きそうだ？」

荒い手つきで兵士を縛り上げ、ジドに声をかける。

「ここまで来れば、そう急ぐこともないだろう」

「ああ？ なに寝言言っつてんだアンタ」

険しい目つきで見上げると、ジドはある一点を指さしていた。

「どうやら、到着したようだ」

遠くからでも目立つ、赤い陣幕がそこにはあった。

「コソコソできんのはここまでみてエだな」

森の中では珍しく、そこには見晴らしのいい空間が広がっていた。自然にできたわけではない。地面のそこかしこに、伐採されたばかりと思いき切り株が生えている。

中心は赤い陣幕で覆われており、当然のことながら中の様子はうかがえない。

「……あれが本陣だな。つてこたア、あの中か？」

木陰に身を潜めながら、ギルダスは耳を澄ませた。中が見えるわ

けではないが、複数の人間が動き回っているような音はする。

「で、これからどうする？」

「……行くしかないでしょう」

リゼッタが不機嫌そうに答える。とはいえ、その口調はどこなくためらいを含んでいるようだった。

「行くって言ったってなあ……」

本陣の周囲は、見える範囲だけでも何十人も兵士たちに囲まれていた。完全武装で、これから起こる戦いの予感に緊張しているようにも見える。

「あそこを力尽くで通れってか？ そりゃいくらなんでも無謀だな」
「やつてもせいぜい途中で囲まれた挙句、寄ってたかつて殺されるだけだ。」

「ですが、ただ時間が過ぎるのを待っていても状況がよくなるとは思えません」

「死ぬかもしれないって話はいいが、絶対に死ぬって話まで引き受ける気はねエゼ？」

「……私が囷になろう」

言ったのはジドだった。

にらみ合っていたギルダスとリゼッタが、そろって壮年の戦士を見上げる。

「囷なあ？」

「どういうことですか？」

「ここから少し離れたところで、わざと兵士に見つかってみる。すぐそばで警笛が鳴っているのを耳にすれば、あそこの兵士たちも少しは減るだろう。できる限りそれを引きつけるから、その間に頼む」
「……下手すりゃ死ぬぞ」

「むざむざ殺されはせんよ。それに、その役目なら兵士を殺す必要もない。それと——」

ジドの表情に、わずかに陰が差す。

「ここに来るまでの間、見つけられなかったルキアのことにも気にな

る」

「ここになど来ていなくて、集落に残っているだけかもしれませんよ?」

ルキアとは関わりの薄いリゼッタが取りなすように言う。ここに来るまでの間に、ルキアが存在を示すようなものは何もなかった。ジドにしてみても、ルキアがここを目指しているという確信があるわけではない。

「そうかもしれないが……いずれにしても、闇雲の突っ込むよりはマシだろう」

「……そうですね」

リゼッタの言葉に、ギルダスも頷いて同意する。どの程度の兵士が動き出すかはわからないが、無策よりははるかにいい。

「わかりました。ですが、決して無理はしないでください」

「死ぬつもりはない。ある程度引きずり回したら、追っ手を撒いてここに戻ってくるさ」

ギルダスとリゼッタは思わず顔を見合わせた。下手をすれば何十人も兵士を相手にすることになる。それだというのに、ジドに張りつめた様子はない。

「……へ」

ギルダスが苦笑し、ジドの胸を拳で小突く。

「雑魚に殺されるんじゃないぞ。なんたってあんたは俺を負かしたんだ。半端なヤロウに殺されるなんぞ俺が納得しねえからな」

「私は勝ったとは思っていないが……そういうことなら、死ぬわけにはいかないな」

苦笑して頷くと、ジドはその体躯には不釣り合いな俊敏な動作で、森の奥へと姿を消した。

——ピイイイツ!

警笛の高い音が、木々の間に鳴り響く。

反応してあからさまに動揺する兵士たちを、ギルダスは目を細め

て観察した。

兵士たちに、あまり戦慣れした様子は見られない。となると、どの程度残ることになるか——それが問題だった。

笛の音は一度だけで終わらず、二度三度と本陣にまで届いた。ジドが派手に動き回っているからだろうが、何も知らない兵士たちからすれば敵が大勢で攻めてきたようにも思えるだろう。

やがて隊長格らしき男の号令が下り、兵士たちは動き始めた。笛の鳴っている、ギルダスたちが潜んでいる場所とは反対の方向に。息を殺して、その動きを見つめる。やがて——およそ半数の兵士が、本陣からいなくなった。ギルダスの予想よりもずっと多い。

「ギル——」

「まだ早え。すぐに戻ってこれないくらいに離れてから動く」
残った半数が、抜けた穴を埋めるように動く。本陣の周囲を固める兵の厚みが、目に見えて薄くなった。

「……よし」

離れていく兵士たちの足音が完全に聞こえなくなってから、ギルダスは腰を浮かす。

「おまえはここで待ってる。一人のほうがりやすいからな」
ギルダスの言葉に、リゼッタは頭を縦に振る。リゼッタの出番は、ドーランを人質にしたあとだ。

「ところで、今さらこんなことを訊くのもなんですが……」

「あん？」

「ドーランの顔を、知っているんですか？」
ぴたり、とギルダスの動きが止まった。

「……そういや知らねえな」
間の抜けた顔で呟くギルダスを、リゼッタの冷たい眼差しが射抜く。

とはいえ、その点に関してはあまり心配していない。

「知らなくても問題ねえさ。行けばわかる」

目をしばたたかせるリゼッタを尻目に、ギルダスは立ち上がった。

手には曲剣、今では体の一部と言ってもいいほど馴染んだ感触の得物がある。

今まで具現化していたそれを、ギルダスは粒子化する。黒と灰の色をした魂精装具ソレストが形を失い、淡い光を放つ粒子と化して虚空へと消えていく。

「それとギル、わかつているとは思いますが——」

「なるべく殺すなってんだろ」

うんざりした声で答える。敵であろうとリゼッタは人の死に激しく反応する。理由は知らないが、こんな状況で言い聞かせられるとさすがにうつとおしい。

「なるべく、ではなく、できる限りです」

その瞬間——

その言葉を聞き終えたギルダスの表情が、さつと変わった。斜に構えたような顔から苛立ちが消える。振り向いたギルダスを見て、リゼッタは戸惑ったように瞳を揺らした。

「——できなかったら、殺してもいいんだな？」

区切るような、ゆつくりとした問いかけだった。反応をわずかも見落とさない、そんな眼差しをリゼッタに向けている。

リゼッタの脳裏を、クリアス大森林にまで来た本来の目的——聖封教会とは異なる、彼女自身の目的がよぎる。

フェルカの民に捕らえられた人々を解放すること。

多くの人々が死ぬことになる戦を、事前にくい止めること。

そのために必要とあれば——

間は一瞬だった。

「——ええ」

「そうか」

ギルダスの顔が、元の世の中を斜めに見たようなそれへと戻った。

「ならいい」

口端がつり上がる。

呟いたその声音には、抑えきれない昂ぶりたかが籠めこられているよう

にも思えた。

19・強襲(3)

声もなく、飛び出した。

木陰から姿を現した小柄な存在に、まだ若い一人の兵士が気づく。彼は一瞬緊張したように口元をひきつらせて、次いで戸惑いの表情を浮かべた。

半端に持ち上げた剣が、その内心を語っている。

——なんで子供がこんなところに？

ギルダスの存在を知らず、賊を討伐するのが目的だと信じこまされていその兵士にとって、いきなり現れたギルダスの存在は不可解なものでしかなかった。

だから――

その少年の伸ばした手に、黒と灰色の粒子が集まった時も、それが剣の形を為した時も、すぐには反応できなかった。戸惑いが驚愕に変わると同時に――兵士の体を衝撃が襲った。

刃を返した曲剣で横薙ぎにされ、兵士の折り曲がった体が宙に浮く。数人の仲間を巻き込んで地面に倒れたときには、すでに気を失っていた。

ギルダスが敵意を行動で示したことで、同じように戸惑っていた兵士たちの目の色が変わった。剣を、槍を、それぞれが持つ武器を構える。

しかし、遅い。

ギルダスはすでに兵士たちの中へと入り込んでおり、兵士たちの攻撃は同士討ちを恐れて鈍ったものになっていた。

周りのすべてが敵であるギルダスの動きに、遠慮はない。

「がっ！」

「いつ！」

立ちほかかる兵士の腹を柄で突き上げ、横にいた兵士には曲剣を叩きつける。ほぼ同時に二人の兵士が崩れ落ちた。

「なんだこいつ！」

「っ……！ つ、強い！」

「気をつける！ 精錬者だぞ！」

早くも及び腰になっていいる兵士たちを、ギルダスは容赦なく叩き伏せていった。

刃側でないとはいえ、鋼鉄の塊と変わらない質量を叩きつけられているのだ。下手をすれば死ぬ。

そうと知りつつも、ギルダスに躊躇いはない。死なないかもしれないぎりぎりの威力を、曲剣にらせていく。

本陣に近づけさせまいと攻撃してくる兵士もいるが、ごく散発的だった。

それでも彼らとてやられっぱなしではない。前と後ろから、ギルダスを挟撃するような連携が繰り出された。

示し合わせたかのような連携だったが、それが成果を得ることはなかった。

前の兵士が横薙ぎにした刃を身を沈めてかわし、背後から突き出された穂先は曲剣で受け流す。

ギルダスに背後の敵を倒す必要はない。前にいる兵士の肩口に曲剣を降りおろし、悶絶する様を見もせず陣幕へと近づく。

陣幕にたどり着くまでに、ギルダスは七人の兵士を地に伏せさせていた。

陣幕の手前にいた兵士が、自ら道を空ける。怯えた顔で、化け物を見るような目をしていた。

その兵士に歪な笑みを見せ——ギルダスは曲剣を振りかぶった。

「オ——ラァッ！」

次の瞬間、陣幕は斜めに斬り裂かれていた。内部の様子を隠していた赤い布地が、無惨に垂れ落ちる。

その隙間から、ギルダスの中に飛び込んだ。

「ハァ！」

その瞬間を狙ったのだろう。ギルダスの眼に映ったのは、自分自

身に迫る槍の穂先だった。

元々、リゼッタの人の死に対する忌避感^{きひかん}は強いほうだった。

それがさらに強くなったのには理由がある。ある一件で雇った傭兵が、彼女の目の前で死んだのだ。

無惨な死を迎えたその傭兵の姿を見て、彼女の死に対する恐怖と嫌悪はさらに増した。

味方も敵も――

知り合いもそうでない者も――

寿命でもなく、他の誰かに理不尽に命を奪われる、そうした事態はどんな事情であっても我慢できるものではない。リゼッタの心には、そう強く刻み込まれた。

もちろん、感情と理性は別だ。

世の中には更正の余地もなく、死んだほうがいい人間がいるということも知っている。

目的のために、やむを得ない――そう思うだけで、反吐が出そうだが――そうしたことがあることもわかっている。

ましてや、自分のそうした感情を他人に――ましてや、そう思うようになった発端の傭兵に押しつけるのは、ずいぶんと都合のいい話――リゼッタはそう自分を自嘲していた。

「いえ……」

発作のように沸き起こった罪悪感と自己嫌悪を、一度だけ目を閉じて追い払う。

――自分を蔑む暇があったら、やるべきことにその時間を使ったほうがいい。

そう思い定め、目を凝らした。そこでは、ちょうどギルダスが陣幕を斬り裂いて中へと飛び込むところだった。

（うまくいけば、私の出番はもうすぐ――）

ガッ――

そう思った直後、リゼッタは後頭部に強い衝撃を受けて、意識を失った。

待ちかまえていた兵士の放った一撃は、防ぐことなど不可能なはずだった。

ギルダス自身も、意識しての行動ではない。気づけば、曲剣の斬撃は槍の穂先を宙に斬り飛ばしていた。

「なっ……？」

呆然としている兵士が手に持つ、中途半端な長さになった柄を握り締める。一旦引くと見せて、すぐに押し返した。

反射的に踏ん張った兵士が、真逆の方向に力を加えられて体勢を崩す。再び刃を返して曲剣を叩き込むと、男の脚が鈍い音を立ててへし折れた。

倒れた兵士が絶叫を耳にしながら、ギルダスは息を整えて陣幕の中を見渡した。

突然の襲撃者に、ほとんどの兵士が硬直している。

その視線がギルダスの持つ曲剣に注がれたあと、ある一点に移った。

――陣幕の奥に座った、初老の男。ギルダスを見て、半端に腰を浮かせている。

ギルダスの目が細まる。

（――テメエか）

男がドーランであることを確信すると、ギルダスは兵たちの間を走り抜けて駆け寄った。

「待てイ！」

その前に、一人の兵士が立ち塞がる。

使い込まれた剣と鎧。どっしりとした構えでギルダスを睨みつけている。

一目で腕利きと判断するや、ギルダスは体を捻っていた。曲剣の切っ先が、地面にすれるほど低くを疾る^{はじ}。

「オラアッ！」

ギルダスの下方から持ち上げるような斬撃に、

「フンッ！」

迎え打つのは頭上から斬撃だった。

——ギインッ！

刃同士がかみ合い、弾かれる。

弾かれた度合いは、ギルダスのほうが大きかった。

男が上半身をのけぞらせたただけなのにに対して、ギルダスは弾かれた勢いをこらえきれず、背中を向けている。

——少なくとも、男にはそう見えた。

好機は逃さんとはかりに、男が再び刃を振りおろすため、腕に力をこめる。

その目が驚愕に見開かれた。

背中を見せていたギルダスが、さっきよりも速い斬撃を繰り出したのだ。

弾かれた勢いを、そのまま斬撃に乗せて。

振り向きざまの一撃に、男はかろうじて反応する。横に立てた剣が、甲高い音を立てて斬撃を防ぐ。

「っ……！」

ギルダスの攻撃はそこで終わらなかった。

体が反転する。今度も背中を見せての、全身を使った斬撃である。風を斬り裂き、唸りを伴った刃はさきほどと同じ軌道を描いた。再び受けようと男の構えた剣が、今度は弾かれそうになる。

力だけでなく、曲剣の重さと勢いを完全に活かした連撃である。単調で大振りにも見えるが、その速さと鋭さは男の動きを完全に封じていた。竜巻のような猛攻に、反撃することもできない。

周りにいた兵士たちも、その勢いに圧倒されて動けない。下手に手を出せば、自分たちが巻き込まれる——それほどの攻勢だった。

——ドッ！

「あ……？」

防ぐだけで手一杯だった男の体を、衝撃が襲う。

斬撃とは違った鈍い痛みが全身に広がっていく。

痛みよりもまず不思議さを感じたかのように、男は体を見下ろした。

——鎧に守られていない胴体、脇の下にギルダスの拳がめりこんでいた。

「なっ……？ ……が……はっ」

さっきまで曲剣の柄を握りしめていたギルダスの両手が——今は片手だけとなっていた。

斬撃の途中で片手を離し、それを拳にして打ち込んだのだ。攻撃が単調だったのは、男の意識を拳に向けさせないためでもあった。

「ぐっっ！」

ぐぐもった悲鳴をあげながら、それでも男は戦意を失っていないかった。

真下にいるギルダスに、柄を打ちおろしてくる。

一瞬反応が遅れたギルダスの背中を、柄頭がかすめる。かい潜るようにそれをよけ、ギルダスは一步踏み込みながら上体を捻った。

身を翻しながらの斬撃は、男の無防備な背中を襲い——ギルダスが最後の回転が終えた時、男の体から血が噴き出した。

全身の力を失い、男は前のめりに倒れる。

「悪いな、手加減する余裕はなかった」

柄頭がかすめた背中が熱をもっている。

一瞬リゼツタの顔を思い浮かべてから、ギルダスは駆け出した。邪魔な兵士を叩き伏せ、ドーランに肉薄する。

「ぐあつ！」

走る勢いを乗せた蹴りが、ドーランを地面に転がした。起きあがるうとしたその首に、血のついた曲剣が添えられる。

「――終しまいだ」

背筋を凍らせるような声が、ドーランの頭上から降ってきた。

「き、貴様……何のつもりか」

「喋しゃべんな」

歯噛みするドーランの首を、ギルダスの手がその見た目にそぐわない力で掴んだ。首を圧迫され、ドーランは痛みを感じるとともに、言葉を失う。

「ぐう……！」

「領主様！」

「旦那様！」

「……てめえらも動くな。こいつの首を落とされたくなけりやあな主を助けようとした兵士たちを、ギルダスは睥睨へいげいする。

兵士たちは顔を悔しそうに歪め、動きを止めた。動揺が走り、それは陣幕の外にまで伝わっていく。

硬直する場の空気を破ったのは、陣幕の外のだわめきだった。

ざわめきの中に、女、という単語を聞き取ったギルダスは声を張り上げる。

「その女を通せ！ 無傷でだ！ さもなきやあ――」

添えられた刃が、ドーランの首に一筋の傷をつける。

「待て！ わかった！ ……言うとおりにする」

答えたのは近くにいた老人だった。この場では唯一兵装していない。おそらく、従者か何かなのだらう。

老人の指示を受けて、兵士の一人が陣幕の外にまで駆けだしていく。

あとは現れたりゼツタが名乗りをあげれば、ギルダスの役目は終わる——はずだった。

現れた女の姿を見るまで、ギルダスはそう確信していた。

「なんでおまえが……」

それだけ言って絶句する。

裂かれた陣幕をくぐって入ってきたのは、琥珀色の瞳の女戦士——ルキアだった。

20・狂乱、慟哭、憎悪（1）

ギリイ——

張りつめた空気の中、その音は当然のように高く響いた。

ルキアの魂精^{ソレスト}装具である琥珀色をした弓——その弦には、すでに矢がつかえられている。

「その男から離れる」

状況にそぐわない冷徹な声は、驚くことにそのルキアの口から発せられた。

「……リゼッタはどうした？」

ギルダスの問いかけに、ルキアはぴくりとも反応を示さない。

そのことが、ルキアがリゼッタに何かをしたことを語っていた。

（まさか、殺してまではいねエだろうが……）

確かなのは、それはここで確かめる余裕はないということだ。

「念のために訊いとくが……離れたらどうする気だ？」

——ギリ。

弓の弦が、さらに引き絞られる。その行為が明確な答えとなっていた。

「……ならできねエな」

ギルダスの答えは、否である。

「今こいつを殺されたら、俺たちが周りの奴らに殺される。生憎^{あいにく}、死にたいとはまだ思っちゃいねエんでな」

息を吞んでいた周囲の兵士たちがざわめき始める。

自分たちの主を人質にした少年と、その少年が招いて姿を現わした女——その二人の間に漂う空気は、予想外に緊迫したものだった。彼らには状況が掴めていないだろうが、主が生死の境に立っていることは理解しているのだろう。固唾を飲んで立ち尽くしている。

ギルダスに断られても、ルキアの表情に変化はない。ここに来た時から無表情で、何を考えているかさえわからない。

(……ま、そんな奴の相手をするのは慣れてるけどな)

そんなことを考える自分に苦笑しつつ、

「だから提案だ」

ギルダスは指を一本立てた。

「今からこいつを連れて、ここから離れる。おまえもついてきていい。だからその間は手を出すな。おまえだってこいつと心中する気はねえんだろ？」

周囲を兵士たちに囲まれているこの状況では、仮にドーランという人質を失ったら逃げられない——そう思っただけの提案だった。

「貴様……！」

従者の老人がいきり立つ。主を自分たちの目の届かないところで殺されるとでも思っただけだろう。

「安心しな。こいつを殺したがつてるのはあの女だけだ。俺までやる気はねえよ」

「き、貴様……」

苦しげな声だった。

ギルダスに首を驚掴みにされているドーランが、口をわななかせながら問う。

「な……何者だ……？」

「聖封教会——」

びくりと、ドーランの身体が揺れた。老人の顔から険しさが消え、すぐに別種の緊張がそこに浮かぶ。

「ってことだ。殺しやしねえよ……下手なことしなけりやな」

「ぐっ……」

「おら、道を空ける」

首を掴み、ギルダスはドーランを引き立てるようにして、左右に分かれた兵士たちの間を通り抜ける。

剣を首に添えたままなので、兵士たちは手出しできない。

理解できない状況に疑問符を浮かべながらも、主を乱暴に扱われ

て悔しそうに顔を歪めている。

ルキアは少し距離を置いてついでにきていた。

何人かの兵士はルキアを見て、機会をうかがっているような素振りを見せたが、

「言つとくが、その女にも手を出すなよ。そうなたらこいつの命は保証しねエぞ」

ギルダスにそう言われ、今のところ強行手段に出る様子はない。

ルキアは矢はつがえたままなので、ギルダスにしても気は抜けない。視界には必ずルキアを入れるようにして移動しながら、ギルダスは目を細めた。

（にしても、こいつ……本当にあのルキアか？）

集落でルキアにつきまとわれたギルダスにしてみれば、今の彼女はまるで別人である。

その瞳からは、感情は読みとれない。初めて矢を向けられた時と同じだ。

それでも、多少の余裕はある。

警戒しているのか、ルキアはギルダスから距離をとっている。一足飛びで飛びかかれる距離でない代わりに、そこから矢が放たれても防ぐ自信があった。

「こんなもんか……」

本陣を出て、木々の密集している場所に入ったところでギルダスは足を止めた。

まだ兵士たちの目の届く範囲である。

見えないところまで離れることもできるが、そうすれば向こうの動きも見えない。

とりあえずは、いざという時に、すぐに囲まれる場所から離れればそれでいい——そう思いながらギルダスはさりげなくリゼッタの潜んでいた場所を確認した。

ふっと息を吐く。茂みが見えるだけで、地面に赤い血溜まりが広がっているということもない。

「――それで、どうする？」

意識を切り替え、ギルダスはルキアに問いかけた。

「ここまで来たはいいが、俺はおまえにこいつを殺させる気はねエぞ」

ルキアは答えない。

「だからって諦める気は……なさそうだな」

ギルダスは深々と息を吐きたい衝動を堪えた。

どの道、話しただけですぐごと引き下がるような相手だとは思っていない。

周囲を兵士たちに囲まれていたあの時、ルキアは明確な殺意を放っていた。それは自分が直後に死ぬとわかっていても、ルキアはドランに矢を放つのではないかと、ギルダスが疑問に思ったほどの殺意である。

そして、その殺意を否定する気はギルダス個人にはない。理由を知っているからなおさらそう思う。

もし依頼でなければ、さっさとドランを引き渡してこの場から離れていただろう。

（仕方ねえか……）

気は乗らない。乗らないが、だからといって投げ出すわけにもいかない。

一度だけ息を吸い、ギルダスは腹を据えた。

そして次の言葉を口にするその時には、ギルダスの雰囲気はがらりと変わっていた。

「――ま、そうだろうな。……なんたって身内を殺した相手だからなあ？」

嘲るような笑みを浮かべ、

「殺されたのは姉貴なんだって？」

嫌らしい口調で喋る。

ルキアの肩が、ぴくりと揺れた。

「おまえとは違って、おしとやかな女だったってな」

「っ……」

唇がわななく。

「勿体ねえなあ。いい女だったんだろ？ 死んじまえば関係ねエが」

「……れ」

「殺される前に散々なぶられたんだろ？ 死体は見たんだろ

？ なあ、どうだったよ？」

「黙れ……」

仮面のような表情がひび割れていく。

「ああ、そんなこともわからねエようなひでエ有様だったか」

「黙れ……！」

「可哀想になあ。死ぬ寸前にどんなことを思ってたんだろ？」

もしかしたら、おまえに助けてって——」

「黙れええええええっ！！」

ルキアの絶叫が、森の静寂^{しじま}を打ち破った。

ひとときわ強く、琥珀色の魂精装具^{ソレスト}が光を放つ。

魂精装具の持つ特殊な能力——それが発現する前兆に、ギルダスは身構える。

直後——ルキアの指から、矢が解き放たれた。

（——横！？）

矢はギルダスとドーランを逸^それ、すぐ横を通り抜ける。

怒りで、狙いがぶれたか？ ——ギルダスの疑問は、すぐに驚愕へととって変わった。

——キュンッ！

矢の行く先を追っていた目を、限界まで見開く。

琥珀色の光の残滓^{ざんし}をまき散らしながら、ルキアの放った矢は空中で軌道を変えた。

反転し、ギルダスを背後から強襲する。

ほぼ同時に——

ルキアが二本目の矢を放った。

それらはほとんど同時に、ギルダスへと迫る。

挟み込むように迫る矢の狙いは、ギルダスの腹——かわしにくく、しかも致命傷になりやすい部位だった。

「くうッ！」

ドーランを地面に引き倒す——

背中中の短剣を抜く——

曲剣を横薙ぎにする——

短剣を矢の軌道上に置く——

過密する時間の中で、ギルダスはそれらをほぼ同時にこなした。

——ガギギンッ！！

矢は二本とも刃に弾かれる。その瞬間、ギルダスの意識からルキアが存在が消えていた。

「死ねええええッ！！」

気づいたときには、ルキアはすぐそばにいた。

憎悪をたぎらせた瞳は、ドーランではなくギルダスに向けられており、その手には矢が握られている。すでに降り下ろしていた。

（ああ——こいつア、死んだか？）

死の寸前、ギルダスは自分の暢気な思考に呆れつつも、そんなことを思い——

横から飛び込んできた人影が、ルキアに体当たりをした時もすぐには反応できなかった。

「っ……！！」

倒れるまではしなかったが、ルキアの体が大きくよろめく。

その手首を取り、脇から飛び込んできたその人物は小さく身を屈めた。

その瞬間——ルキアの女にしては大柄な体躯が、空中に舞った。

——ズンッ！

「——カハッ！」

仰向けに打ちつけられたルキアの口から、胸に溜まった息が吐き出される。苦痛の色に染まったその顔を、すぐに白い法衣が覆い隠した。

その正体を見極めたギルダスは、自分でも知らないうちに安堵で表情をゆるめていた。

「で……」

次にギルダスの口から出たのは、不機嫌ながらも、どこか笑いを含んだ声だった。

「おまえは今までどこで、何やってた？」

「……油断しました」

割り込んできた法衣姿の女——リゼツタは顔をしかめて、首に手を当てる。その部分が赤く腫れていた。

思わずギルダスは、含み笑いをこぼす。

「不意打ち喰らって気絶してたってか？ おまえにしちゃ間抜けだな……っ」と

話の途中からリゼツタの眉根に皺が寄っていくのを見て、ギルダスは慌ててフォローした。

「ま、まあぎりぎりのところで目を覚ましたのはよかったかもな。

下手すりゃ起きた頃には、ここらへんにぐちゃぐちゃの死体が転がってたかもしれない」

苦しいフローだったが、その場しのぎにはなったらしい。リゼツタは怒りを吐き出すように息を吐いてから、

「気を失っていた時の事情は後で聞かせてもらいます。……ですが、今は——」

と、ドーランに視線を移した。

「うまくいったようですね」

「いろいろと予想外のこともあったけどな」

逃げられる機会だったはずだが、幸いにもドーランはこの場から離れていなかった。呆然とした顔で、地面に尻をついている。

あるいは、ルキアの殺気にでもあてられたのかもしれない。何かをぶつぶつと呟く様子を、ギルダスは気味悪そうに眺めた。とはいえそのまま放置しておくわけにもいかず、念のためその背中に切っ先を押し当てる。動くな、という意味表示である。

物騒なやりとりを耳にしたからだだろう。本陣のほうから、兵士たちのざわめきが大きく伝わってくる。こちらはそれほど待たなくても、向こうからやってくるだろう。

少しおかしいことにはなったが、あとは予定されていた通りの手順を踏めばいい。ギルダスがそう安堵しかけた時、

「うつ……く……」

いきなり足下から聞こえた嗚咽の声に、ぎよつとした。そこには関節を決められ、地面に押さえつけられたルキアがいる。

「くつ……ぐう……！」

わずかに動く指先で、ルキアは地面に爪を立てていた。土が爪先に詰まり、地面に五筋の跡をつけていく。

「なんで……なんでだ！」

空を見上げるルキアの瞳から流れる涙が、頬を伝って地面を浅く濡らした。

——あのルキアが、はつきりと涙を浮かべて泣いていた。

その事実には、ギルダスは自分でも気づかないうちに後ずさる。

ルキアを組み伏せていたりセツタが、困惑したように腰を浮かした。

「あの……すみません。どこか痛みますか？」

思い切り地面にブン投げておいてその質問はないだろ、とギルダスが呆れていると、ふと思いついたようにルキアが顔を上げた。

「ところで……なぜドーランではなくあなたが命を狙われたんですか？」

う、と言葉に詰まる。

言い過ぎた、という自覚はギルダスにもあった。

あったが、ルキアが仕掛けてくるタイミングを計ることと、感情を表に出させること、狙いをドーランから自分に移させることで、あの場をなんとかしのげたのも事実だ——最後はリゼッタに助けられたが。

「あー……その、なんだ」

受け入れられるはずもない謝罪を口にしようとし——だがルキアの次の言葉に、ギルダスは急激に頭の中が醒めていくのを実感した。「なんであたしは、シサラの仇を討つことすらできない!？」

悲痛な叫びが響き渡った。

シサラというのが殺されたルキアの姉だとわかった後、ギルダスの反応は——さも下らないとばかりの舌打ちだった。

そんなもの、答えは決まっている。

「弱エからだろうが」

口にしたその答えに、ルキアが目を見開く。

「弱エから大切な奴も守れねえ。その仇を討つこともできやしねえ。弱エから踏みにじられて、侮られて、そんな無様をさらすことになる」

「ギル……!」

容赦ない物言いに、リゼッタが非難の目を向けてくる。ギルダスはそれを無視して、ルキアを見下した。

苛立っていた。それは、殺されかけたことだけから来るものではない。

ルキアがやったことといえば、目的も果たせず、せいぜい場をひっかき回しただけ。

さんざんひっかき回されたギルダスにしてみれば、これぐらい言ってもいいだろ、という気持ちもあった。

(いや……違うな)

そんな思いは、後付けの言い訳に過ぎない。

結局は感情のままに言葉を叩きつけたただけだ。

ルキアの今の苦悶する様子は、ギルダスの過去を掘り起こすものだった。

壁にぶつかった時や後悔をする度に、同じようなことを何度も自問しては、その度に同じ答えを見つけた。

——ルキアの今の姿が、そうした思い出したくもない自らの過去の自分に重なって見えていた。

愚かで、何者にもなれると信じていたかつての自分を思いだし、ギルダスは自身の感情を抑えきれなかった。

息を荒げるルキアに、忌々しげな眼差しを投げかける。次の言葉は、意識する前に口から滑り出た。

「我を通す強さのねエ奴は黙ってる」

「っ……！」

言いたいことを言いきった晴れやかさとは縁遠い表情をして、ギルダスは気まずそうに顔をそらした。

「あ——」

ルキアが声にならない吐息を漏らし——その顔から、ふっと表情がかき消える。強烈な意志を宿していた瞳から、光が失われていく。心が、枯れ果てていく。そうとしか思えないような変化は、表情だけにとどまならない。

ルキアの魂精装具である弓が、使い手が粒子化するの比べるとはるかに遅く、形を失っていく。

その様子に、ギルダスは思わず目を奪われていた。

「——グアアアアアッ！！」

「なっ！？」

「ギルッ！！」

そのせいもあり——ほんの少しだけ、反応が遅れた。

ルキアに気を取られていたギルダスは、ドランがルキアの放った矢が消えていく様子に目を奪われていたことも、それを見ながら

何かをぶつぶつと呟いていたことも、知っていながら大して気にしていなかった。

有り体に言って、油断していた。

だからドーランが獣じみた咆哮ほうこうをあげながら立ち上がり、剣を抜いた時も、ギルダスの突きつけていた剣の切っ先は彼の背中に浅く傷をつけただけに終わった。

「ガアッ！」

ドーランが抜きはなった剣を逆手に握り、頭上に高々と掲げた。

そのまま、勢いよく振りおろす。邪教の儀式で生け贄でも貫くかのようなその刃の狙いは、地面に組み伏せられて身動きがとれないルキアだった。

「チィッ！」

考えている時間などなかった。

ギルダスはドーランの剣を突き下ろす背を見ていて、リゼッタはルキアを組み伏せるために地面に膝をついている。ルキアに至っては、ぼうつと空を見上げたまま、動く様子もない。

ギルダスは——手にした曲剣を、迷いなく突き出した。

「ガアア——あ？」

ドチュ、と水袋を床に叩きつけたような音とともに、曲剣はドーランの胸を貫いた。

突き出た切っ先から飛び跳ねた血が、ルキアの顔を赤く染めた。

21・狂乱、慟哭、憎悪（2）

熱い何かが、頬を濡らした。

そう感じた時には、もうすべてが終わっていた。

仰向けで見上げた先には、憎んでも憎み足りない男がいた。

その胸から何かが生えているのを見て、麻痺していたルキアの心に疑問が浮かぶ。

（……あれは——？）

——ズツ。

その何かが引つ込んだ途端に、そこから赤い液体が噴き出した。

（赤い——あれは、そう。血だ）

熱い飛沫^{ひまつ}を全身に浴びながら、それでもルキアはまだ夢の中にいるような心地だった。

ドーランが胸にある傷口を手で押さえた。その程度で出血が止まるはずもなく、胸と背中から溢れた血が、服を赤く染めあげていく。ふらりとよろめいたその口から、ごぶつ、と血がこぼれた。

「きざまあ……」

振り向くその姿を見て、ルキアは疑問に思う。

（なぜ——）

あれだけ出血すれば、もう保たないだろう。今はまだ立っ^もていられても、そのうち倒れてすぐに死ぬ。

それなのに、なぜ——

「ぎいざあまあああつ——！」

（なぜ——その顔はあたしに向けられていない？

なぜ——その目はあたしを映していない？

あれをするのは、あたしだったはずなのに。

——なら、誰が……それをした？）

霞がかったような頭で疑問を重ねるルキアの耳に、舌打ちが聞こえた。

直後——背後を見ていたドーランの首に赤い線が走った。

「あ……」

首が、飛んだ——そう思った時には、すでにその断面から血が噴き出ていた。

まだこれほど残っていたのかと思うほどの血をまき散らし、ドーランの体がゆっくりと仰向けに倒れていく。

目に血が入り、赤く染まった視界の中でルキアはあるものを見つめていた。

空中を舞うドーランの頭——それがゆっくりを回転しながら、地面に落ちた。

ころころと土の上を転がって止まったそれは、偶然にもルキアの方角を向いていた。

死してなお憎悪を宿した目、憤怒に醜く歪んだ形相を見て、

「——あ」

その瞬間、ルキアの世界は崩壊した。

「ああ、ああああああっ！」

「——っ！」

押さえていたリゼッタを引き剥がし、跳ね起きる。

自分が何をしているのかもわからず、衝動のままルキアは飛びかかった。

その相手は、仇を横取りにしたあの——

伸ばした手が、その首に触れるかに見えた瞬間、ルキアの足裏か

ら土の感触が消えた。

浮遊感の後——全身が衝撃に襲われる。

「ガア……ハッ——」

息が詰まる。体が麻痺したかのように痺れ、痛みに悶えて転げ回することもできない。

「よう。残念だったな」

声が聞こえた。

「——！」

あれほどひどかった痛みが、その瞬間だけ治まったように消えた。渦巻いていた視界が元に戻り、焦点を結ぶ。と同時に、

「ぐっ——」

妙な圧迫感を感じた。首を傾けて覗いてみれば、腹に足が乗せられていた。ただ乗せているだけでなく、浅くめり込んでいた。

「だから言っただろうが。踏みにじられるのは弱えからだってな」

ギルダスが、嘲笑^{わら}っていた。

「おまえが殺したがっていた仇はおれが殺した。おまえが地面に這いつくばっている間にな」

粘りつくような声が耳^{じだ}朵を打った。

「これでおまえが自分の手で仇を討つなんてこたア出来なくなったわけだ。俺にあっさり横取りされたからなあ」

くくく——

継ぎ足したような笑い声は、これ以上愉快なことはないというようなものだった。

ぎり——

食いしばった歯がきしむ。壊れかけていた心に、憎しみが戻りつつある。

その憎しみの向かう先は——

「で——おまえはどうする？」

「殺す……」

「ああ？ 聞こえねえなあ」

ギルダスがとぼけたように耳に手を当てた。目は笑っている。髪を振り乱し、ルキアは叫ぶ。

「おまえを——おまえを殺してやる！ 絶対に、絶対にだ——！」

仇がどうかは関係ない。今はただ、この赤い髪の少年が憎かつ

た。

今やルキアのドーランに抱いていた憎しみは、完全にギルダスへと向けられていた。

ギルダスの笑みが、ふっとかき消えたのも一瞬——すぐに元の口端を吊り上げた嘲笑いへと戻る。

「——そうかい」

常人なら背筋が凍りつくほどの憎悪に、ギルダスは肩をすくめて応じるだけだった。

「そりゃ結構なこった。だがおまえにや無理だ、そんなざまじゃあな」

ギルダスの足に、さらに力がこもる。かふつ、と戻りかけていた呼吸が乱された。

それでも——ルキアが怯えに竦むことはない。

「今は無理でも、いつか……いつか絶対におまえを殺してやる！」

「——ク、クククク」

すいっと持ち上げられた口端から、薄笑いがこぼれた。赤く濡れた曲剣を一度振って血を払い、掲げるように持ち上げる。

「——せいぜい、がんばるんだな」

降りおろされた柄が、自分の首を打つその瞬間まで——ルキアの琥珀色の瞳は、ギルダスを睨みつけていた。

——ギルダスの手に、鈍い感触が伝わる。

くたり、とルキアの体から力が抜けていく。がくりと垂れた頭が、地面に落ちた。

リゼツタが駆け寄り、ルキアを抱き抱える。その手が乱れた髪を左右に流すのを見て、ギルダスは顔をそらした。

気を失っていても、その表情から憎しみが消えることはない。眉根に皺しわを寄せ、口元は苦しげに歪んでいることはわかっていた。

「ちつ……」

舌打ちをしたギルダスの表情は、ルキアを相手にしていた時と一変していた。

喜悦きえつにまみれ、見る者の不快感を駆り立てるあの表情はもうない。今はつまらなそうな顔で明後日の方向を見ている。それは、駆けつけてきた大勢の足音が、周囲を取り囲んでも変わらなかった。

ギルダスたちをとり囲んだのは、ドーラン配下の兵士たち——彼らは主の変わり果てた姿を見て、ある者は呆然とし、ある者は怒りをたぎらせた。

——スラア。

誰かの剣を抜く音が、合図になった。兵士たちは声もなく、にじり寄るようにして包囲を狭めていく。

領主という人質が殺された今、彼らが止まる理由はない。

「よお」

それなのに、ギルダスの口から発せられたのは平坦な声だった。

声をかけたわりには、兵士たちを見てもいない。侮られていると思つた一人の兵士が大きく踏み出した。

刹那せつな——

その兵士は、怒りの表情を浮かべたまま硬直する。

彼だけではなく、周囲の兵士たちも動きを止めて落ち着かなそうに同僚と視線を交わしていた。

争いを生業とする兵士たちが、ギルダスの内から発せられた何かに怖じ気を感じたように足踏みしていた。

それが、殺意と呼ばれるものであることは——実際に殺し合いを経験した何人かは気づいていた。

「加減はしねえ。それでもいいってんなら——来いよ」

こんな状況でなくても、鈍い者ならその言葉が疑いようもない本気であることを悟ったはずだ。それほどの意志が込められた言葉だ

った。

怯えて立ちすくむ者――

怒りに身を震えさせる者――

反応は様々だが、勇気が恐怖に勝った兵士たちが、少しずつ包囲を狭めていく。

「止めなさい！」

それを止めたのはリゼッタの高い声であり――

「止めい！」

老人のしわがれた声だった。

リゼッタの純白の法衣は血で赤く染まり、一種異様な迫力を醸し出している。

それを見てたじろいだ者もいれば、振り返って驚きの表情を浮かべた者もいた。

彼らをかき分け、前に出たのはドーランの側仕えをしていた老人である。

ただの従者ではなく、主不在の時は領地を託されるほどの信頼厚い忠臣だった。

ドーラン亡き今、兵士たちが指示を仰ぐ相手がいるとすれば、この老人をおいて他にいない。

「なぜですか！？ こいつらは領主様を――お待ちください！」

兵士の制止を無視して、老人はギルダスに近づき――その横を素通りした。

彼が足を止めたのは、ドーランの死体の前だった。血で汚れるのもかまわずに膝を地面につける。

「不毛だ……！ これ以上の争いは……」

戸惑いの表情で兵士たちが見つめる中、老人は掠れた声で呟いた。
「いや……元々か」

疲れたようにふっと息を吐く。元々かなりの高齢である老人が、その瞬間さらに年をとったように見えた。

リゼッタが声をかける。

「そちらが矛^{ほこ}を収めてくれるというのなら、私たちにも争う意志はありません」

「……なら、よからう。すぐにこの場から立ち去れ。おまえたちを前にして、いつまでも抑えていられる自信はない」

淡々とした物言いが、返って老人の心境を表していた。

何かを企んでいるのではないかと思い、ギルダスが目を細める。

「……納得できねえな。そいつはあんたの主だろうに。仇を討とうって気はねエのかよ？」

あからさまな疑いを向けられても、老人は怒る様子もなかった。ただ、やるせなさを言葉にして吐き出す。

「小僧、一つ教えておいてやる」

「あ？」

「おまえの殺した男は……私の甥^{おい}だ」

ギルダスが眉を跳ね上げる。

本陣で斬りあつた腕利きの兵士——斬った時の感触が、一瞬よみがえった。

「主を殺され、甥をも殺された私が貴様を憎んでないはずがなからうが。できることなら、すぐにでも仇を討ってやりたいわ……！」

その思いに歯止めをかけているのは、それが我が主の——旦那様の遺志だからだ」

「……意味がわからねエな。最初に集落を襲撃したのは、そっちのほうだろうが」

「旦那様は——いや……」

老人は首を横に振って、口を閉ざした。

何かを言おうとして、思いとどまったかのような反応である。

それが死者を悪しざまに言うことに抵抗を感じてなのか、主と仰いだ相手を批判することに後ろめたさを覚えてなのかはわからない。

ただ、老人の表情には、言ってはならないことを言おうとした罪人のような陰があった。

これ以上踏み込まれるのを拒むような頑なな態度で、

「領地と領民を愛した旦那様の遺志を、私は尊重する。もう、これ以上争っても……意味はない」

その言葉を絞り出した老人は、顔を上げた。ドーランだけを見ていた目で、きつとギルダスたちを睨みつける。

「行け！……今すぐにだ。これ以上、おまえたちを見ておれば……っ」

抑えきれない何かが、その瞬間だけ溢れだしたように——老人の声が悲痛に上擦った。

リゼツタがギルダスに頷きかけて、ルキアを背負う。

最後に老人を一瞥し、ギルダスが一步踏み出した。その先で兵士たちは左右に分かれて道を空ける。

「旦那様……！」

背後で、老人の掠れたようなうめき声があがった。

振り返ると、地面に額をこすりつけた老人が号泣していた。

「……終わつたらしいな」

木陰から、ジドが姿を現した。体にいくつかの傷を負っているが、どれも軽傷だった。

ジドはすべてを悟ったような目で、気を失ったルキアと、ドーラの死体を見た。

「ああ……」

ギルダスが浅く頷く。それ以上、声を出すのも面倒だった。

目的を果たした達成感など欠片もなく、四人は集落への道筋をたどる。

離れても聞こえてくる老人の声は、高く、遠く——慟哭うめきとなつて耳に響いた。

22・道を違（たが）う

「改めて礼を言わせてもらう」

クリアス大森林——その広大な森の端で、ギルダスとジドの二人は向き合っていた。

「おまえたちのおかげで、この森が戦火に包まれずにすんだ」

「礼を言われる筋合いはねえな。俺は依頼を果たしただけだ」

壮年の男の言葉に、ギルダスはそっけない物言いで返した。

吹き抜けた清涼な風が頬を撫^なで、自然の奏^なでるざわめきがその間だけ、大きくなった。

——あれから、四日が過ぎていた。

その間、フェルカの民の集落は、新たな来訪者を迎えていた。

ドーラン辺境領——そこを領地の一部として抱えるヴァルト王国との交渉をまとめた、聖封教会の使者である。

フェルカの民との交渉、捕らえられた人々の解放も含め、後は彼らがやってくれる手筈^{てはず}となっていた。

つまり、ギルダスとリゼツタがこれ以上ここにいる理由はもうない。

使者たちと入れ替わるようにして、ギルダスたち三人は集落を発ち——そして今は、ただ一人見送りにきたジドが、ギルダスと向き合っていた。

気をきかせたりゼツタはリリーネを連れて、一足先に森を出ている。

無愛想な物言いに気を悪くしたわけでもなく、ジドはギルダスに視線を注いでいた。

「……正直なところ、おまえには感謝していいのかわからない。ルキアの命を救ってくれたこと——

ルキアに生きる目的を与えてくれたこと——
どちらも感謝するべきなのだろうが」

「何の話だ？」

「あの時、何が起こったのかは、司祭殿から聞いた」

ギルダスが眉をひそめる。司祭殿というのが一瞬誰のことかわからず、次いでリゼッタの役職だと思い出して軽く舌打ちをした。

あれ以来、人が変わったように明るさを失った娘のことを思っ
てか、ジドは物憂げに目を伏せた。

「これからあの娘は、憎悪をその身に宿して生きることになる。い
かなる時も、おまえを殺す方法を模索しながら。……そのことを恨
むつもりはない。さもないければ——心が死んでいただろう」

「……く、くく——」

ギルダスへの憎しみが、ルキアに生への執着を芽生えさせた——
そう言いたげジドに、ギルダスは含み笑いを返した。

「——おめでたい考え方だな。俺があの子を助けたってか？ あの子
にや散々つきまとわれたんだ。その憂さ晴らしをしたってだけか
もしれねエゼ？」

肩を揺らして嘲笑を含む言葉を紡いだギルダスを、ジドは無言で
見ていた。

その表情に変化はない。言葉面だけの偽りを見通す理性的な瞳に
見つめられ、逆にギルダスの表情が苦々しいものへと変わる。

「——ルキアは、集落を出るつもりだ」

ふとジドは視線を逸らし、森の彼方かなたを見た。

「外の世界で、力をつけるつもりだろう。おまえと戦うための力を。

……私は、あの娘についていく」

ギルダスは首を傾げる。

「こんなことになった理由は、ルキアの苦しみを知りながら、助け
てやれなかった私にもある。争いを疎んじて距離を置くだけで、何
ひとつしなかった。そうして起こった結果だ。せめて責任はとりた
い」

「それで……？」

「おまえはルキアにとって姉の仇ですらない。言い方は悪いが……」

あの娘にしてみれば、ドーランの代替品に過ぎない。そんなねじ曲がった恨みを抱いていても、心が歪んでいくだけだ。あの娘を見守りながら、そのいびつな憎しみを静めていくつもりだ」

「そうかい」

哀切あいせつを秘めたジドの言葉に、ギルダスはあくまで無愛想に応じる。興味がないとともとれるその態度は、穿うがった見方をすれば、心のうちにあるものを隠すように頑なさの現れだった。

「復讐に囚われても、得るものなどない……。そんなことなど、身に染みてわかっていたはずだったのだがな」

ギルダスが眉をぴくりと持ち上げる。ジドの声には、人から聞き知っただけのことを語るのとはまた違った重みがこもっていた。

「……あんたも、か？」

「集落の外での話だ。過去の……。十年以上前のな」

遠くを見つめるジドの瞳は、風景以外の何かを映していた。おそらくそれは、復讐を追い求めていた過去的一幕なのだろう。

ギルダスが、馬鹿馬鹿しいとばかりに鼻を鳴らす。

「あんたが誰の仇を討とうとしていたのかは、知らねえが……。それを仇を討つ前のあんたが知ったとして、復讐するのを止めたかよ？」
途端にジドは口をつぐんだ。

言葉がなくとも、その沈黙が答えとなった。

復讐は虚しいものだという。得るものはなにもないという。

——だからどうした？

そんな誰にでもわかる“正しい”理屈を、復讐者のすべてが知らない——そんなわけがない。知っていて、彼らは復讐だけを目的にしている。そんな理屈など知ったことかと切り捨てながら。

復讐を果たしても虚しさが残るだけかもしれない。だが、復讐を果たさなかったら大切な誰かを殺されたという無念の感情、それを為した者に抱く憎しみの感情だけが残る。

あるいは、復讐を果たしたとしても、それらは消えないのかもしれない。

それでも——そうかもしれないとわかっていても、時を経て塞がない傷を少しでも忘れるために、彼らは復讐の刃を研ぎ続けている。

そこに、他人の立ち入る隙はない。

「それでも、もしも——」

ジドは、ゆつくりと言葉を区切りながら話し始めた。

「もしも、ルキアが力をつけて、止められないままおまえと全力で戦うことになったら……私はあの娘の側につく」

ジドの声は、そうならないことを願いながらも、そうなった場合には言ったことを実現するであろう悲壮な決意が込められていた。

「すまない」

「——くく」

頭を下げるジドを見て、ギルダスはおかしそうに笑う。その笑いに、人を不快にさせる要素はない。むしろ、晴れやかさを感じる類の笑いだった。

「わざわざそいつを俺に言ったのは、義理立てのつもりか？」

「……すまない」

「謝るこたアねえさ。そうなると決まったわけでもねえ。あんたの好きにしな」

本心からの言葉をかけると、ジドは頭を上げてまじまじと見つめてきた。

「やはり——」

「あん？」

「……いや、いい」

「なんだそりゃ？」

歯切れの悪さにひっかかるものを感じて、言葉の続きを促す。

「……どちらにしても変わらないと思ったただけだ」

「？ 何がだよ？」

「仮に返しきれない恩を感じる相手が、少年だろうと、少年の姿をしたそれ以外の誰かであろうと、抱く感情は変わらない——そういうことだ」

ギルダスの目尻がぴくりと揺れる。

ジドが、一度だけ頷いた。今は何も訊くつもりはない——その目がそう語っていた。

「それでは、な」

最後の言葉は少なく、ジドは背を向ける。

声はかけず、それでもその背が見えなくなるまで、ギルダスはジドの後ろ姿を見つめていた。

森から街道に出たところで、リゼッタとリリーネの二人は待っていた。

最初に気づいたりリーネが、はっと顔をあげる。病み上がりの少女は、日陰で木の幹に背を預けて膝を抱える体勢で座っていた。

リゼッタはいえば、ギルダスに気づいてもちらりと視線をよこしただけで、表情を変えもしない。初対面の相手にはわかりにくい不機嫌さを表すその態度に、ギルダスはげんなりとしながらも抗議する。

「そんなに待たせちゃいねエだろうが」

ギルダスの抗議をよそに、リゼッタはさっさと歩きだした。

（……なんだあいつ？）

首を傾げつつ、不安げに自分を見上げるリリーネの腕を掴んで引き起こす。わずかに頬を紅潮させたリリーネに、まだ熱が下がりきっていないのかと疑問を抱きながら、ギルダスも歩き始めた。

街道では、ギルダスたちが関わった一件など何もなかったかのように入々が行き来していた。

ほとんどの兵士たちが町から出払ったことに不安を覚えたこの地の人々も、何も変わらない日常にすでにそのことを忘れ始めている。多くの者は領主であるドローランが死んだことと、その一件を結び

つけたが、だからといってその推測を確証に変えるために行動する者はほとんどいない。

ギルダスたちのことを知るのは、あの件に直接関わった兵士たちぐらいだった。

そんなもんだ、と思う。

ドーランがどんな人間であろうと、領民にとってドーランへの関心は常にその統治の方法に向けられている。

ドーラン個人がどんな人間であつたかなど、直接に関わる者でなければ大した関心もない。その苦悩も、博愛も、その当人が死んだ今ではすべては過去のもの――

らしくもないことを考えていることを自覚して、ギルダスは苦笑した。

こんなことを考えている自分も、次の厄介事に巻き込まれれば、今回のことなどすぐに忘れると確信していた。

街道を歩くギルダスたちの歩調は、自然と速いものになっていた。領主殺しの件を咎められることはない^{とが}と保証されているが、個人的に仇を討とうとする者はいるかもしれない。いずれにしても、この土地にこれ以上居たいとは思わない。

黙々と歩きながら、ギルダスはふと、先を歩くリゼッタの不機嫌な理由について心当たりを思い浮かべた。

「あー……ジドとの話な。礼を言われたただけだ。特に大したことは話しちゃいねエさ」

すべてを話す気にはなれず、ギルダスは話した内容のごく一部だけを口にする。

当たり、だったらしい。リゼッタが足を止め、振り返った。その目に非難するような色が宿っている。

「なぜ――」

迷ったように言葉を途切らせる。

「なぜ――ドーランを殺してまで、ルキアを助けたのですか？」

ほんの少し前に似たようなことを訊かれたギルダスは、うんざり

したように肩をすくめた。

「あ？　なんでそんなことを今さら……助けたらまずかったって口振りだな」

リゼツタがつい、と顔を逸らす。

「……そういうわけではありませんが……あんな……わざと憎まれるような真似までして……」

「忘れたのかよ？　俺アあの女に殺されかけたんだぜ？　その恨みを晴らそうとしただけで、助けたってエのも、たまたま結果がそうだったってだけだ。——それとも、心配でもしてくれてるってのか」
「っ……！」

リゼツタの顔が一瞬で赤く染まる。それが怒りのためだと思ったギルダスは反射的に身構えた。

「——あ？」

反応は、拍子抜けするものだった。リゼツタの表情が一転して醒めたものに変わると、交わした言葉などなかったかのようにさっさと歩き出す。

（なんだってんだ……？）

首を傾げるギルダスは、前を向いたりゼツタが唇を噛んでいることを気づかない。

ただ、その漠然とした怒りの気配に、ふとルキアの憎しみに染まった顔を思い出す。

殺されるのはごめんだが、憎まれるのには慣れている。もしルキアが本当に挑みかかってくるようなら、適当にいなすだけだ。それもできないければ——答えは決まっている。

「……ま、やりたかねえけどな」

そう独りごちたところで、

「あなたは……不器用にもほどがあります」

リゼツタの弦きが、風に乗って耳に届いた。もつとも、それはほんのかすかなもので、何と言ったかまではわからない。

「……あア？　なんか言ったか」

「いえ——」

聞かせるつもりで口にしたわけではなかったらしい。言い直すこともしなかったが、リゼッタの歩調が心なしか速くなったようにギルダスには感じた。

「……あいつにや借りがある。それだけだ」

ギルダスも、声にならないほどの言葉を口からこぼし——ふと、抵抗を感じる。

振り向くと、リリーネが服の裾をつまんでいた。

ギルダスも少年の姿をしているため、傍から見れば微笑ましく見える光景だったが、リリーネの表情は不安の色が濃い。

——リリーネが人の嘘に敏感であることを、ギルダスは知っている。それは、彼女がその生い立ちから自然と身につけた特殊な観察力の賜物だった。

おそらく、彼女はギルダスの嘘を見破っているだろう。それでも何も言わないのは、ギルダスを怒らせることを恐れているのだろう。臆病なリリーネの気質に、ギルダスはこの時ばかりは安堵していた。

——自分でも持て余すこの気持ちを、指摘されることがなかったから。

何も言わずに歩みを再開すると、リリーネの表情がかすかにほころんだ。

空を見上げると、青空の中に雲が流れていた。

見飽きるほど見てもう何も感じないはずのその光景に、ギルダスは羨望を覚えて息を吐く。

生まれついた体を失ってまで生き続ける自分とは異なり、曇り、時には雨こそ降っても、その光景は一人の人間が生まれて死ぬまでの間には決して変わらない。

変わることを恐れ、またその原因が自分自身にないことも知っているギルダスにしてみれば、その変わりようのなさはある意味で羨ましさを感ずるものだった。

(……はっ、らしくもねエことをぐじぐじと——)

内心で自嘲の笑みをこぼそうとしたギルダスは、不意に抵抗が強くなったのを感じて立ち止まった。

「……っ！」

肩越しに振り向くと、リリーネが足を止めてしゃがんでいる。

「おい？ まさか、また具合が悪くなったのか？」

「違……あ、くっ……」

苦しそうに、ふるふると首を横に振る。

どう見ても具合の悪そうなその様子に、ギルダスは戸惑いの表情を浮かべる。

「おい、またリリーネが——」

リゼッタに声をかけようとして、ギルダスは言葉を詰まらせた。

リゼッタが立ち止まっていた。振り向いて、ギルダスたちのほうを見ている。ただし、その瞳は彼らを映していない。視界にはない何かを感じ取っていた。

「これは——」

その声が、戦慄せんりつに震えていた。

鬱蒼うつそうと茂った森は、見る者の心によって、どう映るかも変わる。

見る者が明るい希望を抱いていれば、鳥のさえずりが祝福の音色のように感じられ、悩みを抱え苦しんでいれば、日の光を遮るだけの薄気味悪い空間に見えてしまう。

(——今のルキアには、どう見えるのだろうか)

内心で独りごちながら、ジドは前を歩く娘のことを思った。

ルキアにとって、森の外へ出ることは初めてのことである。だといつのに、その心に浮き立つものがないことは容易に想像がついた。

ここ数日で、ルキアは別人のように変わってしまった。澁刺はついつさを失い、常に激情を宿していた琥珀色の瞳は濁ったように暗い。

ついてくるジドにも、まるで最初からいらないような態度をとっていた。

ジドのほうも、今は何を言っても心に届かないだろうと思いい口をつぐんでいる。

（今は、これでいい）

少なくとも、ルキアが自分に何かしらの反応を示すまでは、彼女とは距離を置く——そう決めていた。

だから、

「——ジド」

ルキアがいきなり立ち止まって声を発したときも、それが自分に向けられているものだと気づかなかった。

「なんで——おまえはそこまであたしを気にかける？」

そう問いかけたルキアの心は、ジドが思うほど拒絶的だったわけではない。

ギルダスに向けた自分の憎しみが筋違いなものであることに、ルキアはとうに気づいていた。この数日、集落の誰もがルキアを腫れ物にでも触るように扱うなか、一人考える時間だけはたっぷりあった。

ギルダスは、仇ではない——その程度のことを考えられるくらいには、頭が冷えていた。

それでも——知っていても、誰かを憎まずにはいられない。

胸から無限に湧き出てくる、暗い想い、それを受け入れたがつている自分と、拒んでいる自分がいる。

矛盾する情動を内に抱えながら、ルキアの発した問いは半ば衝動的なものだった。

あるいは、胸の内のこの葛藤を、一時でもまぎらわせるかもしれないという、淡い期待があったのかもしれない。

「ルキア……」

振り返ったルキアの瞳が、暗さを帯びているとはいえ、はつきり

と揺れているのを見たジドは、驚きを隠せなかった。

それはそのまま、ルキアの心の動きを表している。

（憎しみに囚われているとばかり思っていたが……迷えるだけの余裕があったか）

本来、ルキアは激しやすくはあるが、愚かな娘ではない。

あるいは——傭兵の一件でのルキアのギルダスに対する認識の変化が、ルキアの心が憎しみに染まるのに歯止めをかけたのかもしれない。

そう推察しながら、ジドはかすかに安堵した。

これなら、幼い頃から見守ってきた娘と、返しきれない恩を抱く相手が殺し合うなどという最悪の未来を迎えずにすむかもしれない。とはいえ、ルキアがこれからどう変わっていくかはまだわからない。

とりあえず今は、ルキアの問いに答えなければならない。彼女が納得できるほどのことを答えるためには、今まで封をしてきた過去も語らなければならないだろう。

ジドは集落から離れていた時のことを、誰にも話したことはない。それは、自身の心の傷をえぐる行為だったからだ。

だが、今は話してもいいと思う。それがルキアの憎しみに染まった心に、ほんのすこしでも光明をもたらすのなら。そして、自分自身の過去に決別を告げるためにも。

「ルキア……、——ッ!？」

穏やかな表情でジドが語りかけ——その顔が不意に固まった。

目を剥き出しにして、愕然と口を開く。今までルキアが目にしたことのない、ジドの驚愕の表情だった。

「ジド……?」

「——ほっ」

「っ……!」

怪訝そうに見上げたルキアは、背後からの声にびくりと振り返っ

た。

それを目にした瞬間、ざわりと空気が震えた気がした。

「な……？」

十歩ほどの距離を隔てて、その男はそこにいた。

ルキアは反射的にのけぞった。人や獣の気配を感じとることに關しては自信がある。なのに、その男にはまるで気がつかなかった。

男はジドと同じ、鍛えられた体軀の持ち主だった。

引き絞った体に、革と鉄を組み合わせた鎧を着込んでいる。革は黒ずみ、鉄は錆びついて、もはや鎧としての体をなしていないのではないかと思うほどに朽ちた鎧だったが、男の体にはまるで鉄の皮膚のように馴染んでいた。

背中には大剣を背負っている。鞘の先端が地面につきそうなほどの長さの剣である。

男が一步踏み出した。

無造作に伸ばした黒髪が揺れる。髪のせいで面相は伺えないが、隙間から見えるその瞳が、異様な光を放っていた。

なにより、外見上の異質さがまるでどうでもいいことに思えるような、男の放つ異様な気配——常人にはない、禍々しい空気を男はまとっていた。

「“道化師”の戯れに使われるぐらいならと思ひ来てみれば——このようなところで見えるとはな。なるほど……おまえもフェルカの民の一人だったか」

男の声が、鼓膜を震わす。

自分でも気づかないうちに、ルキアの背筋を冷や汗が流れた。

（あれは……なんだ？）

人の形をしているのに、人ではない。人の声を発してはいるのに、それがまるで見たことのない化け物の唸り声のように聞こえる。

男の存在そのものに感じる恐怖が、ルキアの心を縛りつけた。立ち尽くすルキアを庇うように、ジドが前へと出る。

「なぜ、貴様がここに……！」

怒りと、緊張と、そして恐怖と——様々な想いを内包したジドの
声が、ルキアの心を見えざる鎖から解き放つ。

「……誰だ？」

乾いた唇を舌で濡らし、掠れた声で問いかける。

ジドは男から目を話さないまま、ギリイ、と齒を軋ませた。

「俺が討つべき——仇だっ……！」

23・黒剣（1）

信じられなかった。

「ルキ……ア……」

ルキアは愕然と、目の前に広がる光景に意識を奪われていた。

錆臭い匂いが、風に運ばれて鼻の奥をつんと刺激する。だが、今の彼女はすることすら気づく余裕もなかった。

「ル……キ……っ、ぐう……」

彼女の知る限り、最も強かった男が——ジドが、地面に倒れ伏していたから。

うつ伏せになった体の下には、赤い水たまりができていた。それが血溜まりというものであると、ルキアの半ば麻痺した思考が訴えていた。

「……げ……ろ、ルキ、ア……逃げろ……！」

ごぼりと、血が口からあふれ出る。共に吐き出された言葉は、ルキアの耳には入らない。彼女の目は、目の前の光景を作り出した一人の男に向けられていた。

「——フン」

醒めた眼差しを、男はジドに注いでいる。

「久方ぶりに楽しめた……と言いたところだが、刃を錆びつかせておったか。手ずから“力”を与えてやったものを無駄にしおって」

ジドと一戦交えた痕跡は、男の体にほとんど残っていない。幾筋かの、かすり傷のような浅い傷があるだけだった。

ジドと男の戦いを、ルキアはほとんど見ていない。視界には入っていたが、目で追えなかったのだ。それほどに速い攻防だった。

数合か、数十合か——それすらわからないほど槍と剣を交えたあと、先に倒れたのはジドのほうだった。

ジドが敗北を喫した一撃は、彼の肩から脇腹までを斜めに斬り裂いていた。傷の深さまではわからなかったが、それでもあれだけの

血の量である。浅くはないということぐらいは想像がつく。

男が、手に下げた大剣を振って血を払う。戦いの最中にはまともに見ることもできなかったそれは、異様な形状をしていた。

肉厚で全体が緩やかに湾曲している片刃の剣だが、その刃の部分には鐔の根本から切っ先まで、櫛のような突端が何本も生えている。肉食獣の牙のようなその形は、ソード・ブレイカー——ルキアが話にだけ聞いたことがある短剣の形を連想させた。

そして、その色は闇に紛れるような黒——柄から刃から、すべてが黒で統一されていた。

“——騎士殿”。

かつてある闇に包まれた一室で、男がそう呼ばれていたことは、ルキアには知る由もない。

ただ、見せつけられた現実——ジドが敗れたという事実が、ルキアに衝撃を与えていた。

「そんな……バカな……」

呆然と呟くルキアに、男はやっと気づいたというように意識を向ける。

無造作に伸ばした前髪に顔を隠したまま、男はつまらなそうに鼻を鳴らした。

「相手にする価値もない小者だが、熱を冷ますにはちょうどいいか」
ルキアに向き直ると、食事の献立こんだてでも尋ねるかのように男は問いかけた。

「女、殺されるのと犯おかされるのでは、どちらがよい？」

「……な、に？」
「好きなほうを選ばせてやる。己おれはどちらでもかまわんからな」

「……な——」
本気で言っている——そうとわかった瞬間、ルキアの感情が爆発した。

「っ……ふざっ、けるなああっ——！」
魂精装具を具現化し、矢を二本、立て続けに撃ち放つ。男の両脇

を抜けた琥珀色の矢は、空中で方向を変えて男の背中に迫った。同時に、三本目の矢が正面から男に襲いかかる。

——ルキアの魂精装具ソレストが持つ異能は、あらかじめ決めておいた軌道を、矢になぞらせるというものだった。射る前に矢の軌道を設定しておく必要があるが、遮蔽物に隠れていたり、動かない相手には効果の高い能力である。

三方向からほぼ同時に矢を射かけられたに等しいその攻撃も、ルキアにとっては非のつけどころのないものだった。

タイミングも狙った箇所かじりも少しずつずらし、二本の矢は避けても一本は命中するようにしている。だというのに——

フォン——

「くだらぬ児戯きじよ」

男は吐き捨て、大剣を一閃させた。たったそれだけのことで、空中を滑るように飛んでいた矢がかき消えた。それも、三本とも。

「え……？」

魂精装具の矢を失ったことで、ルキアは脱力感に襲われる。啞然として膝をついた。

必中のはずだった。それなのに、男は矢傷どころか、かすり傷ひとつ負わずに、ルキアを見下ろしている。

「弱き者の分際で牙をむくか。とはいえあまりに脆弱わづか、話にもならん」

路傍ろぼうの石でも見るような眼差しを向けた後、男はルキアから目をそらした。

「興きようが冷めた。己おれが手にかける価値もないわ」

言い捨て、倒れたままのジドに歩み寄る。

「貴様には期待を裏切った償いをしてもらう」

「くっ、な……にを……？」

男は大剣を逆さに持ち、ゆっくりとジドの背中に近づけていく。

すぐに切っ先が皮膚を突き破って、肉に埋まり始めた。

「ぐう……！」

ずぶずぶと体の中に潜り込む刃に、ジドは苦悶の声を漏らした。

「っ……俺を……殺す、か……？」

「無論。だが、その前に——」

男が動きを止めた。先端だけ刃が突き刺さった傷口から、血がこぼれる。

「貴様には、あの女を殺してもらおう。……貴様自身の手でだ」

「なっ……！」

その言葉を聞いたジドが、痛みを忘れたかのように目を見開いた。その背中に、足が乗せられる。

大剣が、ちり、と震えたように鳴った。

「があ……！　っ、何を——」

「その身にかけられた呪縛を憶えていよう」

言い終えるや否や——闇の色をした刃が、生き物のように脈動した。どくん、と震え、表面が水面のように波打つ。

同時に一片の混じり気もなかった刃の黒が、薄まっていく。色の変化は鍔元から始まり、少しずつ、まるで色が溶け落ちていくように刃の切っ先へと進んでいった。

「があああ！　ぐっ、はがっ！」

剣が脈動するたびに、ジドが悲鳴をあげる。外側からの痛みではなく、体内から襲ってくる痛みに、声を抑えることもままならない。逃れようにも、背中に乗せられた男の足がジドの動きを封じていた。

「おまえ……！　ジドに何をして……」

我に返ったルキアが、力が入らない足にむち打って立ち上がった。男はちらりとルキアを一瞥してから、弱者と交わす言葉などないとばかりに顔を背ける。

「くっ……！」

止めさせようとしても、男に意識を向けられただけでルキアの体

は凍てついたように動かなくなる。

「ぐうつ！が、はっ！ぐ、あ……」

やがて——ジドの声は収まり、男はゆっくりと足をどかした。引き抜いた剣の色は、不思議なことにまったく変わっていない。

「ジ、ジド……？」

ルキアが恐る恐る、声をかける。

ジドはぴくりとも動かない。

（まさか、死——？）

不吉な予想が頭をよぎる。

「ジド——！」

男の存在も忘れて近づこうとしたルキアは、すぐに顔をほころばせた。

何事もなかったように、ジドが動き出したからである。地面に手をつき、膝を立ててゆっくりと立ち上がる。

「……っ！」

ルキアは息を呑んだ。

ジドの様子が一変していた。姿形は見知った相手で間違いないのに、幽鬼ゆうきのように虚ろで無気力な気配を発している。

あれだけの血を流していた傷口は、なにか得体の知れない黒いもので塞がれていた。

「貴様の相手は後でしてやる。今はあの女は——殺せ」

男の声に反応して、ゆらりと体を揺らした後、ジドは俯かせた顔を上げた。

「……っ！」

その瞬間——

ルキアは目を見開き、口をわななかせた。

ジドの理知的だった瞳が、黒く染まっていた。

染まっているのは目だけではない。顔も手も、肌の見える部分は全て元の褐色から、漆黒へと変わっていた。おそらく、目に見えない部分も同じだろう。

「ジド……？」

あまりに様変わりしたジドを凝視しながら、ルキアは異様な状況に本能的に後ずさるうとした。

「あ——」

膝から力が抜け、かくんと体が傾く。

——ドンッ！

ルキアの髪が一房、吹き飛んだ。

「……なっ」

何が起こったかわからないまま、ルキアはひりつく頬を手で押さえる。

視界にあったジドの姿が消えていたことに気づき、驚いて振り返った。

周囲を舞う土と千切れた草に囲まれ、背中を向けたジドはそこに立っていた。

移動したのだ。目に見えないほどの速さで——それも、ルキアに奇襲をしかけて。

（まさか、本気であたしを狙った……？）

ジドが振り返る。その動きに不自然なところはない。昔、何度か稽古をつけてもらった時に見た、いつものジドの動きだ。

安堵しかけたのも一瞬、その顔を見て、ルキアは目の前は暗くなつた気がした。

——何もない。

殺意も、躊躇いも、罪悪感も。今のジドからは、人間が持つ感情がまるで感じられなかった。ジドの姿をした別の何かが、そこにはいた。

それが再び槍を構える。今度は確実に仕留めるためか、じわじわとにじり寄るようにして距離を詰めてくる。

「ジド、あたしがわからないのか……！」

悲痛に叫んでも、ジドはまるで反応を見せなかった。

「くっ——！」

ルキアは力を振り絞って、ジドに向かって矢を放つ。

最後の力を込めた矢はあっさりと弾かれ、二つに折れて地面に落ちる前に消失した。

ルキアの体から力が抜けていく。元々、普通の矢のように乱発できるものではない。

（なんで——）

呆然と、ルキアは近づいてくるジドを見上げた。

怒りも、恐怖も沸いてこない。ただ、理由もわからないまま自分が殺されることに、どうしようもないやるせなさを感じていた。

今度こそ膝について動けないルキアに、それでもジドは一步一步踏みしめるように近づいていく。油断のかけらもない、生来のジドの慎重さだった。

逆にルキアにとってはそれが、死に至る瞬間を引き延ばされているような苦痛を与える。

何も、わからない。ルキアの心が、闇に包まれていく。目に映るものすべてが、遠い世界の出来事のように感じられた。

それでも耐えきれず、ルキアは目を伏せた。

もう、何も見たくない。何も——感じたくない。

絶望が、ルキアの意識を黒く染め上げていく。

姉を殺され——

自分の手で仇も討てず——

今は、かつて父や兄のように慕っていた男に殺されようとしている。

ルキアの身の回りに立て続けに起こった悲劇は、彼女の希望を根こそぎ奪っていた。

意識が闇に閉ざされる瞬間、ルキアが感じたのは、地面に着いた膝から伝わるかすかな振動で——

「——？」

億劫おっくうそうに顔を上げたルキアの視界に、小柄な人影が飛び込んできた。

人影が疾走し、跳躍する。

空中で身を捻りつつ、全身の力を余すところなく使って、ルキアの目前に迫ったジドに斬りかかった。

「——オラアッ！」

繰り出された刃は、ジドが両手に構えた槍に受けとめられた。それでも勢いは殺しきれず、ジドが大きくよろめいた。

人影は着地すると、距離をとりながらルキアとジドの間に割り込んだ。怒声が、ルキアに浴びせられる。

「てめえ……何ふぬけてやがる！」

その小さな背中が、口汚い声が、ルキアの意識を闇から引きずり上げる。

今のルキアが憎んでやまない少年——

「——おまえ……！　なんで、ここに……」

「んなことどうでもいいだろが！　さっさと逃げろ！」

ギルダスという名のその傭兵は、呆然と座り込んだルキアに苛立たしげに声を張り上げた。

24・黒剣（2）

その場には、四人の人間がいた。

一人は身の丈に合わない湾曲した剣を構え、一人は無造作に鋸のこぎりのような歯の連なる大剣を携えている。

一人は心を闇に染められ本来の人格を失っており、もう一人はその闇にあてられ心が折れかけていた。

にらみ合い、向き合い、悠然としながら、怯えて立つことすらできない――

異なる思いが交錯するその中で、比較的冷静を保っているギルダスは、曲剣を構えつつも眉をひそめて視線を巡らせた。

「くそっ……どうなってんだ、いたい」

ルキアを襲っていた、ジドラしき人物を睨みつける。

その顔立ちはジドのものに間違いない。ただし、その肌の色は慣れたものより深い黒に染まっており、雰囲気はギルダスの知るものとはかけ離れていた。

無気力、無感情――

抜け殻のように立っているにも関わらず、油断はできない。

なぜかはわからないが、今のジドは本来の彼ではない。ついさっきも、ギルダスが割って入らなければ、確実にルキアを殺していた。ただ、それをする理由が見当もつかない。

思いつく理由としては、この場でただ一人、ギルダスが見たことのない得体の知れない男ぐらいだった。

たまたま迷い込んだだけの一般人でないことは、ひと目でそう知れた。

ギルダスは男の力を推し量るように、目を細めた。その目に、すぐに驚愕の色が浮かぶ。

（なんだ、こいつぁ……）

相手の力を見定める――それは、命のやりとりをする者にとって、

もつとも重要な能力である。その目に関しては、ギルダスも自信があつた。

その目が、ギルダスにありえない現実を訴えかけてくる。どれほど腕が立つ傭兵や兵士だろうと、ギルダスは勝てないと思つたことはない。

真正面から挑んで勝てない相手でも、隙をついたり、苦手な条件で戦えば——ようするに手段を選ばなければ、勝算もあつた。

だが、目の前の存在は違う。

根本的に違うのだ。同じ人間という気すらしない。

どんな手段をしようが、絶対に勝てない——そんなふうに思つた相手は初めてだつた。

奇しくも、ギルダスは少し前のルキアと同じ思いを抱いていた。

（いや……錯覚だ——）

どれほど異質に思えても、男の姿は人間のそれでしかない。だとすれば斬つて斬れないことはないはず——そう思い直す。

とりあえず意識を男から逸らし、ギルダスはジドを見据えた。

「おいあんた、何を血迷つてやがる……！」

ジドの返事はない。

正気を失っているのは、見た時点で予想がついていただけに、意外さはない。代わりに声を発したのは、得体の知れない男のほうだつた。

「ほう——」

その声を聞いただけで、ぞわりとギルダスの肌が粟立つ。

「年こそ若いが、その女よりは腕が立つようだな」

ジドを視界の端に入れながら、ギルダスは男に意識を向けた。

「ちつ……、リゼッタがあのおふざけた仮面野郎の気配だつて言うから来てみたら別口かよ。いったいどうなつてんだ……？」

ギルダスのぼやきに近い呟きに、髪に隠れた男の目が光つたように輝く。

「——貴様が道化師の言う“玩具”おもちゃか」

「ッ！……てめエ、……あのクソ野郎の知り合いか？」

答えはない。男の体が、ゆらりと揺れる。

「よかるう、己が相手^{おれ}をしてやる」

「ああ？ 何を偉そうに——」

言葉は途中で凍りつく。気がついたら、男は間合いの中で剣を振りかぶっていた。

風が、唸りをあげる。

「な——があっ！」

気づいたときには、反射的に掲げた曲剣ごと、ギルダスは弾き飛ばされていた。

浮き上がった足が、地面に触れる——その直後、今度は反対側から衝撃に襲われる。

半ば腰を落として受けたギルダスの体が、斜めに傾いた。下から噴きあがるような斬撃に、今度は両手が万歳したように持ち上げられる。

繰り出された刺突は、その余波だけでギルダスの肌を斬り裂き、剣を引き戻しながらの片手斬りが肩を浅く抉った。

繰り返される連撃に、ギルダスはいいように翻弄^{ほんろう}される。勘頼りの防御は、今にも破られそうだった。

（速い！ それに——重い！？）

切っ先が目止まらないほど速く、その一撃は辛うじて受けても体勢を大きく崩される。一撃ごとに足が浮き、とてもではないが反撃する余裕などない。

身を丸めて攻撃をしのいでいたギルダスを、大振りの斬撃が襲う。横薙ぎの斬撃——止めきれないと判断したギルダスは、とっさに木陰へと転がり込んだ。盾にした樹の幹は、大人二人が両腕を広げたほどの太さがある。

これなら——と息をついたギルダスは、次の瞬間、目を疑った。

——フォン。

軽い、まるで素振りをしたような音とともに、盾になるはずだった幹の、刃が触れた部分が消失した。

剣で斬り裂いたわけではない。まるで、初めからそこには何もなかったかのように、大剣の軌道上にある分厚い木の固まりが消えていった。

防御が間に合ったのは奇跡だった。

まるで威力を減じていない斬撃を受けた瞬間、衝撃が全身を貫いた。溜めていた息が肺から絞り出され、ギルダスの足を地面から引きはがす。

「つつっ！」

着地も出来ず、ギルダスは地面を何度も転がった。自分の身に起こった出来事を理解して、ギルダスは全身をバネに跳ね起きる。

その間にいくらかでもとどめを刺せたはずだが、不思議なことに追撃はなかった。

幹の半ばで両断された樹が、枝のへし折れる音を立てて地面に横たわる。

ふらつく体を叱咤して立ち上がったギルダスは、怪訝そうに顔を上げた。

「……？」

——男はなぜか、剣を下ろしていた。

困惑しながらも、ギルダスは息を整えて体の調子確かめる。

斬撃を受け続けた腕が、痺れている。特に最後の一撃を受けた時に、刃の峰に添えた右腕にくつきりと痕がついていた。そのせいか、右腕の感覚がうっすらとしか感じられない。あと何度か攻撃が続いていたら、剣を握る握力すらなくなっていたはずだ。

剣を交える前に感じた見立てが、錯覚ではないと思い知らされ、ギルダスの表情に焦燥が浮かんだ。

「——つまらんな。この程度か」

男が、落胆の呟きを漏らした。

見下された物言いに、反感を覚える余裕すらない。両手に構えた大剣を、男が頭上に掲げた。

「貴様ごとき、己が本気で相手にする価値もない」
ギルダスが目を剥いた。

（加減してたつてのか！？）

驚いている暇もなく、男の全身から殺意が噴きあがった。

歯を噛みしめ、次に来る“とどめ”の一撃を待ちかまえるギルダスに、男は冷酷に告げる。

「逝ね。弱き者よ」

その一言を境に、男の持つ黒剣が異様な気配を放ち始める。

男自身のまがまがしい気配が、収束するように黒い剣へと流れ込んでいった。

元から黒いはずの刀身の色が、不思議なことにさらに黒くなったように感じられる。

溢れだした闇が、陽炎のように刀身から立ち昇った。

ドクン――

黒剣が、一度大きく脈打った。

「我が黒剣は――」

男が無慈悲に言葉を紡ぎながら、掲げ持った剣を、

「――すべてを喰らう」
降り下ろした。

大剣とはいえ、届く距離ではないはずだった。それがわかっていてギルダスが飛び退いたのは、ただの勘に過ぎない。

しかしその一撃は、ギルダスの傭兵としての勘をも上回るものだった。

「……っ！」

目の前で起こる現象に、ギルダスは目を奪われた。

消えていく。ギルダスと男を結ぶ直線上にあるものが、消えていく。文字通り、草も、土も、獣の牙で喰いちぎられたような醜い痕を残して、無くなっていた。

それでいて、一切、音はしない。

自分に迫るその“斬撃”を、ギルダスは呆然としながら見つめていた。死が近づいているためか、斬撃はやけにゆっくりと迫ってくる。

とはいえ避ける暇はないし、受けれるものかどうかわからない。それでも着々と近づいてくる斬撃は、はつきりとギルダスの目に映った。

それが通過する瞬間、その一帯は光すらも無くなる。迫りくる闇が、斬撃の正体だった。

物も音も、光すらも、軌道上にあるものすべてを喰らう斬撃の前に、常人に出来ることはない。

腕利きの傭兵とはいえ、常人の枠内に収まるギルダスには、ただじつと訪れる死を待つことしかできない。

それでも――

最後の足掻きとして、ギルダスは曲剣を“闇”に向かって突き出していた。何かを考えてのことではない。無意識のうちに体が動いていた。

「――！」

それはあまりにも唐突のことだった。

ギルダスの突き出した曲剣の切っ先に、黒い渦のようなものが突如として出現した。

渦は一瞬で大きさを増し、人一人がぐり抜けるほどになった。

その中心から、聞き覚えのある声がした。

「我が黒衣は、すべてを偽る」――

その瞬間――

ギルダスに向かっていた“闇”が、方向を変えた。反転し、まるで最初からそちらに向かっていったように、“闇”を放った男に迫る。

「ぬうつ！」

男が初めて、切迫した声をあげた。

返された“闇”と大剣がぶつかり合い、闇の斬撃はわずかな停滞の後、その刃にひゅつと吸い込まれる。

「……貴様か。“道化師”」

腹の底から絞り出すような忌々しげな声を、男は渦の中から現れた人物にかけた。

「さて」

とぼけたように、それは首を傾げる。

「これはこれは。奇遇だね、“騎士”殿。このようなところで顔を合わせるとは。それに——」

全身を覆う黒衣を翻して、振り返った。覗き穴も何もない白い仮面が、その顔を覆い隠していた。

そのあまりに特徴的な外見を目にして、ギルダスはぎりつ、と歯を軋ませる。

「なんででめエが、ここに……！」

ギルダスの言葉に、かつて“遊び”と称して一つの街を混沌の渦に叩き込んだ張本人——“道化師”は愉快そうに肩を揺らした。

25・黒剣(3)

道化師が笑っていた。

起伏のない白い仮面の奥にある表情は、当然のことながらうかがえない。

それでも、仮面の奥から漏れ聞こえる含み笑いは、不気味な印象を伴ってギルダスの耳に届く。

「なんのつもりだ、てめえ……！」

危うく窮地を救われたギルダスは、表情を険しくして命の恩人である道化師を問いつめた。

本人の言うとおり、道化師がここにいるのが偶然のはずはない。助けがなければ、死んでいた——そのことがわかるだけに、道化師の意図がつかめなかった。

「何、こんなふうにあっさり死なれてもつまらないと思ったただだよ」

あっさりとはげるのを止めて、道化師は肩をすくめる。

「いやはや——」

首を左右に振り、わざとらしくため息をついた。動作の一つ一つが芝居じみている、それがまた癪に障る。

「今回はただの傍観者で終わるつもりだったんだがね」

ギルダスに背中を向けたその姿は、一見隙だらけに見える。

(いや——)

今、斬りかかってもらわれる——そんな漠然とした、それでいて確信めいた予感をギルダスは覚えた。なにしろ、前に会ったときも、毛筋ほどの傷もつけられなかったのだ。

「それより——これはどういうことかな、“騎士”殿？ 確か彼には手出し無用と言っておいたはずだが？」

道化師はおどけた様子で、怒気を露わにする男に仮面を向けた。
「貴様と約定を交わした覚えなどない」

あつさりと切り捨てると、男の殺気がさらに膨れ上がった。

「それよりも道化師……貴様、“偽った”な？」

「さて？ なんのことやら」

「とぼけるな。この程度の相手に、貴様が傷つけられるはずもあるまい」

「ふむ……これのことかな？」

道化師は黒衣を翻し、以前に騎士に見せた血の汚れを露わにする。

——風が、道化師の黒衣を宙に舞わせる。

ふわりとゆらめいた黒衣が元に戻った時には、さっきまで染み着いていたはずの汚れはなくなっていた。

あつたはずの血の汚れが消えた現象を目の当たり^まにして、ギルダスは眉を持ち上げる。

「我が黒衣は全てを偽る——さて、この程度のことは予想がつくものと思っていたがね」

「貴様……！」

男の怒声を耳にして、ギルダスは無意識のうちに後ずさっていた。「これは……」

聞き慣れた声に振り返ると、リリーネを背にしたりゼツタが立っていた。リリーネに合わせて来たため、ようやく到着したらしい。

「っ……！」

リリーネが、道化師を見て息を呑んだ。

リゼツタはこの場の光景に、困惑したように眉をひそめている。

「……一体何があつたんです？ ギル」

「知るか。俺にも何がなんだかわからねエんだ」

道化師と、それと向かい合う得体の知れない男。変貌したジドと力なくす座り込んでいるルキア。それらを順に眺め、ギルダスは吐き捨てる。

「俺がここに着いた時には、ジドがルキアを殺そうとしてた。なんでそんなことになったのか……俺にもさっぱりだけどな」

ギルダス自身にも状況が理解できていないだけに、説明も歯切れ

悪い。

「僭越ながら——」

男と向き合いつつも、話は聞いていたらしい。

道化師が無造作に振り返ると、ジドを手の平で示した。

「彼の身に何が起こったのか、私の口から説明しようか」

「余計なことを言うな、道化」

「いいではないかね？ 事情を知らなければ、彼らとてやりにくいだろう」

親切めいた言葉だが、ギルダスは顔をしかめた。

単なる親切心などではないだろう。むしろ、事情を話すことによつて、ギルダスたちが動揺するのを楽しむようなそんな響きが、道化師の声にはあった。

道化師は、この場でただ一人正体の知れない男に顔を向ける。

「この男——私は“騎士殿”と呼んでいるがね。彼にはある奇矯ききょうな趣味があつてね」

「趣味……？」

「そう。彼は出向いた先で力のある者を見つけては、その者を自らの強敵手に育て上げるのだよ。いずれ自分と、生死の境を綱渡りするような戦いをさせるためにね」

「なんでそんなことを……」

場違いなほど間の抜けた声が、リゼッタの口からこぼれ出る。

「……そういう奴か」

対照的にギルダスは納得したように呟いた。

わざわざ好き好んで死地に足を踏み入れたがる類の人間が、ごく稀まれにだがこの世にはいる。理由は様々だが、おそらく“騎士”と呼ばれている男もそういう人種なのだろう。

「とはいえ、もちろん彼が自身で戦いの手ほどきをするわけではない。少々迂遠な方法で見込んだ者に力をつけさせようとする。しかし、その相手が再び自分に挑みかかってこなければ意味はない。何をもってそうさせるかは——わかるかね？」

それを聞いて、別れる直前にジドと交わした言葉がギルダスの脳裏に浮かぶ。

「っ……復讐、か？」

「その通り！」

手を打ち鳴らし、道化師は声高に言った。話している内容とは裏腹に、その声音は嬉々としてよどみない。

人をくったような言動で振る舞い、そうしておいて相手が困惑し、苛立つのすら楽しんでいるのだろう。自然とギルダスの目尻が吊り上がっていく。

「大切な者を、かけがえのない存在を、世の中に二人としない愛する誰かを——目の前で殺され、永遠に失う。そんなものを見せつけられて、絶望を感じないものがいようか？ 復讐を誓わない者がいようか？ いないだろう？ あるいはいたとしても、それは私のように壊れた存在だけだよ」

肩を揺らし、愉快そうに言葉を紡ぎ続ける道化師の仮面が、ジドの方向を向く。仮面の奥に隠された顔がどんな表情を浮かべているのか——知りたいとも思わない。

「はてさて——彼はいつたい、誰を失ったのだろうか？ もっとも、こうなってしまうてはそんなこともはや関係ないが」

「……そいつにいつたい何をした？」

「騎士殿の實力はわかっただろう？ 才能ある者でも並大抵の修練では彼には追いつけない、どこか足下にも届かないだろう。ゆえに——騎士殿に見込まれた相手は、とある“呪い”を受け、修羅の道を歩むこととなる。それが、あれだ」

肌の色を黒く染めたジドが、その瞬間ぴくりと反応した。それに気づいて道化師が意外そうな声をあげる。

「へえ？ もしかしたら本人の意志が残っているのかな？ あの状態になつたら、そんなものなど吹き飛んでしまふと思っていたが」

「だから……何の話だったんだ！」

抑えつけていた怒りが、怒号となって口から飛び出した。

それを意に介した様子もなく、道化師は頭を左右に揺らしている。
「ふむ、失礼。彼の状態も興味深いが、今は話の途中だったね」

言いながら、ゆるゆると右手を黒衣から出した。黒の衣とは真逆の、一度も日の光を浴びたことがないような白い指を一本立てる。

「もし仮に、彼が一人の人間を殺したとしよう。理由などは関係ないよ。ともかく彼自身の意志で、誰かを亡き者にした場合——彼の心は、殺意に染まる」

ジドの体が、またびくりと震えた。

「肌や目の色が変わっているだろう？ 形こそ変わっていないが、中身はまるで別だよ。あの姿になった者は、目の前にある全てを傷つけねば気が済まなくなる。誰もいなければ、近くにいる人間の気配を感じ取り、そこに向かう。刃を振るうために、ね。修羅の道を歩むことになる——そう言った理由がわかったかね？」

ギルダスは困惑して眉を寄せる。そんなことができるなど、今まで聞いたこともない。

尻目にリゼッタを見ると、彼女は険しい顔で、ジドの手にある黒く染まった魂精装具ソレスタを見ていた。

「この“呪い”の恐ろしいところは、対象者が理性を失わないということだ。自らの持つ戦いの技術はそのままに、冷静なる殺戮者と化す。もつとも今は、騎士殿の支配下にあるようだ」

「そういうことかよ……」

“呪い”とやらの理屈はわからない。

しかしギルダスには、ジドがあれほど人殺しを厭う理由が、ようやくわかった気がした。

誰かを殺せば、無作為に周囲の者も巻き込む。普通 of 感覚の持ち主なら、ためらって当然だろう。

「なかなかいい趣味だろう？ そういうところは私とも通じると思うのだが」

「ふざけるな、道化。貴様などと一緒にされても不快なだけだ」

騎士が憤りいさめを声に出す。道化師はとぼけた調子で、笑ってみせた。

「と、つれない態度でね。なぜかはわからないが、私は彼に嫌われているらしい」

その声に不快感を覚えたのはギルダスたちだけではなかったらしい。

「っ……！」

騎士の全身から、殺意が噴き出る。その余波に当てられて、ギルダスの肌が粟立った。

「貴様……それ以上その無駄にさえずる口を開くと、舌を斬り落とすぞ」

「おやおや、怖い怖い」

おどける道化師の態度に、騎士から放たれる殺意がさらに濃厚になっていく。争いごとに縁なく過ごしてきた者なら、それだけで気絶しそうなほどの殺意である。

お互い知ってはいるが、それだけの関係らしい。それどころか、今にも殺し合いを始めてもおおしくなさそうな雰囲気だった。

ギルダスは、そっと背後を覗き見た。

リゼッタは強張った顔をしているが、殺気に吞まれている様子はない。

リリーネは顔面蒼白になって、呼吸をすることすら難しそうだ。ルキアは――

ギルダスがこの場に現れてから、ずっと座りこんだままだった。

集落での態度が嘘のように、今では場の空気に吞まれ、怯えた顔をしている

「おい……」

ギルダスはリゼッタに近寄り、気づかれないように囁きかけた。ささや

「逃げるぞ。リリーネは任せる」

リゼッタが目には陰しさを宿す。

納得できないと、その表情が語っていた。それを言葉に出す前に、ギルダスは言いきった。

「戦っても勝ち目はねえ」

「ギル……？」

「あの仮面野郎も不気味だが、もう一人は化けモンだ。逆立ちしたって勝てる気がしねえ。……だから、俺が抑えてる間に逃げる。長くは保たねえが、足止めする」

「なら、私も残ります」

あらが抗うように言ったりゼツタに、ギルダスは苛立ちを剥き出しにする。

「バカか、おまえまで残ったらリリーネが逃げられねエだろうが。いいから行け。逃げるだけだったら俺一人のほうが都合がいい」

実際には——自分ひとりだけでも、逃げることは難しいだろう。その予測を無視して、ギルダスはリゼツタに逃げるように促した。それでも、命を懸けてというほど殊勝な思いは、ギルダスにはない。難しいと不可能とは、全く意味が異なる。さっきは危うく死にかけたが、手を知っていれば対処のしようもある。

渋々と頷いたりゼツタは、

「……彼女は、どうするつもりです？」

座り込んだルキアを同情的な眼差しを送った。ギルダスはルキアを一瞥すると。

「焚たきつける」

簡潔に言いきった。

呆然としているルキアに近づき、しゃがみこむ。

ルキアの顔は青ざめていて、精神的にはおるか、肉体的にも不調であることがうかがえる。

そんなことなど知ったことかとばかりに、ギルダスはルキアの耳元で囁くように叱咤しったした。

「おい、いつまでへたりこんでやる」

ルキアがびくつと体を震わせて反応した。戦うことすらも忘れた、怯えきった顔でギルダスを見上げる。

そんな表情をしたルキアを見るのは、ギルダスにとって愉快なことではなかった。舌打ちしながら、その首を掴んで引きずり起こす。

「っ…………」

苦痛に身をすくませたルキアに顔を近づけ、ギルダスは苛立ちを叩きつけた。

「殺すんだろぅが、俺を。てめえが先にくたばってどうする!？」

「……………言われなくても——!」

ギルダスの声に反応して、ルキアが目に憎しみが宿らせた。

突き放されて尻をついたが、今度はふらつきながらも自力で立ち上がる。

「ふん…………」

ギルダスはリリーネの肩に手をおいたりゼツタを見やり、浅く頷く。リゼツタも頷き返し——その表情が凍りついた。

「——おや、どこへ行くかうというのかな？」

すぐ近くからした声に、ギルダスは反射的に飛び退いた。振り返ると、道化師がゆらりと体を揺らせてそこに立っていた。

——まったく、気づかなかった。

冷や汗が背中を伝う。

「ちっ…………」

警戒して曲剣の魂精装具ソレスタを構えるギルダスに、道化師は含み笑いで応じた。

「てめえ…………!」

「ああ、待ってほしい。先に言っておくが、私に君の仲間を害する気はないよ。正直なところ、彼女らにはあまり興味がない。そうするのは君という玩具が壊れた後だね。もちろんこれはこの場限りの話だがね」

リゼツタたちを視界にも入れず、道化師は言った。

道化師にとって、ギルダス以外は大した関心を抱かない存在らしい。

「とはいえ——あちらの御仁は、また違う意見のようだが」

道化師の意識が、その背後に向けられる。

その途端に、密度を増して、もはや物理的な圧力すら感じられる

ほどの殺気が叩きつけられた。

「——どけ、道化」

“騎士”が、黒の大剣を構えていた。

「そやつの首は己^{おれ}がはねる。そのような弱き者を生かしておく理由などない」

その威圧的な姿など目に入らないかのように、道化師は頭を横に振る。

「いやいや、それは困る。彼に最初に目をつけたのは私なのだがね」
「貴様の思惑など知ったことか」

「……さて、これは困った。もし仮に私と君が戦っても、単なる時間の無駄で終わるよ？ そのことはよく知っているだろうに。君の黒剣は私に通じないし、私の黒衣もまたしかり。それを承知で戦ってみるかね？ それともどちらかが引くまでここでにらみ合う？

どちらにしてもそれはあまりに退屈。なので、勘弁願いたいのだが」
さてどうしたものかと、道化師は頭をカクンと横に倒した。

こんな状況でなお平然と無駄口を叩く道化師の正気を疑いつつも、ギルダスは緊張で乾いた唇を舌で濡らした。

今は言葉の応酬だけで済んでいるが、いざ逃げようとしたらどうなるかわからない。

もしこの二人が本気で向かってくれば、抵抗することも許されずに死を迎えることになるだろう。

こんなついでのように殺される——それは、ギルダスにとって認めがたい話だった。

打開策を求めて、周囲を見渡す。周囲は木々に囲まれており、この窮地を脱するようなものなど何も見あたらない。

ふと、中空をさまよわせていたギルダスの視線がある一点で止まった。

その目が迷いに揺れる。しかしそれは一瞬で、すぐに追いつめられた者特有の強張った口元が、歪んだ笑みの形へと変わった。

「——なら、こんなのはどうだ？」

「……？」

「何かな？」

二人のやりとりを見ていただけのギルダスの言葉に、騎士は怪訝そうに顔を向ける。

道化師が、愉快そうに問い返した。

どこか壊れたようにも見える笑みを浮かべたギルダスは、二人の視線が自分に向けられるのを待って、ゆっくりと手を持ち上げてみせた。

「俺が今からそいつと戦う」

伸ばした指は、人形のように立ち尽くしているジドを指していた。その瞬間、騎士の殺気が霧散したように薄まった。かすかに首を傾げ、問いを発する。

「……聞き間違いでないのなら、問おう。それに何の意味がある？」

「俺がもし勝てば、俺はあんたの言う弱者じゃねエってことだ。それならあんたも俺をここで殺す理由がなくなる。違うか？」

その場にいた皆の意表のつくことを、ギルダスは堂々と言い放った。

26・狂戦士(1)

静寂——不気味なほどの静けさが、そこには満ちていた。

ギルダスの言葉は、張りつめて今にも裂けそうだった空気を打ち破り、森に一時の平穏を取り戻させていた。

真意を探るために、あるいは、言葉の虚実を見極めるために、ギルダスに視線が集中する。

それを意にも介さず、ギルダスは薄ら笑いを浮かべていた。見る者によつては忌避感を覚えるような、どこか退廃的な雰囲気^{ただよ}が漂う笑みである。

——生きるために、ジドに勝つて自分の力を証明する。

ギルダスの言葉を単純にすれば、そういう意味だが、そこに覚悟や悲壮感はない。

「……命惜しさに、縁を得た者と戦うというわけか？」

騎士の疑問に、ギルダスは肩をすくめて応じた。

「そもそもそんなに親しいってわけじゃねエよ。それにな——」

親指で自分を指し、恥じる様子もなく言い放つ。

「俺は何よりもテメエの命が大事だ。それに代わるようなものなんざねエさ」

あまりにも堂々と言ったからだろうか。腐っているととれるその言葉に、騎士は毒気を抜かれたように口をつぐんだ。

「ク、クククク……」

——パン、パン、パン。

代わりに、耳に障^{さわ}る含み笑いと、ゆつたりとした拍子を刻む拍手の音が静寂を打ち破る。

「いやはや——」

ギルダスが洪面で音の元を見やる。ゆらゆらと揺らめく、それ自体が意志を持つような黒衣の主は、隠しきれない喜悦を声にして表に出した。

「まさか、先に言われるとはね」

「……だろうな」

半ばうんざりした思いを隠すことなく、ギルダスは頷いた。

騎士を止めるわりには、ギルダスたちを逃がすわけでもない。それに、さっきからの道化師の言葉には、いちいち含むようなものが感じられた。

ようするに、元々けしかけるつもりだったのだ。

「さて——」

道化師が黒衣を翻す。

その仮面の先には、懔然^{ふぜん}とたたずむ騎士がいる。

「ということだ。どうするかね？」

「時間の無駄だ」

あっさりと切って捨て、前に出ようとした騎士の前に、ふらりと道化師は立ちふさがった。

「いや、これは心外。だが少し待ってほしい。君は彼の实力を見きったつもりかもしれないが、彼はまだすべてを出し切っていないよ。それに——」

振り返り、手で示す。

「よく見てみるといい。彼本人はともかく、彼の内に眠るもう一つの魂には伸び代がある。ここで終わらせるには惜しいと思わないかな？」

「なに……？」

騎士は立ち止まって、道化師の言葉に顔をしかめたギルダスの、さらに奥にある何かを見定めるように眼を細めた。

射抜かれるような眼差しを浴びて、思わず後ずさったギルダスに、背後から声がかけられる。

「ギル……本気ですか？」

険しい声で問いかけてきたのはリゼッタだった。ギルダスは振り返りもせず、

「本気だ」

あつさりと答える。

「これ以外にここを切り抜ける手はねえ」

あつたとしても、元よりそれを思いつく頭もない。

「だからといって——」

責めたてようとしたリゼツタを、ギルダスは振り向いて睨みつけた。

挑むような目と、視線がぶつかり合う。数秒の間、睨みあつた後、
「へっ……」

ギルダスは薄く笑うと、視線をそらした。

リリーネとルキアに一瞬だけ顔を向け、再びリゼツタへと戻す。

その目は、口元の笑みとは対照的に真剣な色を帯びていた。

音を発することなく、口が動く。

隙について逃げる——

唇の動きを読んだりゼツタが、小さく息を呑んだ。迷つたように
目を伏せた後、頷き返す。

「待て」

割り込んできたのはルキアだった。ギルダスの笑みが、しかめ面
へと変わる。

「ジドを殺す気か？　もしそのつもりなら、その前にあたしがおま
えを——」

「はっ、言っている場合かよ？」

口調は軽い。が、その言葉の奥にある激情に気づいて、ルキアは
思わず口をつぐんだ。

「話は聞いてたろうが。ここがどこだか、忘れたんじゃないだろう
な」

「……？」

「もしここで、今のジドが野放しにされたらどうなると思う？」

冷たく告げられ、血の気の引いたルキアの顔がさらに青白く染ま
った。

クリアス大森林に住むのは、動物たちだけではない。ルキアの生

まれ育った集落——そこに住まう者たちもいるのだ。

騎士と呼ばれる男が、ジドをどうするつもりかはわからない。だが、もしあそこに行かせでもしたら——そのことを想像して、ルキアは唇をわななかせた。

今のジドは、見境がない。ルキアですら殺そうとしたのだ。相手が同族だろうと、遠慮なくその槍で貫こうとするだろう。

絶句したルキアから顔を背け、

「……おまえらのためってわけじゃねえ。俺が今からすることは、全部俺のためだ。黙って見てろ」

ギルダスはそう吐き捨てた。

同時に、

「——よかるう」

濃霧のようにその場に満ちていた殺気が、ひゅつと音を立てたようにしぼんで消える。

振り返ると、騎士が大剣を鞘におさめていた。

「貴様の思惑通りに事が進むのは気に入らん。が、たしかにそ奴の内に宿りし魂の器は、凡百のものとは違うようだ」

「おや、というと？」

「もしかということもある。貴様の余興につきあつてやろう」

「それでこそ。さすがは騎士殿、興というものをわかっておられる」

「見え透いた世辞などいらん」

（——勝手に言ってる）

不気味な含み笑いをこぼす道化師と、たいして期待はしていないと言いたげな騎士に、ギルダスは内心で吐き捨てた。

この二人にとって、自分はせいぜい暇つぶしの道具でしかない。

——そんなことは、とつくにわかっていることだ。

だが、今はそれでいい。

どんなに雑に扱われようが、手のひらの上で踊らされようが、今は命をつなぐことがこの場での勝ちの条件だ。

（こいつらも含めてな）

背後にいる三人のことを尻目にして、ギルダスはつい苦笑いをこぼす。自分の命すら危ういの、他人のことを気にかけている自分が妙におかしかった。

「行け、我が期待に背きし者よ。貴様の相手は後でしてやろう。今はその男を——殺せ」

騎士の言葉に反応して、今までぴくりともせずたたずんでいたジドが一步を踏み出した。噴き出すだけで方向性のなかった殺意が、すべてギルダスへと注がれる。

「あんた相手に、手加減はできねえ」

殺意だけの存在になったジドを、ギルダスは臆することなく見上げた。

「悪いが、腕の一本ぐらいは我慢しろよ」

——元より、楽に勝てる相手とは思っていない。

とはいえ、負けるつもりもない。前回と違い、この場での負けは死を意味する。

一撃で、終わらせる——

その決意を胸に、ギルダスは曲剣を正面に構えた。振り回す剣の勢いを御するのではなく、剣身一体となって斬撃を繰り出すいつものやり方を、今回ばかりは止めにする。

ジドの得物は槍、一手目はおそらく突き——

その突きをいなして、腕を切り落とすイメージを脳裏に焼きつけ、考えるよりも先に体が動くようにする。

両穂の槍を構えて、じりじりと間合いを詰めてくるジドを、ギルダスはその場で待ちかまえた。

その黒く染まった両の眼を見て、雑念が沸き上がったのも一瞬、頭を軽く振ってそれを振り払う。

（考えるのは後でもできる。今は——）

ジドの一挙動に、意識を集中する。

長く引き延ばされたような時の経過が、ギルダスの額に汗を浮かびあがらせる。

足で踏みしめる草の感触や、肌を撫でる風の強さが、いつもよりはるかに五感を刺激した。

二人の距離が、詰まる。

ジドがギルダスを間合いにとらえたその瞬間——時間がさらに濃密に圧縮された。

ジドの肩がかすかに震え、ほぼ同時に、閃光のような突きがギルダスめがけて繰り出される。

ギルダスにしても、目に止まらないほどの速さの突きである。反応できたのは、あらかじめそうくると予想していたからに過ぎない。刃がギルダスの胸を貫く直前——曲剣の刃が、槍の柄と触れ合った。

ギャリッ——

耳障りな音を立てて、槍の軌道がずらされる。必殺の一撃は、ギルダスの脇わきをかすめるにとどまった。

「っ——！」

曲剣を翻す。切っ先が弧を描いた。あとは振りおろせば、前に突き出されたジドの腕が二つに断たれる。今さらそのことに躊躇いはない。狙うべき腕を見据え、

「なっ!？」

愕然とギルダスは目を見開いた。

イメージ通りのはずだった。ほんのわずかな遅滞もなかった。

だというのに、刃を叩きつけるはずの腕はそこにはない。それはすでに、槍を繰り出す前の位置へと戻っていた。

（はや——）

驚愕する暇もなく、ぞくりと、胸に中央に貫くような冷気がはしる。

曲剣を振りかぶった体制のまま、ギルダスは上体をひねる。

二度目の突き——胸元を熱い感覚が疾り抜けた。

それが痛さへと変わる前に、ギルダスは剣を振りおろす。灰色の刃は何を斬ることもなく、空を滑った。

ジドが飛び退いて距離をとる。

追おうとしたギルダスの胸から、血が噴き出た。胸を横に走る傷は浅い——が、ギルダスの斬撃はかすりもなかった。

打ち負けた——

その事実には動揺するわけでもなく、ギルダスは胸に刻まれた傷をまじまじと見つめた。

「へっ……」

自嘲の笑みがこぼれる。

自分のあまりの馬鹿さ加減に、笑わずにはいらなかった。

何が腕一本——？ 今の攻防で死んでもおかしくはなかった。

そもそも、戦う相手を殺さずにすませようなんて考えること自体が思い上がりだった。そんなものは、よほどの実力差がある場合だけに考えていい話だ。

「そうだよな……あんた相手に殺る気なくすませようってのはムシのいい話だよな」

ぼつりと呟いたその口の端が、歪に吊り上がる。

ジドの冷たい殺意とは異なる、天敵を前にした獣のような殺気がその体から溢れる。

（今は、こいつだけを——）

意識の隅にあつたりゼツタを振り捨てて。

道化師も、騎士も、リリーネもルキアも——それらすべての存在を、ギルダスは意識から切り離す。

深く息を吐き、ギルダスは再び曲剣を構えた。

「ほう——」

その変化を感じとつてか、騎士が短い感嘆の声をもらす。

一撃目をかわす前と今のギルダスの雰囲気は、一変していた。

今のジドが、操られていることを、ギルダスは知っている。

ふりまく殺意が、本人の意思でないことも知っている。

知った上で、

「いくぜ」

ぽつりと呟き、ギルダスは一切の躊躇いを捨てた。

27・狂戦士(2)

殺意と殺意が交錯する。

睨みあう両者の意志は、甲高い音の連続となつて現れていた。

刃と刃が、激しくぶつかりあう。

絶え間ない不協和音が、少し前まであつた森の静寂を幻想のように感じさせる。

「ラアッ!!」

「……っ!」

斬りかかったギルダスを、ジドが迎え撃つ。繰り出された突きをギルダスは辛うじてかわし、後ろに下がった。

滑るような足取りで近づいてくるジドを、ギルダスは^{どうも}獰猛な笑みを浮かべて迎えた。

真つ向勝負に一度打ち負けているので、真正面からではない。逃れるように横へと移動する。

その足が、前置きもなく跳ね上がった。足の上に乗っていた土が、ジドの顔めがけて飛んでいく。

「……」

驚くそぶりも見せずに、ジドは体を少しだけ動かしてかわし――直後にその喉を狙って投げつけられた、断面の尖った枝を槍で払い落とした。

その隙に、ギルダスは何かを投げつけるように右手を大きく振りながら、跳ねて間合いをつめる。

迎え撃とうとしたジドの顔に、赤い何かが付着した。

それは、ギルダス自身の胸に刻まれた傷から溢れ出た血だ。

一瞬だけ視界をふさがれ、ジドの反応がかすかに遅れた。それでもギルダスの斬撃には危うげなく反応する。

回り込みながら、ギルダスがさらに斬りかかる。

受け、今度は反撃する素振りさえ見せたジドの目が、少しだけ細

められた。

木々の間から差し込む陽光——それが、ジドの顔に当たっていた。
「オラアツ!!」

飛び退いたジドの胸を、ギルダスの曲剣が斬りつける。かすかな遅滞は、それを完全にかわすことを許さない。

ジドの胸に赤い線が走る。偶然にもその傷は、ちょうどギルダスにつけられたものと同じ位置にあった。

追撃のために前に出ようとしたギルダスの目が、槍を構え直したジドの姿を映した。

直感に従って踏みとどまったギルダスに、ジドの連続突きが襲いかかった。

「っ！ がっ！ くっ！」

たまらず後退するギルダスの頬を、槍がかすめた。皮膚が避け、鋭い痛みに襲われる。

速すぎて何本にも見える槍の刺突を、かわし、受け、下がりながらも防いでいく。

「……」

ジドの連撃が、止まった。ギルダスが木の後ろに飛び込んだからだ。

木の幹を盾にしたギルダスを見据え、ゆっくりと回り込む。すでに何度も繰り返されたパターンだった。

不意をついて近づきつつ斬りかかり、ジドが立て直せば退いて逃れる。

土を蹴飛ばし、切り払った枝を投げ放ち、木を盾する。時には茂みに姿を隠し、追いつめれば地面を転がって逃げる。

刃を交える時は、木々の密集している場所を選ぶ。そうすれば、槍という長物の力は存分に発揮できない。

木の根や茂みであふれた森の中だ。大柄なジドは移動も制限され、容易に距離を詰めることができないでいた。

戦いに正々堂々という美学を見いだす者なら、あまりの見苦しさ

に顔をしかめるような光景だった。

華麗に、堂々と――

それとは反対の、卑怯で、姑息^{こそく}、泥臭く、手段を選ばない戦い方をギルダスは実践していた。

（こちら、はした金で命を切り売りする傭兵風情なんぞ――）

自嘲するでもなく、ギルダスは内心で呟いた。

栄誉や名声なども、望むべくもない。だからこそ、身についたものもある――

ギルダスが姿を隠した茂みを、ジドの槍がひと突きする。

しかし、すでにそこはもぬけの空だった。すぐ横にあった木の陰から、投石とともにギルダスが飛び出す。

小石とはいえ、当たれば肉に食い込む。ジドはそれを頭を傾けてかわした。その動作で生まれた隙を狙い、曲剣が振りおろされる。

曲剣はジドが跳ね上げた槍の穂先とぶつかりあい――今までの攻防が嘘のように、あっさりと弾き飛ばされた。

並の使い手なら、あまりの手応えの軽さに違和感を覚えるだけだが、熟練の戦士なら、曲剣を持っているように見えたギルダスの左手が、実は添えられていただけだということに気づいただろう。

柄を握っていたのは右手だけで、残った左手は――？

曲剣が空中で回転しながら粒子化する頃には、ギルダスの左手はすでに背中に回されていた。

ひねるようにして仰け反った体勢から、ギルダスは一気に体を落とす。

すぐ足下には、地面を踏みしめるジドの足がある。

（ここだ――）

右手で柄頭を押さえて、短剣を振りおろす。

通常なら考えられない、魂精装具^{ソレスト}を囫にした、死角への強襲――

刃はジドの足に食い込み、さらには地面を貫き、串刺しにして動きを封じる――はずだった。

「がっ――！？」

ギルダスの視界が揺れる。突然、頭を襲った衝撃に、意識が闇に沈みそうになった。

気を失ったら死ぬ――

寸前にその事実が頭をよぎり、驚異から逃れるように地面に崩れ落ちた体を無様に転がした。

すぐそばから、土を耕すような音が連続して聞こえる。

「クッ！」

四肢を使つて獣のように地面を這い、具現化した曲剣をでたらめに振り回して立ち上がる。鈍痛が残る頭を抱えつつ、顔を上げた。転がった短剣のすぐそばに、ジドはさっきまでと変わらない様子でたたずんでいた。

「ギル……！」

槍の柄で殴られたギルダスを、リゼッタは唇を噛みながら見ていた。

力を失い、人形のように崩れたギルダスを、ジドの槍が襲う。ギルダスは地面を転がってそれを避けているが、いつ殺されてもおかしくない状況である。

辛うじて立ち上がり窮地は逃れたが、早くもその顔は追いつめられた者のそれへ変わっていた。

「やれやれ、この程度で終わってほしくはないのだがね」

知り合いがちょっとした失敗をしでかした時のような口調で、傍らの道化師がぼやく。その暢気な声は、リゼッタの頭に血をのぼらせた。

「あなたは……！」

リゼッタが睨みつけると道化師は肩をすくめ、

「私を睨んでも何の解決にもならないよ？ それよりも、司祭殿。今は彼の勝利を祈ってやるといい。そうしなければ彼は死んでし

まうよ？ ほら、今にも殺されてしまいそうだ」

「祈ったところで——」

言いかけて口をつぐみ、深く息を吸って昂^{たか}ぶった感情をなだめる。戦いに目を奪われているルキアには聞こえないように、リゼッタは意識して冷静な口調で話し始めた。

「あなたが、なぜ今この時に、この場にいるのかを考えてみました」
「ほう？」

「今回の一件、すべてはあなたが仕向けた——違いますか？」
唐突なりゼッタの言葉に、道化師はゆらゆらと揺らしていた体を止めた。

「……なんのことかな？」

白塗りの、表情どころか覗き穴すらない仮面をリゼッタに向ける。今回の、ドールン辺境領領主と、フェルカの民との、確執と対立——それは知れば知るほど、拭いきれない違和感をリゼッタの内に芽生えさせた。

それが何かとは、はっきりとはわからない。

ただ、何かが足りない気がしたのだ。

組みあがったパズルのなかで、そこだけ空白があるように——
ピースが足りない。出そろっているモノだけでは、完成しない。そんな漠然とした思いがリゼッタの内にあった。

もう一つ、あるいは一人、何かがなければ——

「それが確信へと変わったのは、この森での異様な気配を感じ取ってからです」

それは道化師と勘違いした騎士の気配だったが、その禍々しい気配を察知したとき、リゼッタの脳裏をよぎったのは、以前のとおる事件だった。

そう昔のことではない。時間的に考えれば、ごく最近とっていい話だ。

背中にかばったりリーネを見る。

まだ幼い彼女は、追いつめられたギルダスを見て今にも泣きそう

な顔になっていた。

この少女と出会った、悪名を誇るある街――

そこでは、一人の男が化け物に転じた挙げ句、混乱と恐怖を住民たちにまき散らした。

結局最後には破滅したが、それでその男のしたことまでが無かったことになるはずもない。リリーネもその時、姉のように慕^{した}っていた人物を亡くした。

そして、それを裏で糸を引いていたのは――

「発端となった、領主を襲った悲劇。そして、フェルカの民への襲撃、それらはあなたの仕業――そうなのでしょう?」

……クク――

仮面に隠された口から、濁った含み笑いがこぼれる。

それは不快を通り越して、聞く者の耳を腐らせるような悪意に満ちた音だった。

「同じようなことを二度答えるつもりはないよ――などとは言わない。だが、君はそれを知ってどうするつもりかね? 義憤に駆られ、私を罰する? 果たして、君にそれが出来るのかな?」

なぶるような口調。リゼッタの舌が、鉄臭い血の味を感じ取る。いつの間にか噛んでいた唇が裂けて、血が滲み出していた。

(――つまりは、これも“遊び”だったというわけですか)

怒鳴りつけたいのをこらえて、リゼッタは再び深く息を吐いた。

今は冷静に、自分が為すべきことを――

頭の中で乱舞する激情をすべて押さえつけて、リゼッタは一つの疑問に突き当たった。

考えてみれば、この道化師という存在、いろいろなことを知りすぎている。ギルダスの体のことや、聖封教会の司祭という立場のリゼッタすら知らないような術の数々。

すべてを訊くような余裕はなく、リゼッタの口から出た疑問はひどく大ざっぱなものだった。

「あなたたちは……何者で、いったい何がしたいんですか?」

「さて——それに答えると、私に何か得でもあるのかね？」

答えにならない返事をする道化師に、感情の揺れは見つけられない。

これ以上見ていると自分を抑えきれなくなりそうで、リゼッタは反射的に顔を背けた。

元より、答えが得られるなどと期待してはいない。

背けた視線の先には、相変わらず劣勢のギルダスを見る“騎士”の姿があつた。

腕を組んで立っているその男からは、戦いが始まった時にはあつた気だるげな様子が感じられない。

風前の灯火にまで追いつめられたギルダスに向けられたその顔には、なぜか深い笑みを刻まれていた。

そして、無造作に伸びた髪にさえぎられてリゼッタには見えなかったが、その目は——

その双眸そつぱうが放つ光は、ギルダスが見せたのと同じような、獲物を前にした獣のそれへと変わっていた。

28・狂戦士(3)

「ちい……!!」

まるで猛雨まじつのように、息つく暇もない突きの連撃が降り注ぐ。

さっきまでに比べても、さらに速い。見てからでは間に合わず、ほとんど勘で防いでいるようなものだった。

(っ……速すぎて攻撃に手が回らねえ!)

傷を増やししながら、ギルダスは歯噛みした。

(それに……なんだ? さっきから——)

掌中に入れておいた石を、指で弾きとばす。隙をつくるつもりで放った小石は、至近距離にもかかわらずあっさりと弾き落とされた。飛来する石を、ジドは視界に入れてない。

「くそっ……どうなってやがんだ!」

思わず声に出して毒づく。

動きが、読まれている。そうとしか思えないようなことが、これまで何度かあった。

さっきの魂精装具ソレスタを凶にした不意打ちもそうだ。

かわせるはずのないタイミングだった。それこそ、あらかじめくと読めていなければ。

(あの後で殺やられなかったのは、単に運が良かったからだ——)

それを自覚しているだけに、ギルダスの顔つきは自然と険しいものになっている。

間隙なく襲った突きの二連撃が、腕とわき腹を浅く裂いた。

これで何ヶ所目か、数える気にもなれない。すべて浅手だが、数が多ければ流れる血も無視できなくなってくる。

——このままだと押し切られる。

(っ……こいつはどうだ!)

裂帛れっぱくの意志を、手に握った曲剣に託す。それに応じて、ギルダス

の魂精装具ソレスタが変化を見せた。

灰色の刀身に散りばめられた黒い斑が、波紋のように広がっていき。

いくつにも重なり合う波紋は、すぐに刀身全体を覆った。それに合わせたように、刃自体の形がおぼろげになっていく。それだけにとどまらず、曲剣は陽炎かげろうのようにゆらめくと、半透明になるまでその色彩を失っていった。

——この身体になってから、気づいたことがある。

まず、一見この小柄で非力な身体に、意外にも戦い向けの素質があるということ。

単純な腕力では前の体には到底及とっとうばないが、身軽さとしなやかさでは上をいく。連戦が当たり前の戦場では不安だが、戦い方次第ではそれなりにやれるということだ。

そして、これについてはさっぱり理由がわからないが、魂精装具ソレスタが持つ特殊な能力——その力が、なぜか強まってきているということだ。

少し前までは輪郭りんかくをあやふやに見せる程度だったこの異能も、今では半ば透明化に近いものへと変わっている。

そして——

距離をとったギルダスが、体を反転させつつ曲剣を振るった。半ば突きにも近い、片手斬りである。

体をいっばいに使った斬撃だが、その範囲にジドはいない。ギルダスの片刃の曲剣は、厚みはあるが長さはそれほどでもない。

なので、この距離では届かない。

——ついさきほどまでは。

手を通して、さっきまでとは違う感覚がギルダスに伝わってくる。わずかに重く、ひっかかるような違和感——ギルダスはそれを当然のものとして、無理矢理に押さえ込んだ。

ギルダスの魂精装具ソレスタは“伸びる”。

それは言葉通り、刀身が使い手の意志に応じて、長さを変える能

力を宿しているということだった。

その変化にしても、以前までは手首の長さ程度が限界だったが、今では指先から肘ほどにまでの長さを伸ばすことが可能になった。いた。

ゆえに――

半透明になった曲剣は、確実にジドを間合いの内に捕らえていた。刃が肉に喰いこむその手応えは、ほんの数瞬後にギルダスの腕に伝わって――こなかった。

（っ……これもかわすのかよ！？）

ソレスタ魂精装具の異能を知っていたのか、曲剣の輪郭から読んだのか、ジドがあっさりと身を退いて曲剣をかわす。

そのまま流れるような動きで槍を回転させ、逆側の穂先をギルダスの腕へと振りおろした。

腕が両断される直前、ギルダスは身をさらすようにあえて前へと出る。

ガイーン――！

刃同士が衝突するのとは異なる、やや鈍い音が響く。踏み込んだギルダスが、曲剣の柄で穂先を受けた音である。

「あぶねっ……！」

少しでも読み損なえば、指が切り落とされていた。冷や汗が噴き出るのを感じつつ、ギルダスは急いで距離をとる。それを追うように、ジドが前へと踏み出た。

再び連撃の嵐にさらされたギルダスの肩を、槍が浅く抉った。今度は無視できるほどの浅い傷ではない。

ギルダスの表情に、焦りが見え始めた。

――ギルダスの抱いている疑問は、ある意味答えに近いものだった。

ギルダスは気づかない。ジドの持つ両穂の槍が、主が危険にさら

されるたびに鈍く鳴ることを。

その魂精^{ソレスト}装具の異能は、未来予知——とはいえ、なんでも予知できるわけではない。

戦いの中の一手先、相手がどう動くかなど、“見える”ことはその数瞬から数秒先の未来だけだった。しかも、自身の危機に関するものだけという制限もある。

その程度ではあるが、一瞬の気の緩みが死へとつながる戦いのさなかでは、役に立つどころの話ではない。

加えて――

ジドの攻撃に、変化が起きていた。

突き一辺倒だった槍の動きに、円の動作も混じってきている。

遠ければ突き、近づけば槍を回転させての斬撃——おそらく、両穂という変わった形状からして、この戦いかたが本来のものなのだろう。

障害物が多いことなど、何の関係もない。ジドの槍は、盾にした物のことごとくを両断した。木を盾にしてみても、

ズガアッ!!

「どわっ！」

破碎音とともに貫通した穂先が、ギルダスの髪を一房刈り取っていく。引き抜くまでの隙も、ほとんどない。

長物であることの不利など、ほとんどないようなものだった。

（慣れればこれはこれで使いやすい——）

以前に交わした言葉を思いだし、ギルダスの背中が栗^{あわた}立つ。

（こいつのことか……!）

目にも止まらぬ突きと、上下左右から襲いかかる斬撃が、ギルダスの体を削り取っていく。

「っ……ラァ！」

猛撃の合間に、無理やり反撃の手をねじり込む。

曲剣はジドの体へと迫り——途中で割り込んだ槍の柄に阻まれたのみならず——

カシュツ——

軽い音を立てて、刃が柄の上を滑る。

受け流し——そう思った時には、斬撃の勢いを止めきれずに泳いだギルダスの体を、ジドが反転させた槍の柄で打ちすえていた。

「がっ、かはっ……」

骨にまで響く衝撃に、ギルダスは息を吐き出す。

たまに繰り出す反撃も、ジドには届かない。かわされ、穂先で円を描くような動作で巻き込まれ、時には槍の柄で受けられて今のように“流される”。

殺意に染まっただけでも、その動きは流れる水のようによどみない。長年の鍛錬をそのまま実戦に持ち込んだような動きに、ギルダスは少しずつ追い込まれていく。

ためらいを振り払い、使える手をすべて使っても届かない。

その事実が、ギルダスの表情を変えていく。

絶望に染められていく——わけではない。

それどころか、よりいっそう濃くなった殺意をまとい、口は獣じみた笑みを浮かべている。そして——

その目が、不意に鋭く尖った。

その瞬間、何かを感じ取ったのか、追い込んでいたはずのジドが攻撃の手を止めた。そのまま様子をうかがうように、後ろに下がって距離をとる。

ギルダスはそれを追うでもなく、その場で軽く跳ねた。全身に刻まれた傷から流れ出た血が、地面に朱を散らす。

「ふうー……」

一度息を吸うと、麻痺していた痛みが蘇った。全身がひきつるような痛みに襲われ、ギルダスは口元をほころばせた。

（痛いってこたあ……まだ死んでねえってことだよな）

どんなに劣勢であっても、死ななければ終わりではない。

ギルダスは曲剣を肩に担ぐと、そのまま限界まで体を引き絞った。ジドが動く。飛び込みざまに放った突きが、ギルダスへ疾走^{はし}り――大きく弾かれた。

ギルダスの小柄な体を余すところなく使った銀閃が、斜め上へと噴き上がる。

刃の勢いを止めることなく、ギルダスが体を回転させる。曲剣を同じ軌道をなぞった。

引き戻したジドの槍とぶつかり合う。二度目の衝突は、ジドの体を浮き上がらせ、ギルダスの体を沈み込ませた。それでも勢いは止まらない。

沈んだ体勢のままに、腰の下を横薙ぎにする斬撃がジドを襲う。ジドが受け流そうと槍を斜めに構えた。

曲剣の刃が槍の柄と接触し、勢いそのままに流される。それと同時に、ジドの槍が大きく傾いた。

御しきれない剣勢が、ジドの肉を浅く削り取る。

血を流しながら、ジドは槍を引き戻した。

ガガガッ――！

ギルダスの剣舞のような連撃と、ジドの神速の突きが重なり合う。一撃の速さで勝るジドを、ギルダスは隙のほとんどない連撃で押さえ込んでいる。

神速の槍さばきとはいえ、一度突き出した槍を手元に戻すには、わずかな時間を要する。それはジドのような熟練の使い手でも変わらない。

その間が、すなわちギルダスの優勢だった。直線と曲線がぶつかり合い、交差し、二人の傷を増やしていく。

「ガアアアアッ――！！」

ギルダスの口から、獣のような咆哮が飛び出した。

クク――

耳に障る含み笑いに、リゼッタは我に返った。

「大した猛攻ではないか」

誉めるような言葉を、なぶるような声音で道化師は吐き出す。思わず視線を向けると、道化師は愉快でたまらないといった様子で肩を揺らしていた。

「しかし――あれでは長続きしないだろうね」

「それは……」

リゼッタが言葉に詰まる。

おそらく、ギルダスは呼吸をしていない。だからこそあれほどの猛攻が可能なのだ。そうでなくても、あれだけの動きが長続きするはずがない。

あの猛攻が終わった時、おそらくそれが、ギルダスの――

いつの間にか握りしめていた手は、血の気を失って青白くなっていた。

ギルダスの咆哮が耳^{じだ}を打つ。

それに反応して、リゼッタの視線を再び目の前の戦いに釘付けになる。

リゼッタの意識は、完全にギルダスとジドの戦いに向けられていた。他のことなど――ましてや、戦いが始まってから一言も口を開いていないルキアのことなど眼中にもなかった。

だから、気づかない。

それまで立っているだけだったルキアの目に、確固たる決意が宿り始めたことに、彼女は最後まで気づかなかった。

ガガ、ガガガガガッ！！

連撃、連撃、立て続けに鳴る刃同士のぶつかる音が、ギルダスの猛攻の凄まじさを物語っていた。

絶え間ない連撃に、すでに体は限界を迎えつつある。極限まで集中し、全身を動かしている代償は目に見える形でギルダスの体力を削っていった。

体がきしむ。汗がこぼれる。少しでも気を抜けば、その時点で意識が途切れるだろう。少しでも止まって、思いきり息が吸いたい。

だができない。それをした時が、人生の終わりだ。それをわかっているからこそ、ギルダスは動きを止めない。

赤髪の傭兵は、荒れ狂う竜巻と化して捨て身の連撃を繰り返す。

それこそ、動きを読まれていても関係ないとばかりに。

最後の選んだ手段は力押し。勝算などは、もちろんない。

小細工は通じない。地力では劣っている。だからこそ、ギルダスは唯一勝っているものに賭けた。

それは、死線をかいくぐってきた回数と経験だ。

ジドが殺しを封印してきたのは何年前からだかは知らないが、命を奪い合うようなやりとりならこちらに分がある。

（なんせ、こちら一回くたばっているんでな——！）

年季が違う。

不殺を貫いた者と、死出の旅路から舞い戻った者——両者の殺意は、斬り結ぶという分かりやすい形で競い合っていた。

ギルダスの曲剣が——

ジドの槍が——

お互いの殺意を乗せて、一際速く、強くぶつかりあった。

「……！」

「があっ！」

ギルダスが勢いに負けてたたらを踏み、ジドは——不動のまま、
槍を構えていた。

「ちっ——」

（届かねえ、か——）

おそらく、一秒と経たないうちに自分は致命傷を負う。それがわ
かっている、ギルダスは腕に力を込めた。

相打ち狙いの斬撃に、最後の力を託そうとして、

「ジド——！」

ルキアの叫びとともに放たれた一矢が、ギルダスの運命を変えた。
それまで完全に無駄がなかったジドの動きが、初めてほころびが
見せる。

飛来する矢をかわしつつも突き出された槍が、ギルダスの胸を抉
った。が、それだけだ。皮を裂き、肉を抉ったが、骨の奥にまでは
届いていない。

とっさにギルダスは槍の柄を掴んだ。それを引き寄せるようにし
て、ジドの懷へと潜り込む。

思考が行動に追いつかない。それでもこれが最後の好機だとい
うことは直感的に悟った。

本能のままに身を任せ、ギルダスは曲剣から手を放す。それと同
時に、ギルダスの周囲から、炎のように赤い粒子が湧き出した。

それは初めてジドと戦った時、結局は使うことなく終わった“奥
の手”だ。

ドクン——！

心臓が、一度だけ大きく脈動した。鈍い痛み、ギルダスは顔を
しかめる。

その間にも、湧き出た粒子は次々とギルダスの手の周りに集まっ
て一つの形を為した。

ギルダスのものであり、本来はこの体の持ち主のものであった赤

魂精装具^{ソレスタ}——具現化したその短剣は、柄から刃まで、すべてを燃え盛る炎のような赤で統一されていた。

「——アアッ！」

まだ粒子をまとわりつかせたその赤い短剣を、ギルダスは呼吸とともに思い切り突き出す。肉を貫く鈍い感触が、手のひらに伝わった。

至近距離で、ジドとギルダスの視線がぶつかりあう。ジドの表情は、ぴくりとも動いていない。

胴体を狙った短剣は、突き刺さる直前に遮られた太い腕に突き刺さっていた。

ジドが短く持った槍を降りかぶる。その先端がギルダスめがけて降りおろされる直前、ギルダスが薄く笑った。

次の瞬間、ジドの体が炎に包まれた。

「……！」

ジドが声にならない悲鳴をあげる。

前触れもなく噴きあがった炎は、燃え広がることもなく一瞬で消えた。

——否、ジドの腕に刺さったままの赤い短剣へと吸い込まれた。炎を生み出し、操る。それこそが、この魂精装具^{ソレスタ}の持つ異能だった。

見た目は派手だが、人を焼きつくすほどの熱量はない。それでも、意表をつくには十分過ぎる。致命傷にはならなくても、その布石にはなリエる。だからこそ、この一撃だった。

短剣から手を放し、ギルダスは地面に落ちる寸前の曲剣をすくい上げた。

地面を踏みしめ、残った力のすべてをこのひと振りに——

ドクン——

ギルダスの心臓が、大きく脈打つ。今からやろうとしていることへの抵抗感が、ふいに沸き上がる。

“ダメダ——！”

内から響く声が、ギルダスの頭をかき回した。その声が、ある一つのイメージを結ぶ。必死な様子で、声を張り上げる少年——その見た目は、今のギルダスとほとんど同じものだった。

ギリ——

「関係ねエ奴が——」

歯を噛みしめて、ギルダスは無理やり“声”を抑えつけ、

「今さらしやしやり出てくんじゃねエよ！」

激昂とともに、曲剣を振りきる。

騎士に刻まれた胴体の傷——今はもう塞がったそれをなぞるような斬撃がジドの体をかけぬけた。

29・果て（1）

すべてが静止したような空気の中、一陣の風が頬を撫でた。

曲剣を振りきった体勢のまま、ギルダスは目を閉じる。確かな手応えを感じていた。

斬った――

手加減もためらいもない、命を奪う一撃。何度も味わい、そのたびに命の灯を消してきた。

「詫^わびは入れねえ」

ぽつりと呟く。

仕方なくやった、などとは口が裂けても言えない。言うつもりもない。

「――ああ、それでいい」

すぐそばから声がした。それほど間もないのに、久々に聞いたような錯覚を覚える。

驚いて目を開くと、穏やかな目をしたジドが笑みを浮かべていた。肩から脇に、深々と裂傷を負いながら。

「おま――」

腕に刺さったままの赤い魂精^{ソレスト}装具が粒子と化し、乱舞しながら虚空へと消えていく。

その様子に気をとられたほんの一瞬、その一瞬の間に、ジドはギルダスに背を向けて疾走していた。

「オオオオツ！！」

槍を前に携^{たす}え、雄叫びをあげながら騎士に突撃する。
「なに！？」

驚きに声をあげつつも、騎士は背中の大剣を抜き放ち頭上に構えた。

――ボヒュッ！

そのすぐそばで、炎が炸裂する。騎士の意識がジドからそれた。その視線の先には、短剣を投げ放った体勢のままのギルダスがいる。ジドの槍が、神速の速さでもって突き出された。瀕死の重傷を負っていることなど微塵も感じさせない。それは、ジドの錬磨と研鑽の生涯をただの一撃に詰め込んだがごとき突きだった。

音が、重なる。肉を穿つ音と、断ち切る音。

目を見開いたギルダスの視界に、斬りとばされ、宙を回転するものが映る。

「——見事」

騎士が一言呟いた直後、ジドの体はつんのめって前に倒れた。ギルダスが齒を軋ませる。断たれたジドの右腕が、すぐ近くに落ちて転がった。

騎士が、腹に刺さった槍を引き抜く。穂先を半ばまで埋めたところで、ジドの槍は止まっていた。浅くはないが、致命傷でもない。それが、ジドが右腕と引き替えに与えた傷だった。

「おいっ！」

ギルダスは急いでジドの近くへ駆け寄る。

目も、肌の色も、すでに元へと戻っていた。皮肉なことに、そのせいでジドの傷の深さがはつきりと理解できる。一目で長くないとわかるほどの傷だった。

「……すまん……嫌な役回りを、させた」

うつ伏せになったまま、ジドがかすれた声を出した。

「おまえ、全部憶えて……」

「ああ……」

抑えきれない後悔が、声の端からにじみ出た。

「……ったく、まっただ」

「ルキアを……呼んでくれないか……？」

「すぐそばにいる。待ってろ」

「——その必要はないよ」

ギルダスが体を硬直させる。

「出番を終えた“役者”には退場してもらおう。いつまでも舞台に居残っていられても迷惑なのでね」

「ダメ——」

振り返ったギルダスの視界が、黒一色に染められる。曲剣で斬りつけると、それは布に近い感触を残して消え失せた。

「チィッ！」

すでにそこには道化師の姿がない。

「ギル！ 後ろです！」

リゼッタの声を頼りに振り向く。息を呑んだ。ジドの体に覆い被さるように、道化師が空中から舞い降りてくるところだった。

とっさに放った斬撃は、柳の葉のような手応えをのこして道化師の体をすり抜ける。

クク、と含み笑いをこぼしながら、道化師が落ちてくる。どうやってかはわからないが、何をする気かは明白だった。

「ジドッ！」

ギルダスの叫びと、

フォン——

風を切る音が重なった。

道化師の体が、二つに別れる。

「な……？」

ギルダスは信じられない思いでそれを見た。前に会った時には触れることすらできず、あれほど得体の知れなかった道化師が、目の前で真つ二つに断たれていた。

「ぐあああああつ——！」

断末魔の悲鳴をあげながら、道化師の上半身が地面に落ちる。しばらくばたばたと手を打ち振ったあと、動きを止めた。

——死んだ。

あれほど得体の知れなかった相手が、今、目の前で。

「……何のつもりだ、てめエ」

ギルダスの目が、大剣を再び鞘に納めた騎士を見る。戦いを終えた後に襲いかかってくることは考えていたが、これは予想外だった。ギルダスの問いには答えず、騎士が口を開く。

「下らぬ真似は止めろ、道化師。すぐにこの場から去れ。もはや貴様の出る幕ではない」

「なにを——」

言いかけ、ギルダスの目が驚愕に見開かれた。

クク——

驚いて振り向く。上下に別れた道化師が、空中に漂っていた。断面からは血が流れている様子もない。

「なっ……」

「なるほど、失敬。君にはこんな猿芝居は通用しないようだ。だが、何故——と理由だけ聞いておこうかな？」

「その男が最後に見せた、意地ゆえだ」

騎士の言葉に、道化師はやれやれとばかりに肩をすくめた。体を分断されても、その振る舞いはまるで変わっていない。死んだように見えたのは、演技だったらしい。

比喩^{ひよ}ではない、文字通り化け物のような存在に、ギルダスは目を奪われる。その眼差しすら楽しむように、道化師は体を漂わせた。

「ふむ、仕方ない。今回は騎士殿の顔を立てて、この場から退こうとするかね。今回の舞台は大して楽しめなかったが——とはいえ、そういうこともたまにはあるのね。だからこそ遊びがいがあるというものだ。では……次に会う時を心待ちにしているよ」

ギルダスに顔を向けて言うなり、道化師の体を中心に黒い渦が生まれた。その渦に飲み込まれるように、道化師の姿は消えていった。

「な……なんだありや……？」

啞然とそれを見ていたギルダスは、はっとして騎士を振り向く。視線に気づいた騎士は大きく距離をとると、木の幹を背にして腕

を組んだ。

「……」

どうやら、邪魔をする気はないらしい。

それを察したらしく、すぐにルキアとリゼッタが近寄ってきた。

「ジド」

「ルキア……か」

ジドが呻く。見かねたりゼッタがしゃがみ込んで、ジドを仰向けに寝かせた。その間にも、土に染みる血の量は増えていく。

「よく……止めてくれた」

「礼など……！」

睨みつけ、唇を噛む。

「あたしは……ジド、おまえが嫌いだ」

「知っている……」

「力を持つとるくせに、みんなやシサラの——姉さんの仇を討とうとしなかった！」

「言い訳する気……は、ない」

「戦士の誇りをなくしたおまえが憎かった！」

「……」

「だけど、それ以上に……あんなふうに戦うおまえを見ていたくなかった……」

ルキアが顔を伏せる。顔を伝った滴が、ぼたぼたとしたたれ落ちた。

「泣くな……ルキア……」

「っ！……誰も泣いてなぞおらん！」

ふっと、ジドが息を吐き出す。幼子のわがまを聞かされた時の、困り顔に近い微笑を浮かべていた。

「ルキア……頼みが——」

光を失いつつある目が、ルキアに向けられた。こふっ、と血を吐く。

「っ！ ジド！」

ルキアがしゃがみこんだ。

ジドは息を荒げている。もう喋ることすら難しいだろう。胴体と腕の断面からは、おびただしい量の血が流れている。

「復讐に駆られるのは……かまわない。俺には……止める権利……ない。……だが——」

震える指先が、ルキアの頬に触れる。

死に至る寸前の言葉を、ルキアはどう受け取っているのかわからないといった顔で聞いていた。

「復讐のために……何かを捨てるのだけは……それだけは……」

ジドの声が、途切れ途切れになる。ルキアが少しずつ下げっていくジドの手に、自らの手を重ねた。

「頼む……おま、えは……おまえ、の、まま、で……」

声が途切れる。開いたままの目から、光が失われていく。

「あ——」

吐息に近い声が、ルキアの口からこぼれた。

ジドの体が、壊れていく。末端から砂のように崩れ、形を失っていく。

拾い集める暇もない。

ジドだったものの塊が、風に流されどこかへ散っていく。最後に残った一部も、ルキアの手からすり抜け、地面に落ちる前に風にさらわれた。

後に残ったのは、ジドが流した血の痕跡だけだった。

ザッ——

足音に振り返ると、騎士が距離をおいて立っていた。

ギルダスは、騎士とルキアを視界に入れるように動く。もしルキアが激情に身を任せて動けば、すべてが台無しになる。元々勝ち目がないのに、今は体中に傷を負っている。少しでも気を抜けば、今にも倒れそうだった。

ギルダスの警戒をよそに、ルキアはうつろな瞳で血の跡を見つめている。

その姿にどうしようもないやるせなさが沸きあがる。

黙って相手の対応を待っておられず、ギルダスは問いかけた。

「……なんでわざわざ待ってた？」

「さっき言つたとおりだ」

おざなりな受け答えが、ギルダスの頭に血をのぼらせる。

「はっ……義理堅いこつたな。今さら善人面しようってか？」

「くだらぬ」

「あ？」

「善も、悪も、所詮は力の外側を飾るものでしかない。くだらぬことだ」

「……てめエのご高説なんぞに興味はねエよ。だがな、元はといえばてめエが——！」

「それがどうした」

ぶつけようとしたギルダスの怒りは、たったの一言で遮られた。

騎士の体から放たれる威圧感が、物理的な圧力となってギルダスの言葉を奪う。

「気に入らなければ、この体に貴様の刃を穿てばよかるう。道化師と違い、己は斬られれば死ぬぞ」

ギルダスは悔しげに唇をゆがませた。

それができていれば、最初からそうしている。不可能だと思ったからこそ、ジドと戦ったのだ。

「憶えておけ。己は弱き者の言葉など、一片の価値も認めん」

一際強い視線をあてたかと思うと、騎士は踵を返した。無防備な背中を前にしても、ギルダスは動けない。

「今の貴様に期待はせん。命が惜しくば、次に会う時まで腕を磨いておけ。さもなければ——」

背中の大剣に、その手が触れる。

「我が黒剣が貴様を喰らう」

かすかな闇の気配が、鞘からこぼれ出た。

「己^{おれ}の名はクゾート。この名を忘れるな」

名乗った騎士——クゾートの姿が見えなくなるまで、ギルダスは
その背中を睨みつけていた。敗北感と屈辱に、その身を焦がしながら。

30・果て(2)

ひと繋がりの道であっても、国が変われば名が変わることは珍しくない。

ギルダスは名称が変わったばかりの街道で立ち止まると、振り返って通り過ぎたの建物を仰ぎ見た。そこには、そびえ立つ砦がある。国境に設けられた、関所も兼ねる砦である。

ギルダスにつられて、リゼッタとリリーネもその威容に視線を移した。

正直なところ、もう二度とこの砦は越えたくないと思う。

もう一度訪れることがあれば、その時には苦い思い出がよみがえるだろうから――

「ギル」

「ああ……」

リゼッタに促されて、歩き出す。

会話はない。本来の目的は果たしたはずだが、そんなことなどすでに頭の片隅にしか残っていなかった。

あの後――

戦いで傷ついた体を癒すため、ギルダスたちはいったん集落へと舞い戻っていた。

傷が癒えて動けるようになるまで、三日の時を要した。失血と疲労が、体力的に恵まれているわけではない小柄な体を回復させるまでにそれだけの時間を要求したのだ。

ようやく動けるようになると、ギルダスたちはすぐに出立した。うつろな瞳のままの、ルキアを連れて。

また狙われるかもしれない――それがルキアを連れていくことを提案したリゼッタの言い分だった。

そのルキアは、今ここにはいない。

集落を出た後でまた姿を見せた密偵に、リゼッタは彼女を託した

のだ。安全なところに保護してもらうと告げて。

その間、ルキアはまったくのされるがままだった。自分から動くとはしない。何かを主張するわけでもない。

ギルダスには、今の彼女が自分の進むべき“道”を見失っているように思えた。

「まったく……」

頭をかきまわしながら呟く。

ルキアのことを思い出していたが、他人のことを心配している余裕はない。

騎士——クゾートが最後に告げた言葉は、ギルダスにとって死刑宣告を受けたに等しい。

（——どうにかしなきゃならねエが）

相手が常人なら、逃げの一手を選んでいるところだ。

だが、それで逃げきれぬ相手とは思えない。ましてや——

（こいつらが殺されたら、困る）

後ろを歩くリゼッタとリリーネを尻目に、そう思う。

道化師の話が事実なら、ギルダスが戦いを避けていれば、復讐心を煽るためにそうしてもおかしくはない。

それで自分が復讐心を抱くかどうかは別にして。

なぜ困るのかといえば、リゼッタは金払いのいい依頼人だし、リ

リーネは——彼女も、依頼の一環だ。

それに——

（借りは、返してエ）

ジドの死を思いだし、唇を引き結ぶ。望みもしない戦いの果てに、

ジドは死んだ。自分が、殺した。

決断したのは自分だが、その状況を作ったあの男に、せめて一太刀は浴びせたい。

とはいえあの時は相手にもならず、ただ試されただけである。

「……鍛えるか」

口中で呟く。

何もしないで時が過ぎるのを待つより、よほどマシだと思った。
だが、どれぐらいの力を身につければ、あの男と渡り合えるようになるのか——それについては、まったく見当もつかない。
(どうしたもんかな……)

ギルダスが密かに頭を悩ませている時、リゼッタもまた無言で考え込んでいた。

脳裏には、クゾートと名乗った男と、道化師の姿を思い描いている。

「いったい、何者なのか——」

聖封教会の中枢に近い立場のリゼッタでさえ知らないことを、彼らは知っている。

さらに、自分と自分が伝えたごく一部の人間以外知らないギルダスのことを、道化師はあっさりと見抜いた。

「なぜ——？」

疑問が頭をかけ巡る。黙考して、頭を左右に振った。
考える材料が少なすぎる。

聖封教会にいたら、一度調べてみるべきだろう。あそこなら心当たりのある人物がいるかもしれない。

(リリーネを預けたら、すぐに出るつもりでしたが)

リゼッタにとって、あそこはあまり長居をしたい場所ではない。
意識して作っている無表情にほころびができる。

リゼッタが感情を表に出していることを自覚する寸前、控えめな声がかけられた。

「あの人……どうなるんですか？」

リリーネが自分から何かを話すことは珍しい。振り返ったりリゼッタは目を瞬かせた後、

「気になりますか？」

リゼッタの問いかけに、リリーネは小さく頷く。

「大切な人を失う気持ちは……私にもわかります、から」

一瞬リゼッタの目に、痛ましいものを見るような光が宿った。

「とりあえず、身の安全は保障できます。ですが……彼女が精神的に立ち直れるかは別の問題でしょうね」

復讐を誓い、その仇を横取りされ、曲がった憎しみを抱き、果てには再び親しい者の死を目の当たりにした。しかも、その死には自分も関わっている。

今のルキアがどんな心境なのか——それは、当人にしかわからないことだろう。

「なんとか……してあげられないんですか？」

懇願するような響きを含んだ訴えに、リゼッタは心苦しい気持ちになった。

ギルダスから話は聞いている。この少女にとって、ルキアはまぎれもない恩人なのだろう。それでなくても、繊細な性格の持ち主である。

「彼女自身の問題ですから、私たちにできることはあまりありません。ですが、もし……状況が落ち着いたら様子を見に行きますか？」

「え……」

「お見舞いというわけではありませんが、会って話すだけでも違いかもしれません」

あるいはそれは、あの時のことを思い出させるだけに終わるかもしれない。それでも、自分たちが直接ルキアにできることはそれくらいしか思いつかなかった。

それに、まだ先の話のことである。実現するかもわからない。とりあえずは、リリーネを聖封教会本部に連れていかなければならない。

リゼッタの提案に、リリーネはためらいの表情を浮かべた。視線をさまよわせた後、うかがうようにギルダスを見る。

立ち止まって二人の会話を聞いていたギルダスは、う、と低く唸った。

「……ま、少しぐらいならいいかもな」

額の傷跡をなぞりながら、答える。内心では、

（俺は会わないほうがいいだろうけどな）

と付け加えていた。

安心したようにリリーネが表情を和ませた。

その顔を見て、少しではあったが気持ちがほぐれる。リゼッタも同じ思いなのか、発する雰囲気さっきまでの尖ったものとは変わっていた。

（思い詰めてても仕方ねエかな）

辛気くさい考えに没頭していても、状況がよくなるわけでもない。半ば開き直りに近いことを自覚しつつ、ギルダスは歩きだした。

「――仕切り直しだ」

沸き上がる思いを、口にしながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3886k/>

ウツロイダマ2 復讐者たちの宴

2010年10月8日11時29分発行